短編集by???second

???second

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※『ウルトラマントリガー×ありふれた職業で世界最強』の設定一部公開

これは、

『1度書いてみたいとは思ったけど、時間やリアルの都合、精神的疲労などでやむなく連載を断念したもの』、

『誰かに書いてほしい』

『1度は見てみたいもの』

…そういったものを短編ものとして投稿したものです。

原作名を「ウルトラマン」としているのは、今のところそれしか用意できた短編がないためです。

1部ネタバレを含んでます。注意してください。

短編ものゆえ、完全な不定期更新で、長続きするかの保障もできません。

目次

とりあえず想像してみた・ウルトラ編（随時更新）――1
とりあえず想像してみた・ライダー編（随時更新）――14
とりあえず想像してみた・その他編（随時更新）――24
ウルトラマンネクサス―ＡＬＴＥＲＮＡＴＩＶＥ―――54
思いついたマブラヴネクサスの設定――68
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（１）――72
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（２）――82
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（３）――93
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（４）――105
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（５）――112
ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（６）――119
インフィニットウルトラマンジード（１）――130
インフィニットウルトラマンジード（２）――145
インフィニットウルトラマンジード（３）――159
インフィニットウルトラマンジード（４）――171
インフィニットウルトラマンジード（５）――188
ありふれ×ウルトラマントリガー――206

とりあえず想像してみた・ウルトラ編（随時更新）

○ウルトラマンジード×インフィニットストラトス

一夏と千冬は、母親は同一だが父親が違う。千冬の父は彼女が幼く一夏が生まれる前に亡くなる。

一夏たちの母は、束の科学者としての師に当たり、彼女の才能を開花させた。一方でクライシス・インパクトで記憶を無くし彷徨っていたベリアルを保護し、愛し合った結果、一夏が誕生した。しかし、記憶が戻ったベリアルの本性を知り、二人とも子供たちを残して蒸発する。

一夏は自宅を破壊された後、実父にあたるベリアルの秘密基地で暮らし始め、束とクロエもそこを使っていた。座標設定で自由に動けるため、原作のように寮生活を送ったり、電車を利用することがほとんどなくなる。

ライハのポジションには剣士つながりで箒。モアポジには千冬。彼女らをはじめとした仲間たちから戦い方を手ほどきされていく。性格はほぼ原作。

束は一夏の父がベリアルであることを知っているが、事情が事情なだけに隠していた。

ＩＳ開発のきっかけは、記憶のないベリアルの話にある宇宙に憧れを抱き、さらに武装機能を加えたのは、クライシス・インパクトの話を真実だと確信し、本性を露わにしたベリアルが起こす後の事件に備えたことによる。

一方で、大好きだったが道場を継がせようとする厳格な父に科学者としての道を嫌悪同然に拒絶されたショックで原作の人格となり、親に反発して家出。白騎士事件の真相は、自分の力を父に見せつけることによるものでもあった。現在は一夏とクロエの対応によって徐々に軟化しつつある。

原作のように学園には通わないことも検討する。

ゼロは怪獣に襲われた蘭を庇って死亡した弾と一体化する。

一夏はジードとなった後、世間からベリアルに似ているから、とい

うだけでなく、ＩＳの権威を落とす汚らわしい脅威として女尊男卑主義の女性からも批判され、悪いことに序盤はＩＳ部隊から攻撃を受ける。しかし男女平等に人間を守る姿勢が次第に評価され、逆に攻撃を加えたＩＳ部隊が批判の的になっていく。

○盾の勇者の成り上がり×ウルトラマンジード

変身と変心、それぞれの理由で目つきが悪くなってしまい、物語当初では人々から信頼を得られなかった主人公つながり。

災厄の波による魔物の出現に伴い、全く異なる世界から怪獣もなだれ込んでしまう。また、異世界を狙う宇宙人たちもまた押し寄せ、ひそかに侵略計画を練る。

波によって出現した怪獣に、他の勇者たちは経験値狙いで無謀にも立ち向かい、尚文も王の強制で嫌々ながらもラフタリアを連れて応戦する羽目に。いくら勇者とて、魔物以上に規格外な怪獣の前では全く歯が立たず、他の勇者たちは敗北。しかも尚文はラフタリアを庇い、勇者の盾の防御力でも防ぎきれない一撃を食らって死んでしまう。尚文までも死んでしまい、絶望の淵に立たされたラフタリアの思いに応えるように、別次元から波の襲来に乗ってウルトラマンジードが飛来、尚文と一体化して怪獣を撃破した。

怪獣からすさまじい経験値を得たことで尚文と、同行者設定していたラフタリアはレベルが一気に上昇（それでも人の身であるためどのみち怪獣には及ばないうえ、クラスアップ制限もあって限界突破級の力は得られない）。

また、盾の勇者である尚文との一体化の影響で、ジードはジードクローなどの武器が使えなくなってしまい、当然キングソードとギガファイナライザーも使えず、ロイヤルメガマスターやウルティメイトファイナルへの変身ができなくなってしまう。

助けられたにも拘らず王はジードに感謝するどころか、波の魔物の一種だと決めつけてジードを討伐対象に。しかも波の魔物の親玉がジードであり、人間の味方のふりをしているだけ、いわゆるマッチポンプで信頼を得たところでこの国を支配するつもりだと暴言を吐く。

実際にはジードに対する恐怖心と玉座から引きずり落されることを恐れてのこと。だがジードの得体の知れなさ故に根拠もなしに同調してしまう貴族や国民たちが続出する。

尚文は王に対する憎悪を深めるが、ジード＝リクはウルトラマンとして戦い始めた頃に一度経験したこともあって我慢することを尚文に促す。

マルティ、三勇教教皇らは宇宙人たちとの繋がりを持ち、怪獣を使役するようになる。マルティは特定の場所で怪獣を暴れさせ、破壊。その地の復興と称して値打ちの物品の強奪や火事場泥棒、生き延びた民から税の徴収を加速させ、王女とは思えぬ暴君ぶりを発揮する。

その後は侵略を目論む宇宙人や、波の影響で異世界から現れ潜伏し、あるきっかけで暴れだした怪獣と戦う尚文。それでも王のせいで国全体からジードも信頼は得られないが、次第にジードと尚文のことを認めていく人々が増える。

しかし尚文と王が決定的な決別を果たした時期、王は証拠がないにも関わらずジードが尚文の変身した姿だと決めつけ（偶然にも当たっているが）、原作と異なりマルティの独断ではなく、自らの勅命として抹殺命令を下す。

原作での教皇との戦いに入ると、マルティは教皇から自らの身を守るために怪獣を出現させ、これによってマルティがこれまで怪獣を暴れさせていた張本人であることが露見してしまう。自分の身を守らせることでしか怪獣を操らない姿勢のため、自分を妄信する元康させも巻き添えにする戦い方をする。

しかし教皇はそれ以上に強力な怪獣と融合、怪獣の力と英雄武器のレプリカの力を併用してマルティの使役する怪獣を倒してしまう。ラフタリアとフィーロを守るため、やむを得ず尚文はジードに変身して戦うも、予想以上の敵に苦戦を強いられ、憤怒の盾をジードの姿のまま使い、危うく暴走の危機に陥ってしまう。

ラフタリアが、ウルトラマンエースが一時期男女二人の人間と一体化したように、自らもジードと一体化することを決断。これにより、再びジードは武器を使うことが可能となり、また尚文の暴走も抑え込

むことに成功し教皇を打ち破る。
その後、尚文への冤罪共々過去の罪状が露見したマルティは、教皇と共に、原作と異なり、改名の刑の後で処刑が下され死亡。後の歴史書ではマルティは原作通り「ビッチ」の名前で伝わり、王女でありながら王家の顔に泥を塗ったとして「マルティ」の名は悪女、淫売、裏切り者、恥知らずの代名詞として用いられることに。
当然ながら王も娘の悪行を見抜くこともいさめることもせず、無実の盾の勇者をないがしろにして危うく国を滅ぼしかけたため女王によって解任、離婚させられ、名前も原作通り「クズ」にされる。
元康はマルティに裏切られたショックで、外伝作品の槍直しとも異なり廃人寸前に陥り、尚文ともやりきれない形で和解する。皮肉にも原点と異なり、尚文たちとまともな目線で接するようになり、有能キャラとなって仲間になる。
尚文とジードは、人に対するものの見方の違いで意見を対立させることもあり、当初はその心の食い違いのせいでプリミティブ以外の形態への変身ができないときも。二人の意識はそれぞれ独立しており、リクの人格が尚文の姿のまま表に出るため、あたかもやさぐれる前の尚文に戻ったほどに性格が一変したようにも見られ、ラフタリアたちは反応に戸惑いを見せることも。
処刑されたマルティだが、その後あるきっかけで生き借り、ダークリングを手に入れて再び暗躍する。
また、波と共に襲撃してきたグラスたちも波の怪獣たちによって被害を受け、尚文たちとこれをきっかけに手を組むことになる。

○ウルトラマン×ガンダムシリーズのいずれか
原作通り宇宙戦争に乗り出しているガンダム作中の組織だが、ウルトラシリーズの侵略者たちが人間に擬態し、敵味方両サイドの内部から密かに魔の手を忍びよせていく。組織のやり方がそれぞれ横暴、卑劣さを増していき、ガンダムの主要キャラたちは自分の組織も悪い方向に傾いていることに気が付き違和感を覚えるが…。
星人たちの企みに気付いたウルトラマンのいずれかが派遣され、主

人公たちに協力する。

○ウルトラマン（ウーマンって言うべき?）ジャンヌを主役とした作品

「ウルトラマン妹」本編から長い時を経て、ようやく一人のウルトラ戦士として心身ともに成長したジャンヌ。ドジこそなかなか治らないが、小説本編の時と比べて単独で怪獣や星人を撃破できるようになっていた。そんな彼女が、任務で別次元へと派遣される話。

クロス先の一例として、ストライク・ザ・ブラッド。

第４真祖暁古城の存在は光の国でも危険視され、光の国側の監視者として、ジャンヌが派遣される。「大人っぽい外見の方が大人のウルトラ戦士として貫禄がある」「怪獣の方のツインテールと被る」という理由で、ツインテールからサイドテールに変えている。（これが他の誰かから見て大人っぽいかどうかは不明だが）

ジャンヌのこの作品における能力は、『第４真祖の眷獣と一体化し、それに伴うタイプチェンジを行う』というもの。当然眷獣たちの能力を扱うことができるようになるが、その力をコントロールしているのはジャンヌであるため古城単独で眷獣を扱うよりも被害を抑え込むことができる。ただし一体化タイプチェンジしている間、一体化している眷獣は一度分離しないと古城は使用できない。また完全なコントロールができているわけではないので、本来の使用者ではないジャンヌに時折逆らうこともあり、ジャンヌへの負担にもなる。

雪菜たち同様、ジャンヌも古城に恋慕してしまうが、いつか地球を去らなければならない立場であるため、その想いをひた隠しにしている。しかし古城に血を吸われてしまうことは確定。凪砂が魔族恐怖症であるため、それを考えて絶対に正体を明かさないように配慮している。

サブトラマンとして男性のウルトラ戦士を派遣するか、雪菜と一体化させるか、あかりに擬態するかは検討。

○ウルトラマンＲ／Ｂ×ブレイブルーシリーズ

ラグナを主役とした最終章『セントラルフィクション』後。
世界を救うために、自ら悪として世界から排除されたラグナが、ウルトラマンがらみのとあるきっかけで現代地球に転生。その地球では、その世界におけるブレイブルー本編内で出会った主要キャラや組織たちが登場するが、実はラグナがかつて生きていた世界を基点に独立して誕生した。ギャグシナリオ要素も含めて人間関係や設定がある程度構築されている。
ルーゴサイトに敗れ死し、肉体を持たない霊体となったロッソとブル。未来で妹が兄である自分たちの無念を晴らすために地球を犠牲にし復讐を果たそうとすることを知る。それを阻止すべく、素質のある人間を求め続けた結果、存在が消滅しかかったラグナの存在を感知し、彼の行動に感銘を受ける。自分たちでは使えなかったマコトクリスタルが反応、その力で彼を真の存在として定着させ、新たな並行世界を作り出した。その後ラグナともう一人、素質のある戦士に自分たちの力を受け継がせ、自分たちに代わって地球を守り、妹の暴挙を止めることを願いながら、ルーブジャイロの中で眠りにつく。
変身するのはラグナとジン。当然ラグナがロッソ、ジンがブル。
ルーブクリスタルやルーブスラッガーも持つが、原作で彼らが使っていたアークエネミーなどの装備も登場。普段はウルトラマンたちのルーブクリスタルと同じクリスタルの形で保管されている状態を検討。
ジンとノエル（サヤ）たちと共に孤児院暮らしではあり、弟妹たちはそれぞれ別の家に引き取られるが、現在も変わらず同じ町で暮らしている。ニューとラムダは親戚であり、ノエルの引き取り先での姉妹。
ラグナは原作どおり乱暴さこそあるがいい奴。しかしその荒っぽさもあって学生時代はジンやノエルと異なりかなりの問題児。そのためジンに恋焦がれているツバキ（ちなみに学生当時は風紀委員）からは今も煙たがられる。
ジンはたまに馬鹿をやらかす兄に呆れることはあるが、殺意を沸かせたりすることもなくいたって冷静で穏やかさであるため、原作ほど

兄であるラグナとは距離が見られなず、ツバキとの関係も男女のそれにより近い。しかし酒に酔ってしまうと原作の彼がユキアネサに精神汚染されていたり、ギャグシナリオで見せたような暴走（笑）状態に陥ってしまうことも…。

ノエルはギャグシナリオ同様、ある理由からラムダ、ニューと共に三姉妹怪盗をしている。ラムダとニューもラグナたちと同じ元孤児院暮らしだが独立してカフェを開いて働いている。二人の性格や設定は元になったギャグシナリオがベースになっているため、ニューは本編で何度も見せたヤンデレは見られない…が、ラグナが他の女とくっついてるのを見て嫉妬しすぎると…。

セリカはラグナを強く慕う女学生…というか嫁候補的な存在でノエルらとは同級生。原作同様に彼への献身およびアプローチを行う。が、それが時々ニューやナインの暴走を招く。一方でラグナに対して勘が鋭いのか、彼がウルトラマンであることを次第に察していく。

獣兵衛は猫型の異星人設定で、近場で武術の道場を開いており、ラグナは弟子。原作どおりナインと結ばれているが、原作と異なり夫婦仲はいたって良好なため平穏で幸せな家庭を築いている。二人の子であるココノエは原作どおりの天才科学者であり、この世界では年齢がラグナたちと近い。獣兵衛ともそれほど不仲ではないが、対応の仕方はほぼ原作通りのため、娘の反抗期に対して獣兵衛は気が気でない。

オーブダークは当初、チェレーザかＢｌａｚｂｌｕｅシリーズの悪役の誰かが変身するが、ウルトラマンルーブ登場後は黒つながりでカグラが変身。味方サイドのウルトラ戦士となる。三人がいる状態でトリプルオリジウム光線を撃つ場合、後ろに立っていたオーブの幻影の代わりに、オーブダークがオリジウム光線を放つものとなる。

最初にチェレーザが変身する場合、オーブリングＮＥＯが奪われた後は執拗に奪還を目論んでカグラを襲うが、ことごとく敗れ去り、最終的に自身のヒーローに対する歪んだ思考を指摘されて完全挫折し、退場。

グリージョの変身者はノエルを検討。
この世界にレイチェルとその血縁者らは存在しない。
原作の最後で仕留めていたはずの敵、ユウキ＝テルミやレリウスの暗躍が始まり、それを察した本来の世界のレイチェルが湊ミオと似た形で来訪。同時に、ラグナに関する記憶こそ消されているが、ここに捜し求めている人物であるラグナがいることを確信する。
ある理由で黒き獣も復活。ルーゴサイトと融合…？

○ウルトラマンタイガ×ダンベル何キロ持てる？
タイガ本編のスピンオフ短編。
今後の怪獣・星人、そしてトレギアとの闘いに備え、タイタスからジムで体を鍛えることを勧められたヒロユキが、シルバーマンジムに通うようになる。さわやかイケメンなので、事務トレーナーの街雄鳴造と同様にひびきたちからも好印象…というかモテる。街雄のたけだけしい筋肉を、当然ながらタイタスは「よく鍛えているな！」と絶賛する。
タイガ一人では苦戦する怪獣と戦う際、タイタスが街雄と一時的に一体化してウルトラチェンジ、久しぶりにコンビ状態でトライスクワッドメンバーが共闘するという展開。
もちろん重度の筋肉フェチの奏流院朱美は、タイタスを全力で推しのウルトラマンとしており、その変態ぶりに鈍感な性格のタイタスは気づかず、筋肉の良さをよくわかっているとしか思わない。

○ウルトラマントレギアが別作品の世界に乱入し悪事を働く
一例として『回復術師のやり直し』
ケヤルガのパーティメンバーの大半が洗脳か詐欺で仲間にしていることを利用し、トレギアはわざと真実を伝えたり、かつての人格を呼び戻させたりしてケヤルガのパーティを内部崩壊させる。フレアたちの復讐でケヤルガ死亡。しかしフレアたちもセツナの更なる復讐で死亡。セツナはすべてを失い、一人世界をさまようようになってしまう。

また王国には人間には決して制御できない怪獣をわざと与え、暴走した怪獣の手で滅亡させる。
トレギアの犯行動機は、復讐のためとはいえ明らかに悪に染まったケヤルが（詭弁混じりとはいえ）正義という言葉を気安く吐いて、挙句の果にわざと相手の怒りを煽って悪事を働かせたところでそいつにも復讐を実行するという、復讐依存症に染まった所業に対し、下種に成り下がった下等な人間の分際でタロウと同じ正義を口走るケヤルガに激しい苛立ちを覚えたため。
インフィニット・ストラトスの場合、自ら新たな男性操縦者・霧崎としてＩＳ学院に入学。女子生徒の多くを味方につけ、次第に自分に惚れさせるほどに魅了。亡国企業による世界規模のテロを起こさせ、やがて一夏に惚れこむヒロインたちをも誘惑して一夏を裏切らせる。一夏が絶望し廃人か死亡したところで、ヒロインたちや女子生徒たちにも本性を現し、トレギアに変身して皆殺し。大切で強固な絆があると豪語する一夏の周囲との絆を嘲笑った。
宇宙に興味を持っていた束はトレギアに興味を持ち取引を持ち掛けようとするも、自身とトレギアの知能の差と心の幼稚さを嘲笑され激昂しトレギアに歯向かうも、当然ながら敗北。彼女は地球最後の人類となってしまい、自身の飛びぬけすぎた頭脳とずれていた心を呪いながら死亡する。最終的に地球は死の星と化して滅んだ。
束「こんなことなら…いっそバカのまま、凡人と同じ感性の人間に生まれたかった」
俺ガイルの場合、八幡や奉仕部に接触。
八幡を闇に落とそうとし、偽告白の件ですでに孤立気味だった彼に接触する。
雪乃や結衣が仲直りを図ろうと考えるも…
簡単に言えば、よくある奉仕部アンチものの作者の立場にトレギアが立ち、八幡とその周囲の人間たちを絶望の闇に叩き落すのを楽しむ内容。そんなトレギアに対し、「このトレギアの姿を見て、あなたはきっと…鏡に映った自分との既視感を覚えているかもしれません」とモノローグを綴る。

○ウルトラマンシリーズ×サクラ大戦
このサイトでやってる人がいたのが影響。現在連載中。
ちなみにセブンをベースにしたオリトラもの。

○ウルトラマンダイナ×機動戦士ガンダムＳＥＥＤシリーズ
ＤＥＳＴＩＮＹ後の時系列。シン・アスカが主人公。シンは一応和解したキラやアスランたちと共に、少しでも明るい未来を、かつて家族を失った自分のような人間がいない世界を作ろうと努力する日々を送る。
世界がようやく平和な方へと歩み始めた一方、これまでの戦いの遺恨もまた根強く残っており、それに直結した犯罪やテロが各地で多発するように。
それに関連して、ウルトラシリーズの宇宙人や怪獣たちが別次元から現れ始める。宇宙人たちは各地にテロリストや、キラたちに深い恨みを抱く人間たちに怪獣や超兵器を提供、再び各地で戦果が巻き起こり始める。
旧ザフト軍、オーブ軍、連邦軍はこれに対抗するため、防衛組織『ＧＵＴＳ』を結成。シンたちもそれに招集されることに。
しかし、モビルスーツの力をもってしても勝てない凶悪な怪獣たちが多発。いずれもが、別次元に置いてウルトラマンたちを追い詰めたことがある強敵ばかりだった。（例としてゼットンやキングジョー等）
そのうえスフィアの残党もまたこの宇宙で暗躍しており、人類を危険視し攻撃する。また、かつての自分たちの親玉であるグランスフィアと同じ質量を求め、復活の機会をうかがっている。
人類は追い詰められてしまい、シンもルナマリアを庇って爆死してしまう。
…が、そんな彼を救ったのが、別次元から宇宙人たちを追ってウルトラマンダイナ＝アスカ・シンが飛来、一体化する。以後、ダイナとなってウルトラシリーズ側の侵略者や、彼らと結託したテロリストと

戦う。
キラやラクスら、アンチが多いキャラクターに対し、宇宙人や知性持ちの怪獣たちが彼らの所業について強烈な指摘を入れ、彼らに揺さぶりをかけるエピソードも想定。当然アスランも自分の所属する組織を何度も裏切っている事実を味方や敵勢宇宙人から指摘を受け、防衛軍内においても孤立してしまうことになるが、それでも未来のためにできることをしようと奮戦する。
ダイナとＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹの主役が同姓同名ということで浮かんだネタ。既にやっている人もいるが、いずれも完結していない。

○ウルトラマンシリーズ×地球防衛軍シリーズ

○ウルトラマンＸ　ｏｒグリッドマン×ソードアートオンライン
データ上の存在であるウルトラマンエックス、グリッドマンが、ＳＡＯ本編のいずれかのゲームに進入しその世界に閉じ込められた人を洗脳し地球侵略に利用しようとたくらむ異星人を食い止めるために誰かとユナイト、またはアクセスフラッシュし、サイバー怪獣と戦う。もちろん開発者の人もこればかりは食い止めなければと協力的になる…な展開。
これはまずやらないと思う。とりあえず浮かんだだけ。
グリッドマンで行う場合、アカネ以外のＳＳＳＳ．ＧＲＩＤＭＡＮのメインキャラも、現実の人間としても存在しており（正確にはアニメ版の彼らの元になった存在）、アニメ版の最終回でアカネが現実世界で目覚めた後、現実の裕太がＳＡＯ世界に閉じ込められてしまったところから物語が始まる。
現実世界のアカネは、現実の裕太たち三人とも仲良くなっているが、以前自分が作り出したツツジ台への未練もあってやや距離感がある。
ＳＡＯの世界とツツジ台はある理由で融合しており、ツツジ台の上にアインクラッドが存在している状態。

この影響でＳＡＯ世界に入り込んだ現実の裕太とアニメ版の裕太はひとつの人間となってしまう。記憶が混同してしまったため、いつぞやの記憶喪失状態のように自分がいったい何者なのかわからなくなって混乱してしまう。だがわけのわからないうちにＳＡＯのデスゲームに巻き込まれキリトや六花たちと行動する。このためツツジ台の住人である裕太や六花たちもＳＡＯでのジョブやスキルを得て、アインクラッドからなだれ込んだモンスターと戦う羽目になる。

現実世界のアカネや六花たち三人も裕太が戻らないことを危惧し、なんとか裕太を救出できないかと試みる。だが下手に行動しても、ナーヴギアによって裕太を脳死させてしまう可能性もあるため何もできずにいた。だが、そんな時グリッドマンの最初の変身者でもある直人と出会う。直人は仲間たちとともにグリッドマンのいる世界とコンタクトを取ることに成功しており、これをもとにグリッドマンに裕太救出の願いを出す。

その後、裕太たちＳＡＯプレイヤーたちを洗脳する悪を追ってきたグリッドマンや仲間たちと再会、ＳＡＯ事件解決とその裏に隠れた悪の妥当に臨む。

両方出す場合、Ｘへの変身者は内海の予定。以前と同じように何もできない自分を嘆いていたところ、その思いを聞いた、グリッドマンとともに飛来したエックスが彼とユナイトしないかと誘い、それに乗ることで変身する。

アカネは武史とも出会い、かつて邪悪な敵に踊らされた、心が弱い人間だった者同士でシンパシーを感じ合っている。

敵には、滅び去ったはずのカーンデジファーやアレクシスも現れる。

○マブラヴオルタネイティヴ×ウルトラマンシリーズ

本編終了後、元の世界に戻るはずの武だったが、なぜかまたしてもループ現象に巻き込まれ、再びＢＥＴＡとの戦いに身を投じることになる。しかも何度繰り返してもまたオルタナティブの序盤の時間に引き戻され、その度に再び仲間たちの残酷な死を見続けることとな

り、精神を疲弊させていく。最悪なことに、ループを重ねるごとに事態が余計に悪化し、本来なら死なないはずの茜たちさえも命を落とすという事態まで発生するようになった。

しかし最後のループの中で唯一つだけ、ＢＥＴＡの前に姿を現し撃退したという光の巨人についてのデータを香月博士が発見。そのデータを元に、人工的にウルトラマンを作り出してＢＥＴＡに対抗する計画を考え、純夏と霞の協力も駆りつつ決行するが、データがそもそも不足していた上に、人間の体をベースにしなければならないことが条件とされていた。ＢＥＴＡが襲撃したために、ついにそのループ上での純夏たちさえも犠牲になってしまい、武はＢＥＴＡへの怒りとぶつけるかのごとく、博士に申請し自ら巨人の素体となり、ウルトラマンに生まれ変わってＢＥＴＡを撃破、再びオルタナティブ本編の序盤に飛ぶ。

ループの直後、オルタナティブの世界での自分が純夏を庇って殺されそうになったところに出くわし、別世界の自分自身と一体化し、死するはずの仲間たちを今度こそ救うべく、ＢＥＴＡやＢＥＴＡと融合した怪獣と戦う物語。変身するウルトラマンは不明だが、人工でも違和感が無いのは今のところエックスのみ。君が望む永遠の主人公も生存している設定で登場。とはいえ、これは個人的に救いを求めた話なので、原作の世界観を壊しかねないかもしれない…。

とりあえず想像してみた・ライダー編（随時更新）

○真・仮面ライダー×ブラックブレット
木更救済要素を含める。
アニメ最終回後の分岐ストーリーとしている。

兄弟子の死、ガストレア化が進行する延珠。そして両親の仇への憎しみのあまり狂気に陥っていく木更。
ティナの存在と彼女の献身でかろうじて保たれていた蓮太郎だが、延珠のガストレア化が深刻化し、心に余裕をもてなくなっていく。
蓮太郎はなんとしても延珠を助けたい一身だったが、ある日彼女のガストレア化を抑えるための因子を持つレアなガストレアが発見されたことが未織の口から開かされる。蓮太郎は延珠を救うべく、ティナと共にそいつの討伐に向かうも、返り討ちに合ってしまい、ティナが重症。
無力感にさいなまれる蓮太郎。しかもさらに現実が彼を追い詰めるように、木更が別の男からの縁談を持ちかけられる話を聞く。すでに彼女のことを諦めかけていたのだが、彼は縁談先の男、またはその親族から、蓮太郎がレアなガストレアを倒すことで延珠を救いたがっていることを知り、彼に圧倒的な力を与えることを提示。精神的に追い詰められていた蓮太郎は、延珠を助けるため、いずれガストレア化が進行するであろうティナを守るべくそれを受け入れたことで、彼は縁談先の男の一家と天童家の合同計画により、バッタ型ガストレア＝仮面ライダー真への変身能力を得た。
だがそれは、二家が新たな対ガストレア兵器開発と政治的に優位に立つため、そして天童家にとって天敵となりうる木更を殺す『人形』を作る悪質な計画だった。未織の実家と聖天子はその計画を知り、計画阻止に挑む。
真となったと同時に、レアのガストレアを倒せた蓮太郎。だがそのガストレアの因子は延珠のためではなく、新たな生物兵器開発のために使われていたことを知り激昂。理性を失って暴れてしまい、事情を

知らない木更は実家の命令で失敗作とみなされた真＝蓮太郎と対峙、ガストレアとして彼を処分しようとするがその際、真の正体が蓮太郎であることを知り、愕然。蓮太郎を利用したことを問い詰めるも、相手側からは蓮太郎が納得ずくでの契約だったと語られ、追い返された木更はますます実家と同時に婚約者一家への憎しみを募らせた。同時に強まる憎しみが、彼女の精神と同時に体さえも蝕み始める。

信用できない相手とはいえ、憎悪の固まり状態の木更や傷の回復が遅れているティナにも頼れずたった一人延珠を助ける方法を求める蓮太郎は、木更の体もまた危険な状態にあることを知らされ、治療費稼ぎのため半ば操られるようにガストレア狩りを強要され、自分を見失い始めていく（一応金はもらっている？）。

木更からすぐに天童から縁を切ることを忠告されるも、蓮太郎はそれを聞き入れなかった。こうなったら強引にでも、自分が天童家の奴らを抹殺するしかないと考えた木更は蓮太郎を助けるため、それ以上に実家への復讐を果たそうと体を引きずる。

だが、未織がついに憎しみに身を任せてばかりの木更に平手打ち。蓮太郎が真となり、今まで以上の苦しみを味わっている原因が木更の憎しみもまた同じだと断言（延珠のことでも、憎しみにとらわれる木更を頼れなくなり、蓮太郎一人で背負い込もうとしていたことも同様）。憎しみを断ち切れないなら、二度と自分や蓮太郎の前に姿を現すなと怒鳴り、木更を部下たちに拉致させようとする。一時復讐の邪魔となる未織に対しても殺意を抱いた木更だが、それこそまた蓮太郎を苦しめることに繋がることに気づき、どうすればいいのかわからなくなりついに泣き崩れる。

未織の説得で天童への憎しみではなく、もっと別の理由で戦うことを決断した木更。だが、すでに延珠はいつガストレアになってもおかしくない危険状態に。

雨の中、再会する蓮太郎と木更。怪物じみた力を得ても延珠も守れず、憎しみに突っ走る木更を止めるどころか闘争本能に身を任せて彼女を殺しかけたことへの罪悪感と無力感を吐き出した蓮太郎の想い

を、両親の死でずっと受け止めることができなかった木更は、ようやく真正面から受け止め、ついに告白し蓮太郎を抱きしめた。
だが失敗作とはいえ、両家の計画の秘密を握る二人を生かすわけに行かず、同時に聖天子の調査隊に追い詰められた両家により、木更の告白からまもない日に刺客＝改造兵士レベル２が迫り、蓮太郎は再度仮面ライダー真に変身しようとしたが、木更はまた彼が闘争本当に支配されることをおそれ自らが戦うことに。しかしすでに体が弱っていた木更ではかなわず、木更が倒れてしまい、一時心配停止に。
心肺蘇生をしても目覚めなかったために蓮太郎は木更が死んだと思い真に変身、怒りと悲しみを抱きながらも、理性を最後まで保ち続け、原作同様脊柱を引きずり出して改造兵士レベル２を倒した。
しかし敵を倒したものの、他の天童家の刺客たちが蓮太郎たちを殺すべく動きだしており、すでに二人は囲まれていた。蓮太郎と木更は、敵の放ったミサイルの爆発の中に消えた…。
木更はかろうじて聖天子や未織の部下たちによって発見され、蝕まれていた体も回復傾向にいたり、一命を取り留める。延珠もまたガストレア化進行抑制の薬によって延命、ティナも傷を癒し、彼女もまた延珠同様ガストレア化する心配がなくなった。
両家の謀略が聖天子の活躍で明るみになり、天童家または木更の婚約者の家が没落することになる。ただ、もう片方の家が共犯である証拠まではつかめなかった。
同時に蓮太郎の姿がないことに気づき、未織の口から彼は木更のことを二人に託し、幸せになって欲しいという伝言を遺して去ったことを知る。
木更は新聞などで『ＭＡＫＥＤ・ＲＩＤＥＲ』と紹介されている蓮太郎の安否を知り、残された延珠やティナ、聖天子や未織らと共に、（木更の腹の中には蓮太郎との間の子供ができている設定も考案）ガストレアと戦い人々を守る道を選ぶ。
一方で蓮太郎は木更の実家または婚約者の家の追っ手から木更たちや、人々をガストレアから守るべく、バイクを乗り回しながら仮面ライダーとして孤独な戦いを続けていく。

お互いにいつかまた再会できる日を信じて…。

○仮面ライダーディケイド×テイルズオブエクシリア２（ルドガーＥＤ）

破壊者繋がりと、ネット上で第４骸殻＝仮面ライダー呼ばわりされてるネタから。エルを失って喪失感に苛まれるルドガーの元に、クランスピア社のエージェントという役割で現れた士たちが共に戦う。

士がネオディケイドになるかどうかは検討中。

ラルが登場。ＥＤは彼女と結ばれるか、それを拒否するかの二択を構想。

第４骸殻のルドガーが世界から仮面ライダーとして認められる設定。

ちなみに第４骸殻のカメンライド・ファイナルアタックライドカード付で。（強力すぎるので使用リスクにタイムファクター化か、本家骸殻よりスペックダウンを検討）

○仮面ライダーアマゾンズ×東京喰種

グールの上位存在が「アマゾン」という設定。しかし目覚めてしまうと、人間としての理性さえも失った怪物と化し、グールから見ても畏怖の対象となる。力はアマゾンドライバーで制御できるが、警視庁側はドライバーの力でグールたちの捕食本能を制御し、管理しようともくろむ。

○仮面ライダーカブト×ゼロの使い魔

カブト本編では正体不明だった擬態天道の正体が、才人だったら…？という設定。

序盤の才人が僕口調。天道に擬態したころの影響からか、ルイズへの執着がある？

当然、才人はダークカブトに変身。

ギーシュは薔薇などの接点の多さからコーカサスを検討。しかし

最初は弱い。

○仮面ライダー555×インフィニットストラトス

一夏が誘拐時に殺害されると同時にウルフオルフェノクとして覚醒し、誘拐犯たちを殺害したところで千冬に救助される。

スマートブレインは、束が立ちあげた会社。元々ＩＳは人類に仇名すオルフェノクを排除する目的もあって製作されたが、一部の女性と一夏にしか扱えない欠点と、姉の勝手さ加減に憤慨した妹から拒絶されたことをきっかけに己の人格と行いを見直した束は、新たにライダーギアを開発する。しかし、一部のギアが亡国企業に盗まれ、その一本をマドカが使っている。

亡国企業が原作におけるスマートブレインに当たる。

オルフェノクの大半は女性に虐げられ、殺害・自殺等で死亡した男性が多い。しかもＩＳで勝てる個体は多くないため、最初こそ女尊男卑だったが皮肉にもオルフェノクの事件が多発するにつれて女性たちはオルフェノクを恐れ、元の男女平等の世界に戻りつつある。しかし都市伝説としてオルフェノクが死亡した人間が復活した者と知れており、少数だが密かに自殺を図る者も。やがて女尊男卑に代わってオルフェノク至上主義な側面を持つ者が増え、脅威となっていき、一夏たちは亡国企業や人類に害をなすオルフェノクと同じように、彼らとも戦うことになる。

白式は５５５の強化ツールとしての役目も持ち、使用すると白銀の５５５となる。

弾もライダーの資格を得る。

○盾の勇者の成り上がり×仮面ライダーアギト

主人公の名前は哲也。原点の翔一の本名と同じ。

弓の勇者・樹と同じく、超能力が存在する地球出身。

アギト本編の終了後の世界で、アギトの力を正しく使うために開校された学校に通う。

樹とはそこでの知り合いで、彼のうわべだけの正義感の理由を理解しており、故にその貪欲な虚栄心を危険視している。やがてその警戒心は、樹のリーシア解雇の件で決定的な嫌悪となってしまう。

彼も超能力こそ持つが、細部までの精巧な作りの機械を生成できる能力で、戦闘面では樹同様さほど大したものではない（しかし日常生活においては大いに役立つ）。だからといって悲観するようなそぶりはなく、不足している力は身体能力を鍛えることで補っている。

アギト本編で人類の進化を見届けることに決めた闇の力＝オーヴァーロード・テオスが、『盾の勇者本編の黒幕』と接触し、性格と異次元世界を含む人類への応対の仕方の違いで対立し、敗れかけたところ、かつての自分の分身である光の力＝プロメスと同じように、哲也にアギトの力を与え、黒幕が干渉している世界＝盾の勇者世界の舞台へ召喚する。

四聖勇者と共に現れ、当然４人のはずの勇者が５人、それもどんな力を持つ勇者なのか不明、そもそも勇者なのかもわからないため、メルロマルクの人間たちから尚文同様敬遠される。知り合いの特権で樹に頼ろうかとも思ったが、樹の尚文に対するけなすような態度に失望し、尚文の同行者となることを決める。だがマインも同様に志願。

その日バルーンを倒した日の夜、マインが原作通り尚文の金品を盗みだすも、そこを哲也に気づかれる。哲也はマインを取り押さえて尚文の装備と金を取り返そうとするも、『黒幕』が生み出し放った、かつてのアンノウンことロード怪人を模した『ダークロード』怪人が現れ、マインを逃がして哲也を襲撃。なぜマインが襲われず怪人に助けられたのか困惑するも、その隙に哲也は怪人から重傷を負わされ、殺されかける。

しかしそのダメージを引き金に、哲也は無意識にアギトに覚醒、変身して怪人を撃破した。

その後、ケガを引きずりながら尚文の身を案じて一人ぼっちの旅へ、その際にバイクを超能力で精製し、移動手段とする。

旅先で、哲也はセーアエットの隣の領地へたどり着く。傷をちゃんとした医者に診てもらおうとするも、金がなくて見てもらえない。ア

ギトに覚醒した自覚のないままどうするべきか途方に暮れるしかない。その際、盾の悪魔の強姦事件の共犯者として狙われ、捕縛されてしまう。尚文が強姦の冤罪をかけられたとき、ちょうど姿を消していた哲也は逃亡した犯人として身に覚えのない咎を受けることに。

その地の領主イドルの屋敷の地下にとらわれ、そこで原作では故人となっていたリファナと出会う。飽きられ売られたラフタリアや今もなおとらわれている仲間たちを思いながら、弱る体を押して生きようとする姿に、哲也は彼女の姿を心の支えとする。

とらわれてる間、自分たちを見下す看守から、自分が王女強姦の罪に問われていることを知る。理不尽な冤罪と、イドルたち亜人を見下し人間に対する怒りを湧きあがらせ、ついに彼はアギトの力を完全覚醒、地下牢で暴れまわり、街を混乱に陥れ、とらわれていた亜人たちを解放して脱出。亜人と領の人間たちの内紛が勃発した。

哲也、アギトの力で交戦するも、ケガと衰弱によって体力が持たず、途中で倒れる。

互いに被害が甚大なものとなり、一部の生き延びた亜人たちはリファナと哲也を連れて脱出。二人と共にルロロナ村跡へ向かうも、拷問による衰弱がたたり、ついに魔物の群れに襲われたところでリファナとキール、そして哲也を残して全滅。リファナが襲われかけ、哲也はたった一つだけ残ったポーションを飲んで回復、アギトに変身して魔物を撃破。セーアエットへ。

セーアエットへ二人を預けた後、一人旅を続けて尚文を探すことにする哲也だが、リファナが同行を志願。以後、リファナをパーティメンバーとして旅をする。リファナをメインヒロインとし、レベルアップによって急成長する。

リユート村で尚文と再会、成長したラフタリアとも出会う。リファナを救ったことで、哲也はラフタリアから強い信頼を得る。同時に、理不尽な理由や冤罪で尚文を陥れた国王やマインへの怒りを募らせる。樹に対しても同情よりも不満を募らせ、元康にいたってはマインの操り人形で『ヤリチンの遊者』とけなすようになる。

アギトに覚醒した哲也に、樹は嫉妬の感情を抱く。

以後、哲也たちは尚文たちのパーティに加わり、共に冒険する。
しかし、ダークロード怪人たちがマインや三勇教と暗躍してメルロマルクを混乱させていき、哲也は『仮面の勇者アギト』として尚文たちと共に立ち向かう。
だが、尚文と哲也のお互いの力が引き合うように、哲也は憤怒の盾の呪いの炎を浴びたことでバーニングフォームに、尚文はカーズシリーズの呪いの力と哲也の持つアギトの光を盾に吸収させたことで不完全なアギト＝ギルスへの覚醒を果たして…

○仮面ライダー龍騎×まどか・マギカ
両作を知っていれば想像する人もきっといたであろう組み合わせ。
・魔法少女たちはライダーにはならず、基本的ライダーたちは彼女たちとほぼ同じ年頃の少年たちが変身する。例外はファム。
似たような組み合わせのクロス作品がすでに連載されていることもあるので、書く可能性が特にないと思う。
カードデッキをよこすのは、
・キュウベェを倒し魔法少女の因果からの解放を望む『神崎士郎』(またはそれに該当する者)、
・1つ前以前のループで最強の魔法少女となったことで歴史から抹消されたまどかの存在に気づき、ほむらとは違うやり方で彼女を救おうとする『未来の鹿目タツヤ』、
・少年たちの魂さえもエントロピーに利用しようとするキュウベェ。
・主人公は中学生の真司。ヒロインはほむら。
・上條もライダーに。
・手塚は真司の友人。彼がライダーであると知り、後に彼を助けるために契約。
・スピンオフの魔法少女たちも参戦。
・契約モンスターとのやり取り。一部のライダーは固い信頼関係にある
・蓮の彼女はマミ、蓮は魔法少女の真実を知って絶望した彼女を救

うために戦う
・浅倉は少年院の高校生と言う設定、やはり下衆いキャラ。
・須藤は表向きは優等生、その裏で万引き、気に入らない生徒や教師を策謀を用いて社会的に破滅・または殺害する、たとえ彼氏もちであろうと気に入った女性を洗脳・強奪する悪童（自分で考えといてあまりに下衆すぎる…）
・高見沢逸郎はいいとこのボンボン学生、しかしやはり悪役
・龍騎シリーズの全ライダーの他、ディケイドに登場した仮面ライダーアビスも登場。
・ドラゴンナイト要素も含みきれる分だけ含める
・ディケイドとの共演？
○仮面ライダー龍騎×地球を舞台にしたラノベやアニメ作品複数
本来の物語から外れた世界戦の作品たちの主役・主要人物・敵キャラたちが仮面ライダーとなって争う。
←候補者
・兵藤一誠＝仮面ライダー龍騎。元は原作通りのエロ目的でライダーとなったが、ライダーバトルの過酷さを目の当たりにして、バトルを止めるために戦うように。赤龍帝も健在するかは未定。
・キリト＝仮面ライダーナイト。目覚めないアスナを救うために戦う。ＳＡＯで培った技術がライダーバトルでも生きているので強め。
・上条当麻＝仮面ライダーライア。ライダーバトルという幻想をぶち壊すために戦う。右手の力も健在
・比企谷八幡＝仮面ライダーリュウガ。奉仕部から見放されて気力を完全に無くした所でライダーに。特に理由なく、心の穴を埋めるために戦う。無自覚に奉仕部に未練を感じ、彼女たちをモンスターから守ろうとしてもいる。
・里見蓮太郎＝仮面ライダーゾルダ。木更の狂気を阻止し、彼女と延珠の病を治すために戦う。
・西丈一郎＝仮面ライダーガイ。ゲーム感覚でライダーバトルをしており、殺人も辞さない外道中学生。しかし根はママっ子なため、ピンチに陥るとヘタれる。

・平賀才人＝仮面ライダーアビス。原作と異なり、ルイズを地球へ連れていけなかった。孤独に耐えていたが、ライダーになったことをきっけかにルイズとの再会を願い、戦う。

・織斑一夏＝仮面ライダータイガ。千冬と比べられ、誹謗中傷を受け続ける。自分が姉を越え、英雄になるために戦う。

・伊藤誠＝仮面ライダーシザース。自分の浮気性が原因で、自分に好意を抱いた世界たちに命を狙われる。血なまぐさい修羅場から責任を全くとろうとせずに逃げてしまい、その縁を最初からなかったことにするためにライダーとなる。パッとみると普通の人当たりの良い学生に見えるものの、人間関係があまりに自己中心的なため、彼の本性を知った他のライダーたちから露骨に嫌悪される。後に自分の父親のことを知り、彼もまた自分と同じ行為に走っていたことを知り、自分の間違いをようやく認めるが…。

・須郷＝仮面ライダーベルデ。アスナを利用して権力を掴もうとする外道。後にナイト＝キリトに倒され、デッキは別の味方陣営となる誰かに受け継がれる。

・キヨシ＝仮面ライダーインペラー。千代の闇落ちをなかったことにし、改めて真人間として彼女と付き合えるようになるために戦う。

とりあえず想像してみた・その他編（随時更新）

○ペルソナ５×異世界ものを除く、舞台が地球の作品

他作品で登場する、とにかくムカつく悪人キャラ、改心の余地ありと見なせるキャラを怪盗団に裁いてもらう、フリークエスト式エピソード。

対象作品はエロマンガのものも含める。（↑の場合、ＮＴＲ系の作品に出てくるクズ間男と寝とられた女が改心の対象。変身すると、かの有名なマ○ラ様になり、特に女性陣から去勢宣言を下される）

ウルトラマンメビウスに出てきた、あのクズジャーナリストも対象。

書きたいと思った理由は、最近ムカつく間男キャラを新作エロマンガで見たので…

○ペルソナ５×ルパン３世×名探偵コナン

怪盗と名探偵繋がり。

心の怪盗団が、日本に現れたルパンを追う。それをコナンもまた付け狙い、その時に心の怪盗団もルパンとは別の標的とする。

○ペルソナ５×デスノート

キラ＝夜神月と心の怪盗団の、アウトローさを感じる『正義』同士の戦い。…といっても、月の方が悪役だが。世間ではどちらが本当の正義かしばしば議論が行われる。

月は心の怪盗団に、決して正体が知られることはないと思っていたが、怪盗団との距離は双葉のハッキングとモルガナの隠密行動、そして認知世界で情報を集める怪盗団の行動で次第に縮む。やがて怪盗団は秘密裏にＬと結託する。Ｌは警察に怪盗団メンバーのことはまだ明かさないことにする。

自分の方法なら同じ犯人が再犯しないこと、絶対的神への畏怖で人は間違いを犯さなくなることを主張し、怪盗団のやり方ではいずれ改心した人間は再び悪に落ちると指摘し、怪盗団を惑わせる。同時に、

自分が悪ならば人の心を弄んでいる怪盗団も同じだと指摘。
だが、月のやり方はたとえ世界を平和にできても、キラを崇拝し、命を軽く見る冷酷な人間しか存在しなくなることを予測し、さらに自分を邪魔する者は悪でなくても無差別に殺すキラのやり方を批判。
怪盗団敗北の場合はＢＡＤＥＮＤ。死神の目の能力を使った月により、先に名前を突き止められた怪盗団は次々と亡くなっていく。キラに敵対する者もいなくなり、月の新世界が出来上がり始め、表面上は平和となった。しかしそのために手段を択ばない人間が蔓延し始め、世界はキラと彼を崇拝する者たちへの恐怖で支配され、逆に乱れていく。
月が敗北の場合がＴＲＵＥＥＮＤ。心の怪盗団により悪の心を奪われた月は、自分がキラであること、デスノートの力に溺れて償いきれない多くの罪を持ったことを告白し自首。逮捕された時、名前は公表されなかった。改心前の月の指摘を思い出して悩むメンバーだが、それでも自分たちの行いに覚悟を決め、怪盗団を続ける。
どちらのルートでも、最終的に月はリュークに名前を書かれて殺される。
同じ声繋がりだが性格の不一致から、竜司と月の仲は悪め。当然手玉に取られてしまう。

○ガンダムビルドファイターズ×本家ガンダムシリーズ
最終回後のセイ、セカイたちがとあるきっかけで、ＴＶシリーズ内そのままの本家ガンダムの世界に迷い込んでしまう。その拍子に仲間たちとも逸れてしまうが、憧れのガンダムの世界に興奮するセイやフミナ。そして原作知識を利用して、原作主人公たちの組織に加わる。最初は喜んでいたセイ、フミナだが…世界を移動した際に逸れた仲間たちが、互いに敵対する組織にいて、戦わなければならなくなるという苦痛を伴うことに。さらにガンダムを使った血を血で洗う残酷な戦争を目の当たりにしていく内にその喜びは消え失せ、ガンダムの世界の中の人物たちの苦しみを本当の意味で理解できなかったこと、不謹慎にもガンダムの世界にきたこと現状を弁えず子供のように

喜んでしまった愚かさを悟る。
やがてガンダム原作のキャラたちと協力し、苦難を超えて仲間たちと合流しながら、元の世界に戻ることを目標に戦っていく。
たまにガンダム本編女性キャラを絡ませた修羅場も想定。
セイたちは、当然ビルドファイターズ本編で使っていたガンプラをそのままモビルスーツとして使用する。

○監獄学園
あの子の闇落ち回避ルート。正直あの子のオチは最悪すぎて納得できない。
または闇落ちからの救済ルート。
千代が変貌したことで、当然ながらキヨシたちはこれまでと一変して一気に険悪に…というか千代から完全に拒絶されてしまう。キヨシも千代への後ろめたさからどう言葉をかけるべきかもわからず、次第にシンゴたちからも自ら距離を置くようになる。濡れTシャツコンテストを見に行ったが、千代の一軒でのショックでまったく満たされなかった。また千代の変貌には花も責任を強く感じ、一時はキヨシがフリーのままになったことをチャンスと捉えかけるも、自分のせいで千代とキヨシを傷つけてしまったことに責任を感じる。やがてその状態のまま進級したため、花たちも卒業してしまう。
千代は新たに裏生徒会長となり、裏と表の生徒会を統合するも、入学・編入してきた男子に対してはまさに暴君のように振舞うようになった。女子生徒と男子生徒の間にトラブルが起こると、キヨシのことを思い出して苦痛を感じ、女子のほうが悪くても男子生徒に不当な罰を下し女子は無罪放免に、また男子が最初から悪いことがわかると必要以上のきつすぎる罰を下し、監獄は毎日監獄入りする男子であふれかえる。当然これを問題視した教員たちだが、千代は生徒会に入れた男子嫌いの女子生徒を利用し、強姦や万引き、障害などの無実の罪を無理やり着せるようになる。
千代はふと、キヨシとの思い出を振り返ることがあるも、すぐに「お姉ちゃんが言っていたとおり、どうせ男はみんな屑だ。最初はかわい

い子供でも、どうせすぐに腐る」と言い聞かせ続ける。
暴走の一途をたどる千代を見かね、ガクトたちも我慢ならずに千代に反抗することを提案するが、キヨシはふさぎこんでそれに乗ろうとしなかった。シンゴが真っ先にキヨシを見損なったと見放し、自分たちだけで千代への反逆を図る。しかし前生徒会長である万里の不正にともに立ち向かったことのある千代にはほぼ手口を先読みされてしまい、シンゴたちも監獄入りをさせられてしまう。
たった一人になったキヨシは仲間さえも失い、さらに気力を失う。そんな時、シンゴの身を案じた杏子と、後悔に満ちた大学生活で身が入らなくなったことでこのままではいけないと思った花がキヨシの下に。
杏子は友人からの伝で、これまで男子たちが犯した罪（千代が仕掛けた冤罪）をたてに、再び女子高へ強制的に引き戻し、男子全員を追い払おうと千代が策していることを聞く。これでは不当に傷つけられた学歴のせいで、男子たちの将来が危うくなるかもしれないと危機感。キヨシはそれでも腐り続けようとするが、かつての監獄生活以上に過酷な状況にあるシンゴたちのことを聞かされ、シンゴたちまで自分の犯した責任を背負わせたくないと決意し、千代に反抗することを決意する。
しかし、自分が受けた仕打ちの記録を持つ千代と彼女に心酔する裏生徒会によってほかの男子ともども逆らえない状況のまま、全男子生徒・男性教員排除の期日が近づいていく。
ここでガクトが現代の孔明ぶりを発揮。千代たち現裏生徒会の悪事がすべて冤罪であることが教育委員会に明かされる。
男子生徒・男性教員、および彼らに味方する女子生徒や教員たちの反抗で、逆に追い詰められた千代たち。逆に自分たちが退学の危機に追いやられる。すると、千代に妄信的な百合恋愛感情を抱く女子役員が暴走。学校でガクトを人質に立てこもり事件を起こす。千代は他の役員たちのあまりの暴走ぶりを見て迷いを生じらせる。
キヨシを差し出し、教育委員会へ提出した証拠を消すことを要求。当然ながらもう手遅れの状況なので無意味な要求だが、キヨシはガク

トを救うため、再び千代と向き合うために自ら学校へ乗り込んだ。
女子生徒がキヨシを見て激昂、ガクトたちの解放を拒絶し、ナイフでキヨシを殺害しようとする。大けがを負ってしまうキヨシ。他にも複数の裏生徒会も反抗に及び、しまいには学校に火をつけて道連れを図る。通報に応じた警官たちが突入、役員たちは全員現行犯で捕まるが、最期の一人がキヨシを殺そうとする。キヨシが殺されかけるのを見て、かつての気持ちが過った千代が、ナイフを奪い取って逆に彼女を刺してしまう。
やはりキヨシへの想いを捨てきれなかったことを自覚し、千代は全ての責任を背負って少年院へ自ら出頭。出頭に反対するキヨシへ謝罪するとともに別れを告げる。
千代は少年院を出て、万理と父の迎えを受ける。しかしそこには、ずっとキヨシと彼の仲間、そして姉が裏生徒会長だった頃の役員でもあった芽衣と花もいた。花は自分の行いも発端だったことを謝罪する。
キヨシからも謝罪、そしてお帰りと告げられ、千代は涙を流した。
自分たちは愛の牢獄から逃れられないのだ…となぜかガクトが閉めて終わり。
…な感じで続きを読みたい。というか原作者さん、マジで救いのある終わり方で続編書いてください。あの終わり方は史上最悪です。

○遊戯王
時系列は５Ｄｓ時期で同作のキャラも登場するが、実質は初代遊戯王の後日談（アニメ版＋原作＋後日談劇場版の設定がすべて適応されている）。
かつてのアクナディン同様、ゾークに心酔する悪質宗教団体がグールズの元レアハンター（かつての責任から、マリクは彼らを追っている）、ダーツ一派の残党と結託し、武藤遊戯は彼らに襲撃を受け、心を奪われたことで入院。カードも盗まれる。現在は妻となり、ダンサー

を引退していた杏子が看護している。
主人公は二人の息子。
かつて父が経験した３０００年前の古代エジプトや専念アイテム、十代たちの身に起きたダークネス、ユベルたちカードの精霊関係の事件、遊星たちが体感したシグナ―に連なる戦い等、デュエルモンスターズ関係の超常的な現象を知り、それらの影響による災害への対策を研究、およびデュエルモンスターズのモンスターたちが生きる世界を冒険したいと願う考古学・科学者を志す男の子だった。
しかし、卑劣な闇の刺客によって父が昏睡状態となり悲しみに暮れる中、漫画版ＧＸで登場した闇のイヤリングを身に着けたことで心の闇を深め、父を昏睡に陥れた者たちへの復讐と、父のカードの奪還、デュエル関連で悪事を働く悪党たちへの断罪を誓う。
唯一残ったブラックマジシャンガールと、独自に持っているエースモンスターを主軸としたデッキを使う。
復讐を誓って以来、本名「武藤遊輔」を捨てており、名前を「アテム」と名乗っている。マジシャンガールを「マナ」と呼び、荒んでいる彼の心の支えとなっている。
悪役の多くは、友達などからカードを密かに盗む者もいるが、遊輔の断罪にあう違法デュエリストが年齢性別に関係なく襲われていき、噂になっていく。
相変わらず悪事を働く名蜘蛛が最初の復讐対象。デュエルで敗北し、罰ゲームを食らって廃人となる。
遊星たちともこれらの事件を通して出会うこととなり、当初は対戦相手への対応の仕方等で対立する。
やがて遊輔の戦いは、ゾーク復活を目論む一派との戦いに移行する。
遊星やアキ、ジャックとカーリーの仲の進展等、原作最終回後の恋愛関係の描写も予想。

○遊戯王（学園編）×賭ケグルイ
もし遊戯が童実野高校ではなく私立百花王学園に入学していたら

…。
当然鈴井と同じくらいの優しい性格であるがゆえに学園に馴染めない遊戯。気の合う鈴井とは仲のいい友人だが、一方で金を支払えないので共にポチ扱い。
しかし、鈴井が借金を肩に逆らえなくなり、他の学生から暴力を振るわれる。代わりに自らが肩代わりすることを約束させられた遊戯は千年パズルを完成させ、闇遊戯ことアテムを復活させ、闇の番人となる。それ以降、自分の認知していない間に次々と闇のゲームで学園内の悪党を断罪していき、次第に学院の風紀が得体のしれない正体不明の断罪者への恐怖から正されていく。そしてその正体が遊戯であることを突き止め、彼に興味を抱いた生徒会長が近づく…という話。

○遊戯王
モンスターの住まう精霊界を舞台とし、モンスターたちを主役としたファンタジーもの。ガガギゴシリーズや裸の王様などのカードの中で展開されてた物語を形としたもの。
案ではガイアやブラックマジシャンのような人間タイプのモンスターが主役。

○賭ケグルイ×ジョジョの奇妙な冒険
ダービーが教師として私立百花王学園に赴任したことで、次々と生徒会を含む大勢の生徒・教員たちがコレクションにされていく。生徒たちの数が少なくなり、さらには鈴井たちも餌食にされてしまう。このままだと自分の求めるギャンブルさえできなくなることを危惧し、鈴井たちを取り戻すためにも夢子はダービーに挑む。
夢子ＶＳダービーが見たいと思っただけのお話。

○ドラゴンボールＧＴ×リリカルなのは
事実上の自作版ドラゴンボールＡＦ。
単にスターライトブレイカーとかめはめ波の対決を見てみたいと思って…。

悟空ｊｒとベジータｊｒを主人公に。ＡＦの敵・設定・ゲームやスピンオフオリジナルの敵出現。
超サイヤ人４と超サイヤ人ゴッドの終着点として、超サイヤ人５をラストに登場させる構想。

○ドラゴンボール×その他
ラディッツが主人公。
悟空たちに敗れ死に、界王星で悟空の修行相手として勝負させられるも敗北（Ｓｐａｒｋｉｎｇ　ＮＥＯ）。その後は地獄で転生の時を待ちながら、同じく地獄にいた格上のサイヤ人たちやフリーザ軍兵士、その他大勢の悪人たちから見下されながら日々を過ごす。当然、現世では圧倒的な強さを手にしていく悟空とも比較され、「カカロットの兄貴のくせに貧弱すぎる」と屈辱を味合わされる。こうなったのも全部カカロットのせいだと逆恨みを募らせるが、ある日（復活のフュージョン！かＧＴの時期で）発生した現世へのトンネルが現れた際、自分も現世に降り立ち、悟空に屈辱を味合わせるために地上に出て、彼の家族を襲撃しようと企む。だが現世へのトンネルは、現世だけでなくあらゆる別世界にもつながっており、ラディッツを含め、幾人かの悪人たちは現世へ降り立つことができず、それぞれ全く異なる別次元へ飛ばされる。
時間の流れさえ狂ったトンネルの中を通った影響でラディッツは１０代ほどの青年に若返り、名前以外の記憶を失った。
転生先をストブラの世界とする場合、凪沙がラディッツを拾い、母深森のもとへ彼を運ぶ。そこで外見や基本的な肉体構造は人間と同じだが、Ｓ細胞の存在など、地球では未確認の細胞を持つ貴重なサンプルとしても位置付けられ、以後糸神島で暮らすことになる。
凪沙を通じて古城たちとも知り合い、かつて感じたことのない平穏な日常を享受することになる。凪沙とは初めて出会った人物ということもあって、彼女のマシンガントークに振り回されながらも仲良くなる。
だが雪菜の登場とオイスタッハの襲来を機に、戦いに巻き込まれて

いく。
　そしてある日、ついに満月を見てしまい、大猿と化して暴れまわってしまい、古城や那月たちの手によって鎮圧される。地球人よりはるかに強靭な力を発揮することで己の正体に恐れさえ感じていく。これによって仲良くなりつつあった凪沙からも、彼女の獣人恐怖症が影響して距離を置かれてしまい、失った分の心の拠り所を求めるように、自分の正体が何者なのかを知りたがるようになる。その一環で、大猿の怪物が伝承という形等で残っていないか調べる。その時、西遊記の主要人物の名前である猿の妖怪『孫悟空』という名前に聞き覚えを感じ、わずかに失った記憶の一端を見る。
　そして黒死皇派の事件で、かつて自分と同じくフリーザ軍に所属していた宇宙人（黒死皇派に所属しており、いずれフリーザ軍に統合させるため組織を乗っ取るつもりでいる）と再会、この世界が自分たちのいる世界とは異なる次元であること、自分の正体を知り記憶を取り戻した。記憶がなくなった影響で手にした優しさが消え、本来の卑怯で残忍なサイヤ人として元に戻ってしまったラディッツは宇宙人の勧誘を受け、古城たちと対立してしまうこととなる。
　自分が別次元の種族サイヤ人であることを明かし、一度友人として過ごした情と縁から、ラディッツは古城を地上げ屋仲間として誘うが、古城は当然これを拒否し、彼と交戦する。しかし、古城が従える第４真祖の眷獣たちの力は、力を取り戻したラディッツでも苦戦を免れず、互いに重傷を負う。ボロボロになってなお自分への戦う姿勢を崩さない姿に、ラディッツは悟空の姿を古城に見出す。
　最後の手段で古城を眷獣もろともフルパワーのエネルギー波で止めを刺そうとするが、攻撃範囲内にいた凪沙が目に入り、攻撃をためらった隙を突いた那月の手で捕縛され、勧誘した宇宙人共々監獄結界へ送られた。
　ラディッツが悪に堕ち、姿を消したことで古城たちの間に影が差す。特に凪沙は、獣人恐怖症を言い訳にラディッツを拒んだせいで、ラディッツが悪の道に走ったのではと自分を責めてしまう。
　ラディッツは監獄結界の中で、また地獄にいたころのような生活を

余儀なくされる。もう出られることなく、今度こそここで静かに死に、また地獄で自分を嘲笑ったやつらの元に送り返されるのだろうと悔しがる。自分に臆することなく立ち向かってきた古城とカカロットの姿がダブり、なぜ凪沙を気にして古城に止めを刺せなかったのか自問自答を繰り返す。

仙都木阿夜が起こした事件をきっかけに、監獄結界の囚人らと共に外の世界へ再び降り立つ。フリーザ軍兵士から再び外で暴れまわるため、那月の抹殺を提案される。古城たちとも再会を果たすこととなる。

再び対立するかと思われたが、ラディッツは囚人たちと仙都木阿夜に反抗。宇宙人に対しても提案を拒んで古城たちの側に着くことになった。

あの時凪沙を見て攻撃を拒んだ理由、古城が頑なに心を委ねることなく戦う理由、その答えが、カカロットが自分の誘いを拒んでは向かい、そして無限に強くなっていく理由とつながっているのではと考え、その答えを見出すことを目的とし、再び古城たちと共闘する。

○コロッケ×ドラゴンボール

食べ物がらみの名前を持つ登場人物が多い繋がりで。互いの作品はそれぞれ別宇宙の地球という設定で、行き来にはウィスのような高度な瞬間移動能力を要する。

ドラゴンボールとバン王の存在が、人間の欲望を肥大化させ世界を混乱に陥れると見た謎の組織が、コロッケの世界でバンカーハンターを行い金貨を処分、ドラゴンボールの世界でドラゴンボールを探して破壊を目論む。

コロッケは仲間のバンカーたちや、ドラゴンボールの世界の悟空（または悟空ｊｒ）たちと組んでその組織と相対する。

…が、主要人物（オリキャラかどうかは未定）の一人が、その組織に所属する別宇宙のサイヤ人であり、悟空たちでさえも簡単にいかない敵となる。かつてその人物はバン王からの願い欲しさに金貨を強奪、それに伴ってあらゆる殺人・テロさえいとわない下種に家族を殺

され、あまつさえバン王の願いを悪用されたことを知っているため、その下種への復讐とバン王・ドラゴンボール、そしてそれとよく似たアイテムを全宇宙から根絶することを目的としている。

○恋姫無双×三国無双

自分の脳内では、7猛将伝での呂布伝沿いで、恋姫無印のプロローグの流れから一刀が黄巾の乱の時期に恋と出会い、呂布の配下となるところから始まる。そのため、メインヒロインは恋と呂玲埼としている。

呂布は一度妻を亡くしており（貂蝉や娘たちへの愛の強さもこれが影響）、呂玲埼はその時の娘。恋は拾われた子であるにもかかわらず、父にも匹敵する武の才能を持っているため、最初は義妹である玲埼から嫉妬されている設定、貂蝉のことも父を誑かす毒婦とみなしていたが、後に和解する。

恋姫たちは全員本家無双のキャラの娘・妹・妻・従姉妹・姪といった親戚関係となる。英雄譚キャラも登場。

月は董卓の孫娘であり、董白の妹。作中での名前は『董月』。姉とは性格の不一致や、自分の方が下の立場であることから仲が悪く、姉からはいじめを受けている。呂布からは『豚の孫娘とは思えんな』といわれ、一人の人としてよい方向に評価されている。

董白は祖父の取り決めで献帝の妻にされる予定だが、一方で妹の婚約者にされた一刀も誘惑し奪い取ろうとする祖父譲りの卑しさを露にする。だが一刀は内心『取り柄は美人であることだけ。それ以外は最悪』と、嫌悪感を抱いている。

董卓討伐の際は月も苦渋の決断の果てに、祖父を呂布に殺させるために彼らを手引きし、呂布軍に加わる。その際は親友である詠と一時離れ離れになる。この騒動には巻き込まないため、裏切り者の烙印を詠に押されないようにするために、自分が呂布の傘下に入ることは言っていない。

董白は一族が皆殺しにされるなか奇跡的に生還し、一刀と月、呂布への復讐を誓う。

仲間との結束を尊ぶ一刀・恋・玲埼サイドＶＳ己の武こそ全てを切り開くと考える呂布サイドの戦いも考えた。
最後は呂布からも認められた一刀は呂布軍の長となり、三国の戦いを終結させ、世界を破壊しようとする恋姫の左慈・于吉ら管理者との戦いに挑む。無双シリーズの老左慈は未来の彼か、またはパラレルの存在、同じ名前であるだけのいずれかを検討、恋姫貂蝉と共に一刀たちの味方をする。
呂布は恋姫貂蝉に対して心底からの憎悪と殺意を抱いている。
（知ってる人なら理由は言わなくてもわかるよね？）

○ドラゴンボールＦＧ（フューチャーガール）
本来の世界である未来の１７・１８号たちにＺ戦士たちが全滅させられ、過去から帰還したトランクスもセルに殺されタイムマシンを奪われた世界。
実はその世界で密かにビーデルと悟飯が出会い、パンが誕生し主人公となる話。
父、悟飯はとある人造人間との戦い（未来トランクスの回想での戦いより前）で敗北し、傷ついたところをビーデルに介抱してもらったことがきっかけで彼女と出会う。ちょうどその時、人造人間たちに殺されかけた人を助けるべく緊急出動した結果、たまたま仙豆を置て行ってしまっており、身動きできないほど負傷した悟飯は大人しく介抱を受け、休息中にビーデルと交流を深め、惹かれ合った結果パンを授かる。だが、人造人間を倒さなければ未来がないと逸る悟飯は、ビーデルの反対を押し切って元の戦いの場へと戻り、以後ビーデルの元へ二度と戻ることはなかった。
人造人間たちがトランクスが自爆装置を起動したことで破壊され、セルも彼を殺して過去の世界へ飛んでから以後、地球はしばらく脅威にさらされることはなかった。
幼い頃から人間離れした力を持っており、それ故に周囲から浮いた存在となるパン。その力を恐れるあまり、新たな人造人間なのではないかと事実無根の誹謗中傷を受け傷つくこともあった。

そんなある日、母であるビーデルから、自分の父親が人造人間と戦った英雄であると知り、興味を抱いたパンは自身のルーツをたどっていく。そんな折、父と同じく人造人間と戦ったトランクスという人物の名を知り、彼の家であるC・C社へ。彼の実母であるブルマと出会い、そこで父親のことの他、祖父である孫悟空の名を知り、そして彼が宇宙から来たサイヤ人と呼ばれるヒューマノイド宇宙人だと知る。

自分が何者なのかを知ったパンは、『もしこの先地球に途方もない脅威が現れた時、立ち向かうことができるのは、サイヤ人である祖父や父親の血を引く自分しかいない』と使命感を抱き、同時に『自分が地球を守り抜きさえすれば、皆が自分のことを認めざるを得ないだろう』という承認欲求を抱く。それについて、ブルマから精神面での危うさを抱かれる。

やがて血がにじむ修行を繰り返すようになり、ビーデルからもそのあたりを心配されるようになり、彼女も悟飯と同じく、人類の脅威との戦いで没するのではないかと不安を抱く。

魔人ブゥ復活のため、ついにバビディがダーブラたちと共に来襲。地球を守るべくパンは、バビディを警戒していた界王神と共にバビディたちに立ち向かうが、超サイヤ人にすらなれない彼女では勝てるはずもなく…

そんな瀕死の彼女を救ったのが、若返ったピラフ一味、その一人のマイだった。

マイとの姉妹のような友情を深めるパンだが、対するマイたちは、後ろめたそうにしていた。ドラゴンボールを若返りという私的な理由で使い、その直後にピッコロが死亡したことで二度とドラゴンボールによる地球の救済をできなくし、同時にパンの父親たちを死なせ、結果的に地球を壊滅に追いやった大罪への自覚があったため。

これを知ったパンは当然マイたちへ怒りを露にし、互いの友情をなかったものとして飛び出してしまう。

それからパンはかつての悟飯やトランクスが人造人間にそうしたように、バビディやダーブラに戦いを挑む日を送る。その過程でビー

デルがパンに戦いを辞めさせるべく現れ、界王神にも食い掛ってでも引き留めようとするも、ダーブラに石にされて殺されてしまう。その悲しみをきっかけに超サイヤ人へ覚醒を果たすが、それでも勝てなかった。しかも超サイヤ人に目覚めたことで、バビディが求めていた魔人ブウ復活に必要なエネルギーの採取対象として狙われることに。

あまつさえその戦いで、界王神も犠牲になる。ビーデルからパンを戦いに巻き込んでしまったことを責められたこともあり、最期はパンを巻き込んだことを詫びて果てた。

母の仇討ちに震えるパンは後日再びダーブラに挑むが、やはり敵わず…そんな時にマイがパンを助けに現れるが、彼女もまた殺されてしまうことに。

二度も大切な人たちを目の前で喪ったこと、しかもマイとは仲直りできずに死別したことで、ついにパンは超サイヤ人2となり、ダーブラとバビディを倒す。だが戦いのエネルギーをきっかけにブウも入れ替わるように復活する。

最初こそ危機感を抱いたパンだが、ブゥの人となりに邪悪さが見られないこと、自分以外に自分に匹敵する戦士がいない孤独感もあり、ブウと交流を交わすようになる。

ブウもパンの人柄に触れ、人並みの優しい人格を形成していく。

この世界ではザマスたちは登場しない。が、ベビーの脅威がＧＴと違う形で迫ることになる。

○無双オロチシリーズ×恋姫無双×戦国恋姫

考えてみただけ。キャラが多すぎるので。

こっちでも敵サイドに恋姫左慈・于吉を考えた。

○シリアス路線に変えたボボボーボ・ボーボボ

原作のギャグ中心ではなく、シリアス色の強いストーリーをメインにしたバージョン。

原作では一部うやむやになった箇所の保管あり（ボーボボたちの長

兄であるバーババ、終盤で登場した三世の部下、白幻死装徒等)。
ボーボボがアフロではなく、グラサンを身に着けた長い金髪の２０代後半の美形よりの男性で、真拳も鼻毛ではなく、髪の毛真拳（これは他のボーボボたちの兄弟たちにも共通)。髪の毛から剣を作り出し敵を切り裂くのが得意となるが、極楽鳥に憑依したビービビ同様の使い方が主な必殺技。
旅の動機は、兄ビービビとマルハーゲ帝国への復讐、そして姉であるブーブブ、兄であるベーベベの発見。当初はその理由で毛狩隊に対して容赦のない暴力と虐殺を働き、人類の救世主としてではなく、帝国やビービビの新毛の王国とはまた別の第３の脅威として恐れられる。
ブラックボーボボ、邪ティのいた闇の世界と、ハイドレートが落ちた世界は同一のものとする。マルハーゲ帝国の皇帝は、その世界から地上に上がった邪悪な種族の末裔で、
３世はその中でも最強の悪魔だった。しかし１００年前に世界を支配しつくした直後にボーボボの祖先たちの命と引き換えにした反撃によって力の大半を封じられてしまう。力を失った今のままではまた国を取り返されてしまう、なら目覚めるまでの間に力を溜め、目覚めたらすぐさま世界支配に乗り出すこととし、自ら信頼にたる部下たちとともに眠った。
ここでの毛の王国は毛玉のような住民ではなく、全員が人間で、その一部が毛を使った真拳使いの人間たち。ボーボボたちの父親ＴＳＵＹＯＳＨＩは国王で、最も力があり聡明且つ真拳を正しく使える民思いのバーババに座を告がせる予定だった。
しかしビービビは、ツルリーナ３世時代の栄華を取そうと躍起になっていた帝国に誘拐され、毛の王国相手のスパイとして毛狩隊に強制入隊させられ地獄のような生活を強いられたたせいで、かろうじて救出されたときにすでに王族でありながら上昇志向の強く邪悪な野心を抱くほどまでに心が歪んでしまった。元の生活に戻ってから、兄よりも優れていると自負していたビービビはバーババが世継に選ばれたことを快く思わず、バーババを暗殺。一度潰し、そこから自分の

主導で毛の王国を再建することで乗っ取り、原作と異なり最初から兄弟であるボーボボたちを殺害しようとする。

しかも毛狩り隊から救出されたときにはすでに帝国内でも最高幹部に位置するほど力をつけ、それを利用して自分に心酔する部下たちとともに4世を暗殺寸前まで追い込み、4世に「俺に国単位で服従することを誓えば命は助ける、約束を守ったら一族郎党皆殺しにする」と脅迫。結果としてマルハーゲ帝国を自分の手中に収め、当時少年でありながらマルハーゲ帝国の影の帝王となる。この事件で、マルハーゲ帝国を取り戻す切り札であり、奪還後の皇帝候補として4世の弟ハイドレートは身の安全と力の強化のため、わざと闇の世界に落とされる。あくまで国の命運を託すための処置なので、ハイドレートと4世の関係は原作ほど険悪なものではない。

ヘッポコ丸は押しかけ気味の弟子で、オナラ真拳ではなく、風と空気圧を操る真拳を使う。復讐に燃えるあまり他者と距離を置いていたボーボボだが、帝国に身をおいていた軍艦に妹をさらわれ故郷を滅ぼされた過去を持つヘッポコ丸に共通点を感じたことで、彼の熱意に折れて弟子とした。ビュティは帝国の襲撃で行方不明となった兄を探すため、一人親元を離れて旅に出た所で出会ったボーボボとヘッポコ丸に協力を願う。原作と異なり炎を使う真拳使い（邪ティの氷と対）だが、まだ未熟。ヘッポコ丸とともにボーボボの指南を受けながら力をつけ、ヘッポコ丸とも恋仲となる。

ソフトンは、ビュティの名前にあやかって本名は『クール』。ソフトンとしての姿もアニメ版のピンクな奴になっている。妹がいちごアイスが好みだったので、妹のことを忘れないためにバビロン神に頼んでソフトンとしての姿に変えた。帝国の襲撃で家族と離れ離れになったところを、帝国によって世界が乱れたことを案じたバビロン神に拾われ、以後ソフトンとしてバビロン神の元で修行を積む。またバビロン真拳から下品かつお下劣な技や表現は完全に抹消。

首領パッチは原作どおりハジケ組の親玉でもある弾けた奴。パーティのムードメーカーとなる。また原作どおり強い奴でもある。一方で、自分が何者なのかに迷う姿が時折見られる。ビービビの最大の

部下であるシゲキXとは同族だが面識はないが、後に世界中に真拳の概念をもたらした宇宙人の一族だと判明。雷を利用する真拳『ハジケ真拳』使い。

○ロックマンX&ゼロ
X～X8＋ゲームボーイ2作＋イレハン＋コマミソ＋岩本版漫画のキャラがいっせいに登場し、ゼロシリーズに続く。プクゾーでのネタも。
個人的にエックスの嫁にマーティ希望。
後のネオアルカディア四天王については、エックスのアーマーや特殊武器のデータから開発されているため、実質エックスの子供たちである。
ハルピュイア＝ファルコンアーマー、グライドアーマー、ブレードアーマー、風や雷系統の特殊武器のデータがベース。
ファーブニル＝ガイアアーマーと炎系特殊武器から。
レヴィアタン＝水・氷系特殊武器とマーティのデータから。
ファントム＝シャドーアーマー＋シャドウランナーなどの闇属性特殊武器から。
ゼロとワイリーの因縁にも決着をつけさせる。

○ロックマンZXシリーズ
ヴァンとエール、グレイとアッシュの両方が共に存在している状態。
ヴァンとエールは幼馴染。最初はエールがモデルXのロックマンとして覚醒。その後ジルヴェの遺志「エールを守る」を継いだヴァンがモデルZの適合者となる。
腐れ縁の幼馴染のため、お互いよく喧嘩はするものの、典型的幼馴染カップルのフラグあり。
ヴァンはモデルZ、エールはモデルXで主に変身するが、オーバードライブするとモデルXとモデルZが共鳴し合い、モデルZXに変身。ただしヴァンが原作通りゼロの姿をもとにしたモデルZXであ

ることに対し、エールの場合はエックスの姿を基にした青いモデルＺＸとなっている。
グレイとアッシュは原作のお互いのオープニングステージをクリアした後、ハンターキャンプで保護され目覚めたところで出会う。先に目覚めたアッシュだが、パンドラに殺されかけたせいで警戒が強くなったグレイに銃を向けられる。
モデルＡにはグレイが変身。アッシュは原作にも存在しないライブメタルで変身する。
モデルＡは、ネーミングこそアルバートの名前からとったものだが、実際はゼクスの時代では名前不明の、エックスとゼロと並ぶ伝説のイレギュラーハンター「アクセル」の戦闘データをもとに、モデルＶのプロトタイプとしてアルバートの手で作られたものだった。
ゼクスアドベントの続編も考案。
マスタートーマスが、かつてアルバートがモデルＶより以前に開発していた最悪のライブメタルを見つけ出したことで精神汚染。
彼が見つけ出したのは、かつてイレギュラー戦争を引き起こした史上最悪のイレギュラー「シグマ」のライブメタルだった。結果、そのライブメタルを媒介に復活し生きながらえていたシグマに次第に乗っ取られてしまう（ＺＸＡの隠しＥＤ）。アルバートでさえそのライブメタルを世に放つのを躊躇うほどだった。
ヴァンたち４人のロックマンは、ヘリオスら４人の敵ロックマンと戦いつモデルＨたちを取り戻しながらも、復活したシグマや過去のイレギュラーたちを倒し世界を守るために戦う。
ゼロシリーズのヒロインである『彼女』、Ｘシリーズで登場した複数のレプリロイドたちが回想も含め、複数登場、またはモデルＸたちの話で触れられる。

シグマの復活を知り、かつてのエックス、ゼロたちがサイバーエルフとなって登場し、自分たちをもとにしたライブメタルたちと一体化してパワーアップする。その結果、ヴァンたちがロックマンに変身時のアーマーのフォルムがＸシリーズの時代のエックスたちとさらに

うり二つのものとなる。
全てに真の決着がつくと引き換えに地球は再び荒れてしまうが、平和のために今度こそ力を尽くそうとヴァンたちは世界から去っていくエックスたちに誓う。
今度こそ自分たちがいなくても大丈夫と悟ったエックスたちは去り、ライブメタルがすべて消滅する。
そして遥か未来、ロックマンＤＡＳＨの時代が始まる流れ。

原作に登場しないライブメタル
※アッシュが以下の二つのうち、一つを、残りは新たな敵がこれらを使って変身。
モデルＶ２（仮称）＝ＶＡＶＡ。イレハンやＸ３，Ｘ８で彼が使用していた兵装をすべて使用する。自我が強く、変身者の意識がＶＡＶＡに乗っ取られている。エックス、ゼロ、アクセルに続く４人目のＸシリーズプレイヤーキャラ繋がりと特殊武器の豊富さで推薦。
モデルＣ＝クラフト。Ｚ４のボス戦で使用した兵装をすべて使う、爆発力重視。キャラ設定的に味方に最もなってくれるタイプのための推薦。

モデルＤ＝ダイナモ。セイバーを飛ばしたり振るったりする。上空からビームを落とす。
モデルＧ＝ゲイト。絶対防御
モデルＲ＝レッド。二枚刃の鎌を振るい、竜巻を巻き起こす
モデル？＝シグマ。歴代シリーズのシグマの攻撃性能全てが使用可能。第１形態の場合は全シリーズの第１形態を、最終形態は第１形態に加え、第二形態の攻撃すべてを使う。
モデルＬＭ（レム）＝ルミネ。モデルＡ、モデルＶのコピー能力をさらに発展させたライブメタル。姿を変える手間を省き、あらゆる能力をコピーし使用。

モデルＥ＝エルピス。Ｚ２で彼が使った技を使うため、ある種の劣

化ダークエルフ。だがそれでも十分に強力
　モデルＣＸ（シクス）＝コピーエックス。ライブメタル自体はモデルＸのコピーだが、人格がコピーエックスのもの。形態変化などの能力も同じ。しかし、真の力に目覚めたモデルＸに及ばず、シグマやＶＡＶＡなどに「所詮エックスの劣化コピーだ」と見下され、屈辱と嫉妬心を煽られる。
　モデルＲｏ（ロー）＝初代ロックマン。全初代シリーズの武器、およびラッシュ関係の武器が使える。
　モデルＢ＝ブルース。ブルースシールドを利用した戦法。
　モデルＦｏ（フォー）＝フォルテ。ゴスペルを従え、自己強化可能

○Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ
　３つのルートのトゥルーＥＤまでのイベントを回収し、ｈｏｌｌｏｗへと続く形のｓｓ。もちろんサーヴァント（桜ルートで闇落ちしたセイバーが士郎によって救出される設定）全員生存。正妻としては個人的にセイバーを推奨するが、稟と桜も士郎にアプローチする。（こうなるとただハーレムものにも思えるがｏｒｚ）。
　ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの元になったＦａｔｅ／ｐｒｏｔｏｔｙｐｅやＦａｔｅ／Ｚｅｒｏの設定も？

○キングダムハーツ×テイルズオブハーツ
　時系列は、ＫＨ３前とハーツＥＤ後。
　ＤＳ版の隠しダンジョンからリシア・カトレイアの操るゼロムやハートレスがあふれ、再び世界が脅威にさらされる。ソラやリクたちが原界に現れ、シングたちと共闘する。カイリも新たなキーブレード使いとして戦いに参戦し、恋バナを交わしながらコハクと仲良くなる。

○テイルズオブデスティニー
　リオン生存ルート。
　公式でもメディアミックスの形で実際に出ており、一度やったこと

があるが途中で断念した。リオンサイドのＥＤ直後からスタートし、幼少期のロニと会うなど、２の設定も振り込ませていた。マリアンとの再会も検討していた。

１では破壊できたはずの神の目が、２では４本のソーディアンを刺してもびくともしなかったものを、シャルティエを刺すことで解決されている。だったら１の時点でどうして破壊できたのか？と矛盾を感じたのが誕生経緯。（おそらく２ではバルバトスが干渉していたので、奴がなにか神の目に細工したからだと思うが、あまり明確さを感じない矛盾だった）

○テイルズオブシリーズ×ゼロの使い魔

ゼロ魔の世界観をテイルズ風にアレンジ。通貨はガルドに変換、術技もゼロ魔独自の魔法の他にもテイルズで使われたものを利用。虚無の魔法は光と闇の属性の二種類。

魔法を使いキャラばかりだから、一部戦闘方法ぶ変更を加えたりする。

・サイト

デルフや銃などの武器を使い、４属性魔法を吸収して属性術技を習得する。

秘奥義＝４属性に応じたものに変化

火『殺劇舞荒剣』

風『裂衝蒼破塵』ワルド戦で習得し、奴の腕を切り落とす。

水『竜虎滅牙斬』

地『轟魔隆衝断』

吸収なし『クリティカルブレード』

ＤＬＣコス＝リオン（着るとサイトがクールになる）、ルドガー

・ルイズ

光属性および回復術がメイン。近接術技は鞭を使った最低限のみ。

秘奥義には虚無の魔法に加え、『ビッグバン』

ＤＬＣコス＝マルタ。着るとサイトにデレデレになる。「サイト、だーい好き！」

・シエスタ
ほぼデスティニーのリリスと同じ。
ＤＬＣコス＝クロエ。元々シエスタは女剣士になるかもしれなかったということと、同じ黒髪ボブカットから。着ると生真面目で堅苦しい口調になる。サイトも苗字で呼ぶが、クロエ同様主役に惚れていることに変わりない。
・ギーシュ
刺突剣技と土魔法で戦う。秘奥義『ブラッディローズ』
ＤＬＣコス＝アスベル。着るとギーシュが心身ともにかっこよくなり、モンモンが惚れ直し続ける。だがやられる台詞は「マモレナカッタ…」
・タバサ
風・水属性術メイン。近接戦闘もできる。秘奥義『インディグネイション』
ＤＬＣコス＝プレセア、エドナ。着ると毒舌になる。
・キュルケ
火属性。
ＤＬＣコス＝ジュディス。色気姉さんキャラと、燃えやすい性格から。
・ティファニア
闇属性、回復とシャープネスなどの支援術技メイン。
秘奥義は原作で使った忘却と分解の魔法。
ＤＬＣコス＝ミント。金髪ロングヘア＋ボインちゃんだから。
・コルベール
過去の経験から火の魔法のほか、近接戦闘および格闘術も会得済み。
秘奥義はメンヌヴィルに使った『爆炎』
ＤＬＣコス＝ウィル。着ると化石マニアになる
・ハルナ
ゲーム版のオリヒロ。サイトの地球時代からの知り合いで思いを寄せている優しい少女。一方で二重人格であり、戦闘時は荒々しい方

の人格「アキナ」が戦い、爆弾や暗殺術を使う。
ＤＬＣコス＝すず、ロゼ、アリエッタ（声つながり。着ると超内気になる）

・クリス
ゲーム版オリヒロ。見た目もそうだが、地球の文化を知る侍ガール。ある国の姫でもある。魔法も使うが、主にサイト同様近接武器を用いた戦闘を好む。
ＤＬＣコス＝アリーシャ

・ミラ（分史）
原因不明だが、エクシリアの世界からハルケギニアに流れ着いて記憶喪失に。ゼロ魔世界の４大精霊と契約して当時の力を取り戻し、オスマンに代わってゼロ魔世界のマクスウェルになる。秘奥義も使うようになる。
あらゆる武器を使いこなして戦い、お人よしでもあるサイトの姿に、ルドガーの姿を重ねている。
サイトに攻略されると思う。原作でかわいそうだったあまり、なんか個人的に登場させたくなった。
ＤＬＣコス＝ベルベット

・オスマン
実は力を失った大精霊マクスウェル本人である。すでに寿命が訪れつつあり、魔法学院で自分の使命を告ぐ存在を待ち続けていた。自分の後継者にミラを選ぶ。そこには明らかに彼らしい不純な理由がある。「やっぱり後継者は若くて綺麗どころがよいのぅ…」

○インフィニットストラトス×ターミネーター（随時書き換え予定）
抵抗軍リーダーであるジョン・コナーやその近辺の人間および彼らを守るためにプログラムを書き換えられたターミネーターを抹殺することで、人類にいずれ敗北する未来を覆すため、スカイネットはさらなる高性能ターミネーターの開発にかかる。

その際、別次元の存在を記したデータを発見し、別次元同士の世界を行き来可能とするシステムを開発し、インフィニットストラトスの世界に行き着く。その世界のＩＳに目を付けたスカイネットは、偵察用ターミネーターを送り込んでＩＳのデータを盗み、元の次元へ持ち帰る。結果、ＩＳを搭載したターミネーターが出現し、人類は再び滅亡の危機に陥る。束もデータを盗まれ、犯人を突き止めようとしたが、既に偵察用がターミネーターが元の次元に逃亡したため突き止めることができず、苛立つ。

スカイネットは、インフィニットストラトスの世界の女性たちがＩＳの存在を盾に権力を振りかざして好き勝手していることを知り、「人類がいずれ地球に害をなすだけの存在となる」と断定。全次元に人類抹殺のためのターミネーターの軍勢を送り込むことを決定する。だが、その決定を下したことで未来が変わる。

ジョン・コナーの友人にしてその右腕となる戦士に、一夏の存在が判明する。元の世界で最初こそＩＳ装備の最新型ターミネーターで人類を圧倒していたが、未来においてターミネーターハンターとして人類の新たな救世主となる一夏が現れたことで、彼を危険視したスカイネットは、最優先で一夏を抹殺対象に認定する。

インフィニットストラトスで一夏と鈴の試合の際に、ついにそのＩＳ搭載ターミネーターが現れ、学園の生徒たちを次々と抹殺する。

そのターミネーターは一夏たち最新型の第３世代をも上回る第７世代にまでヴァージョンアップされており、一夏たちは全く歯が立たず、鈴が戦闘不能に。セシリアも加勢するが彼女を守りながら戦うことになり、形勢逆転のめどが立たない。

箒は自らおとりとなる意味も含めて一夏をスピーカーから激励するも、一夏が攻撃する前に箒はターミネーターの砲撃を受け、放送室の爆破に巻き込まれて死亡してしまう。

一夏はその時の怒りで、許容範囲以上のエネルギーを解放した零式白夜を放ってターミネーターにダメージを与えるがその反動で戦闘不能。それでもなおターミネーターを倒すに至らず、今度こそ打つ手なしに。

だがその時、死んだはずの箒と同じ顔の女性型ターミネーターが出現、一夏を襲ってきたターミネーターを倒した。
そのターミネーターは、たったその時に死んだ箒の遺体を、その死を哀れんだ束がターミネーターの技術を逆に盗み返し利用したことで蘇生させた、未来の箒自身。だがターミネーター化した影響で、Ｔ―８００と同じように機械的で無感情。一夏は箒が無事だという安心から一転して、人間だった頃の箒がもういないことを嘆く。未来の束もそのことで苦悩し、自らの我儘で家族を死なせたことをきっかけに、自分が世界を乱してしまったことを悔いるようになった。（過ちに気づいたのも遅すぎた、とも自らを責める）
その後ＩＳ学園は封鎖、一夏たちを最終護衛対象とした政府は一夏たちを軟禁し、優秀なＩＳパイロットを配備に着ける。ターミネーター箒を危険視し抹殺すべしとのことで攻撃対象に。一夏は箒への未練もあってそれに反対し自ら止めに入る。抹殺を推奨するパイロットの中に、女性至上主義を掲げる者がおり、一夏を殺してしまおうとして彼もろとも攻撃するが、箒によって返り討ちに合う。ターミネーターへの恐れから放棄を完全に恐れたパイロットたちは箒を攻撃するも、箒は一夏を連れて逃亡。
この件を利用し、女尊男卑主義の愚かな女性政治家たちは情報を捏造。『織斑一夏はターミネーターと男性隊員で構成された反女尊男卑組織のテロリストのリーダー』とした。千冬は当然これに反発するが、権力を振りかざし、自分たちの都合のいいように千冬と束を神格化していた女性議員たちからは「男どもに洗脳されている」とみなされ、拘束されてしまう。また、擬態能力を持つターミネーターが女性利権団体の上層部を殺して入れ替わり、部下たちを用いて一夏やジョンたちを追い詰めようとしていた。
一夏は千冬を救出するために彼女の監禁場所を探す。その途中箒から未来で何が起きたのかを尋ねた際、実は千冬を拘束した者たちを含めた女尊男卑主義者や某国企業をはじめとした組織はその異常な思想をスカイネットに利用され、逆に人類を破滅させる原因の一つとなることを明かされる。

未来にて、ＩＳを知り尽くしたスカイネットは洗脳プログラムを用いてＩＳの人格プログラムを書き換え、ターミネーターと同じ人類抹殺思考に染めた状態で、束が作ったコアとはまた別に新たなコアを開発。これにより未来でＩＳはさらに普及するが、結果として人類を女子供関係なく抹殺するＩＳが横行した。パイロットは自力で暴走状態のＩＳを解除することはできず、ＩＳによる権力を盾に地球の平和を乱した原因でもあるからＩＳもろとも抹殺するか、同じ人間としての情けから救出するか意見が分かれていた。

一夏とのかかわりを通して、箒は元々の人格を次第に取り戻していくが、自分は人間ではなくターミネーターとなっている現実（一夏を守る使命こそあるが人殺しの兵器であることに変わりないこと、人間として一夏と恋人・夫婦にいずれなるチャンスを持つことができないこと）にも苦悩するようになる。束に対しては身勝手さに対して怒りや複雑な感情はあるものの、逆に一夏を守れる力をくれたことや、一度死んだ自分がもう一度一夏に会うチャンスをくれたことに感謝をしている。一夏はその苦悩を知りながらも、箒への想いを自覚していく。

逃亡の果てに、一夏は利権団体に追い詰められる。人間のＩＳパイロットたちは一夏とを殺すことしか頭になく、説得すらもしない。箒の力でも退けられそうにないほどの兵力に囲まれていた。利権団体議長に化けていたターミネーターが止めを刺そうとするも、ついにそこへ鈴やシャル、セシリア、ラウラたちの他、ジョン、サラの親子とＴ―８００もＩＳの銃器のみを装備した状態で一夏たちを救出。Ｔ―８００の攻撃で議長がターミネーターであることもバレ、利権団体は自分たちが既にターミネーターの支配下に置かれていたことを自覚、騙されていたことを知る。議長に擬態したターミネーターを倒そうとするが返り討ちにあい、「死にたくなければ従え」と脅され、やむなく従う。

ジョンたちからの情報で、次元の壁の穴からターミネーターの軍勢が現れ、一夏たちの世界を侵略しようとしていることが明かされる。それを阻止するには次元の穴を閉じ、且つ議長に化けたターミネー

ターを倒すしかない。そのうえでジョンとサラも元の世界に戻らなければならず、ターミネーターもスカイネット誕生の要因となるため最後は滅びなければならないことも告げる。

一夏はいずれ箒と今度こそ別れの時が近いうちに来ることに苦悩する。ジョンなら箒をターミネーターから元の人間に戻せないかと相談するが、その方法はないとサラから断言されてしまう。

箒はすでに覚悟はできていると告げるが、一夏は箒への愛情を抱いていたがために納得しようとしない。ジョンはその姿に、かつての自分や、前回自分を守るために未来からやってきて最後に溶解炉に自ら入って自決したT―800と重ねる。

○盾の勇者の成り上がり×ありふれた職業で世界最強

尚文に逆恨み同然の恨みを抱くマイ…ビッチが、ありふれの世界の神エヒトから接触を受ける。神としてマインの正体を知るエヒトは、ありふれの世界で活躍しているハジメ（この時点で香織はノイントの体となっている）を疎ましく思い、マインや彼女と結託中のタクトに神の力の一部を与え、討伐依頼を下す。仲間には中村恵理と、復活させられた檜山大介、清水を送り付けられる。

神の力で尚文もハジメも抹殺しようと目論むマインとタクトだが、寧ろハジメと尚文を同士討ちさせてしまえばよいと考え、ハジメたちを神の力でメルロマルクへ、『波』に乗せて尚文たちにラルクたちと同じ「別の世界からの勇者」と誤認させて戦いを挑ませる。

マインたちの目論見通り、尚文たちはハジメたちと交戦してしまう。しかし、ラルクたちや『波』のこと、なぜこの世界を襲うのかと尚文に問われ、ハジメたちは違和感を覚えて攻撃の手を止める。一瞬互いに攻撃の手を緩めてしまったことで臨んでいた共倒れが望めなくなったことに苛立つマインが恵理と清水に魔物と死人の軍勢で取り囲ませ尚文たちに応戦させ、その隙に檜山が隙を突いて尚文かハジメを暗殺しようとし、タクトは神の力で強化した一撃で尚文・ハジメたちを味方の魔物や死人もろとも（敵中の檜山も含めて）皆殺しにしようと図る。

だが、以前よりさらに強くなったラースシールドでハジメたちも守った尚文からの呪いのカウンターで逆に大打撃を食らうマインたち。

自分たちが手のひらで踊らされていたことで、ハジメはマインたちも抹殺すべき敵と認定、尚文は恵理たちも倒すべき敵であり、マインたちへの憎悪と怒りを強めて反撃。さらにハジメも巨大レールガンによる狙撃で援護。倒すに至らなかったが追い返すことに成功した。

その後はお互いや、自分たちの召喚された世界について自己紹介を交わし合う。

性格も普通だった頃より荒んだ不遇な勇者同士ということもあり、尚文とハジメはシンパシーを感じ合い、互いの本妻同然のラフタリアとユエも、異性に対する認識や恋人関係の違いを見出しながらも、二人を似ていると評する。

尚文は一方で、マインに対するトラウマもあって、ハジメのパーティメンバーがやや男に対して積極性がありすぎることに引き気味。自分もいずれ所帯持ちになるのかと一瞬考えるも、そんなことないか、と切り捨てる。

ハジメは元康や樹のことを聞き、どっちも思い込みの強さや暴走しがちな正義感の塊ということもあり、悪い意味で光輝と重ねる。尚文も光輝を「元康からスケベを抜き、樹のうわべだけの正義感を合わせたような奴」と評価する。恵理や檜山に対しても「勇者は思い込みの激しいのばっかなのか」と低評価。しかしそのあたりはラフタリアから「人のこと言えません」と突っ込まれる。

マインたちのことを聞いたハジメは、「二度と歯向かわせないためにも、真っ先にぶっ殺すべき相手」と認識。

ラフタリアはリーシアと共に、ユエやシア、香織と恋愛面でのトークを満喫し、尚文を振り向かせるための術を相談するが、その大胆かつ異性への積極性に戦慄と尊敬。羨望を感じる。だが対策手段がいずれも尚文のトラウマを刺激しかねない手段であることもあり、ユエたちは寧ろやる気を見せてラフタリアのために尚文陥落作戦を考えていく。

一方で、尚文とハジメ、どっちがいい男かの言い争いで張り合うこともあるが基本的に良好な仲となる。
フィーロはハジメからはミュウと重ねられる。フィーロはフィロリアル特有の、ドラゴンに対する嫌悪感故に、龍人族のティオと接触したがらない。対するティオはフィーロからの嫌悪感に「このような幼子からも！た、たまらん…はぁはぁ（*´Д`）」と、寧ろ快感を覚えてしまったことで余計に気持ち悪がられる。

○対魔忍（ややアンチより）
これまでの任務で対魔忍たちは事態の収拾こそ多いものの、一方で裏切りや致命的なミスが多いことも指摘されてきた。その要因として、一流の実力者でありながら失態を犯す対魔忍たちの多くが女性の構成員であることが上層部に挙げられた。
かのアサギでさえ不屈の戦士として功績をあげている一方で、幾度も敵の凌辱によって堕とされたり配偶者や恋仲となった人物が次々と不幸になったこと、水城不知火に至って性的快楽欲しさのために夫や残された娘を裏切って敵側に寝返るという許しがたい事態も発生。娘のゆきかぜも優秀な対魔忍であるが、結局自ら犯した調査方法で逆にミイラ取りがミイラになる失態を犯し、仲間であり恋仲だった達郎を裏切り精神的苦痛をもたすという問題を起こす。同様のケースも他にたくさんあったことが判明する。
今回は大丈夫でも、次もまた裏切らない、堕とされないとも、再び立ち上がってくれるとも限らない。それどころか何度同じことを繰り返す度に不信感ばかりが募らされる。
彼女ら以外にも度々問題を起こす女性対魔忍たちをこのまま無対策のまま任務に赴かせるのは危険とした、達郎たち男性対魔忍や上層部たちは、女性差別的な考えと承知の上で、対魔忍を続けようとする彼女らに性的快楽の喪失と不妊手術の強制を決定。希望しないものには対魔忍としての力を封じて即刻組織から追放するか、男性対魔忍たちへの訓練教官としての任務のみしか対魔忍の力を行使することを許可されなくなるか、男性対魔忍たちが性的快楽に耐えうるための

訓練相手、または単純に発散する相手としての娼婦として在留するか選ぶよう命じる。

これに女性対魔忍たちは性差別だと反発するも、これまで性的調教凌辱に屈して敵側に寝返る光景の映像を見せつけられ「自分たちの未熟さも原因かもしれないが、お前たちもこうならない保証があるのか？絶対に屈しないとほざく奴ほど屈していくんだ」と達郎たちから指摘され、やむなく従っていく。中には反発する者もいたが、彼女たちは「性的快楽に耐えるための訓練」という名目の元、男性対魔忍たちからの凌辱を受けさせられることになり、誰一人耐えられず屈服する羽目に。

やはり女に任せられない、そう判断した組織は女性対魔忍たちへ対策を推し進めていった。

しかし、妖魔側が今度は朧たち女性妖魔を利用して男たちを快楽に陥れ寝返らせることを予想されたため、任務に向かう男性たちは自ら去勢、性的快楽の遮断を講じた。対魔忍たちは性から隔離された男性構成員で占められ、選曲を好転させていく。

結果、黒井竜司も抹殺され、朧も魂を破壊されて永遠に葬られ、性行為による寝返りが通じなくなった妖魔側は時間こそかかったものの、対魔忍によって絶滅することとなった。

ようやく世界が妖魔たちから平和を取り戻し、組織は妖魔側と繋がっていた人間たちもことごとく粛清しながら世界を立て直し浄化していく。

一方、女性対魔忍たちは一部の者を除いてほとんどがビッチ、裏切り者、裏切りの種と蔑まれ、肩身の狭い思いをしながら生きていく。ゆきかぜたちは、かつての恋人が自分と違って別の女性と幸せを掴んだ姿を見て、今の現実を呪ったり、自分の弱さと未熟さをひたすら呪うのだった…。中には、女性の尊厳を勝ち取るためという大義を掲げ組織へ反逆を企てる者も現れていく。

ウルトラマンネクサス―ＡＬＴＥＲＮＡＴＩＶＥ―

西暦２００１年。
私たちが生きている時代からほんの１０数年前。
ごく平凡な日常を過ごす国。内部抗争で乱れていく国。不安定ながらも、人類はその日をごく当たり前のように生き続けてきた。
私たちの場合は、家族や友人、恋人と当たり前のように学校生活や社会人生活を送っているのが日常と言うべきかも知れない。
だがもし、そんな日常さえも許されない、平行世界があるとしたら…。

世界は、私たちが予想する以上の残酷さを孕んだものであるに違いない。

ここはもう一つの、西暦２００１年の平行世界。
地球は、地球外生命体によって蹂躙されていた。
その生命体の名は、『Ｂｅｉｎｇｓ ｏｆ ｔｈｅ Ｅｘｔｒａ Ｔｅｒｒｅｓｔｒｉａｌ ｏｒｉｇｉｎ ｗｈｉｃｈ ｉｓ Ａｄｖｅｒｓａｒｙ ｏｆ ｈｕｍａｎ ｒａｃｅ（人類に敵対的な地球外起源種）』
通称、ＢＥＴＡ（ベータ）。
その体を構成するものは人類の肉体と似ているのだが、その常識は地球生物学の常識を完全に逸脱した存在で、その明確な目的は不明。
わかっているのは、ＢＥＴＡは我々人類を『生物として認識していない』という、許しがたい事実だった。

事実、ＢＥＴＡは地球で活動を開始して以来、一度たりとも人類に友好的な行動を取るどころか、地球全体を埋め尽くしてしまうのではと思えるほどの夥しい個体数を増やし、あまりに多くの自然や命を奪い去っていた。

無論人類はこれに対し、『戦術機』と呼ばれる巨大ロボットに搭乗し応戦してきたのだが、戦力は圧倒的不利な状況で、人類はこれまで勝利らしい勝利を飾ったことはなかった。
現在もＢＥＴＡは地球上に『ハイヴ』と呼称された巣を地球の各地にいくつも建造し、人類に今もなおこれでもかといわんばかりに牙を向け、その度に数多の悲劇を生み出し続けていった。

そして、ここにも…。

「くそ！まだ増えるのか!!」
地球のある地点にて、戦術機の一部隊が、こちらに侵攻しているＢＥＴＡの群れに向けて銃撃を続行していた。撃破が決してできないわけではない。
だが、圧倒的物量をぶつける。たったそれだけの無策な作戦のみで、ＢＥＴＡは人類を蹂躙し続けてきた。
「これ以上持たない！後退だ!!」
「り、旅団規模のＢＥＴＡの群れが２時の方角より接近中!!」
「な、何!?奴ら…まだ増えるというのか!?」
またしても敵が増えた。その事実に驚く間も与えず、彼らの頭上に巨大な影がのしかかる。
「要塞級!?」
ＢＥＴＡの中でもかなりの大型種である、要塞級のＢＥＴＡだった。巨大なため比較的鈍い動きだが、その分攻撃力が高く体も頑丈すぎる。そしてその１０を超える足の一撃は、戦術機の奏功など簡単に貫いてしまう。
「畜生、出て行け！俺たちの星から!!」
それが、その戦術機に乗っていたパイロットの最後の言葉だった。
直後、その戦術機は要塞級の一撃を受けて粉々に砕け散った…。

はずだった。

そのパイロットをはじめとした、作戦地点全ての戦術機のコクピットを完全に染め上げるほどの、赤い光が包み込んだ。

本来の、この世界の英雄が現れる数日前のことだった。

――――――一人の青年が、夢を見ていた。

ジャングルの生い茂る、夕暮れの遺跡。

今の地球ではもはや決して見られないであろう、自然に溢れた景色は異様なものだろう。

青年は、遺跡の中へと足を踏み入れる。

最初は真っ暗だったその遺跡だが、青年が奥に足を踏み込んだ途端、

壁に設置されていた松明に炎が灯り、奥への道筋を示す。

青年は歩く。遺跡の奥へ。

一歩ずつ、光を求めて…

その果てに安置された、一体の石像。

彼はまるで何かにひきつけられるかのように、その石像に触れる。

触れた瞬間、彼は白い光に包まれる。

「また、ここに来ちまうなんてな…」

町と言うべき景色は跡形もない。

見晴らしのいい坂道を歩いていたその青年『白銀武』は呟いていた。

またここにきた。その言い方からして、彼がここに以前も訪れたことがあることは察することはできるだろう。

しかし、武の場合はそれだけではない。
武の目には、この荒野となってしまった街の光景が、本来多くの人々がにぎわい、何気なく当たり前の平和な街の光景と、一瞬だけダブり、そしてまたもとの荒野の景色に戻ったように見えた。
実を言うと、武はただの人間ではなかった。
かつて、彼は『ＢＥＴＡのいない平和な世界』から次元を超えて、この狂った世界に呼び出された、所謂異世界人だった。
他愛のない平和を謳歌していた彼が、突如人類が滅亡の危機に瀕しているこの世界に訪れた時はなにごとかと何度も思った。
しかし、どんなに夢だと思っても、覚めることはなかった。
最初は行き成り命を賭けた戦いに身を投じることに躊躇いを覚えていた武だったが、その世界で出会った…自分が生きていた世界と同じ少女たちとこの世界でも出会い、そして絆を結び、人類の勝利と自分たちの未来を信じて戦った。
だが、自分たちのあずかり知らぬところで、人類が地球を見捨てる計画を立てていたことを知る。もはやその計画は覆ることも、撤回されることもなく、人類は選ばれた、わずか数万人の人たちを乗せた宇宙船に乗り、ＢＥＴＡに支配された地球を捨てることになった。
武は、最後まで地球を捨てまいと、地球に残り、ＢＥＴＡと死闘を繰り広げることになった。
その戦いの記憶はない。よく思い出せなかった。でも、武はなんとなく思った。
恐らく自分は、ともに残った仲間たちとともに…。
しかし、彼の戦いはまだ終わらなかった。
今こうしてここに立っているように、武はまたしても自分の自宅から外に出ると、異世界に飛ばされたばかりの時と同じ光景、経験をすることになった。、
だが違っていたのは、一つ前…わかりやすく言えば一つ前のループ世界で積み上げた記憶と、そこで鍛えられた分の身体能力を身につけていたことだった。
武はループ前の記憶と経験を用い、今度は人類に地球を見捨てさせ

ることなくＢＥＴＡに勝利する未来を勝ち取るために戦うことを決意した。
最初のループでは会うことがなかったが、次のループで今度こそめぐり会った、元の世界ではともにいることが当たり前で、それゆえに気づくのが遅かった…この世の何よりも強く愛していた少女『鑑純夏』をはじめとした仲間たち、この世界で新たに出会った先人たちとともに武はあらゆる危険な作戦にも参加し、
最終的に見事、人類の勝利を勝ち取ったのだった。
その勝利によって、人類に次のＢＥＴＡ襲撃まで３０年の猶予が与えられた。
しかし、その勝利は武にとって、以前の世界以上に多くの、そして大切な人たちを失ったことを意味していた。
不思議な力を持つ寡黙な少女、社霞。
元の世界でも、そして最初のループでも武のよき導き手となった恩師、香月夕呼。
この二人と他数名を残し、純夏をはじめとした数多くの仲間たちが死を遂げていった。
元の世界では、教室に会うたびに他愛のない会話を繰り返していたはずの仲間たちの死は、たとえ自分が生きていた平和な世界に生きた彼らと違っても、武の心に深い悲しみを遺した。
でも、もう役目を終えた武にこの世界に残る理由はなかった。
全ては、人類に再び地球の明日を勝ち取るための戦い。
以前の、選ばれた人類が地球と遺された人々を置き去りに宇宙へ逃げ出すという最悪の未来を覆すための戦い。
武は見事、それをやってのけた。
もし、それでもまた…武がこの世界を3度にもなって再び経験することになるのだとしたら、それは…
まだこの世界で、自分がやらなければならないことがある、ということだ。

（けど、俺をこの世界に引き止めていたこの世界の純夏は、あの時…）
この世界の彼女は、自分がもといた世界の純夏と違い、その体は純粋な人間ではなかった。
正確に言えば…所謂人造人間の体を与えられていたのだ。しかしその体は人類にとって、武のことも含めとてつもなく大きな力となった。
そして、彼女の持つその力が、別世界の存在であるはずの、平和な世界を生きていた武をこの世界に引き寄せたのだ。
しかし、最後の戦い…桜花作戦。
彼女は稼動限界を向かえ、幼い頃の武から託された人形を胸に抱いたまま、静かに眠りに着いた…。
そして、武はこの世界に留まることができなくなるはずだった。
純夏が、永遠に目覚めぬ眠りに着いたあの時ほど、純夏を強く思い、悲しんだことはなかったと自信を持って言える。
だからこそ、自分は今度こそ迷わず言えると思う。
たとえどの世界、どんな世界でも…

『俺は純夏を愛している』、と。

「純夏、みんな…」
武の脳裏に浮かぶ、元の世界で他愛のない日常をともに過ごした同級生たち。
そして、この世界でもまためぐり会い、ともに泣き、笑い、戦って散っていった仲間たち。
「待っててくれ…」
今度は、みんなも救う形で、この世界を守ってみせる。
元の世界に戻らず、この世界・この時間に再び舞い戻ってきたのなら、それが自分の選ぶべき選択だ。

しかし、そんな誰よりも崇高な決意を壊そうと…武の背後から間の手が忍び寄ってきた。

「…!!」
振り向いた瞬間、武はその表情を一変させていた。
「……」
「水月、大丈夫？なんかすごく不機嫌そうだけど…」
国連太平洋方面第１１軍横浜基地。
その食堂にて、ある一人の、青いポニーテールの女性『速瀬水月』がなにやらイラついた様子で食事を取っていた。
もう一人、おっとりとした雰囲気の、彼女の友人らしき女性『涼宮遥』が落ち着くように言うも、その気配は見られない。
「…ごめん、今朝夢を見てた」
「夢？」
「あいつが、どこかのジャングルを歩いてる夢」
「あいつ…？」
誰のことだろうと遥は気になるが、そのときに浮かべた水月の表情を見て、夢に見た人物が誰なのかを察した。
「…情けないわよね。戦術機のパイロットで、中尉まで上り詰めたあたしが、未だにアイツがどこかで生きてるんじゃないかって、まだどこかで思ってる…」
「水月、そんなことないよ」
自己嫌悪する水月に、遥は首を横に振った。
「私だって、今でも彼が生きていたら…そんなことばかり考えることがあるの」
その会話を聞くと、この二人が、水月が夢に見たという人物に対してどのような感情を抱いていたのか察することがいるに違いない。
「…全く、最後まで勝手なんだから」
「本当ね…」
少し棘のある言い方をしつつも、結局その人物への強い思いを口にする二人。見た目からして男がほうっておくことがないに違いない二人をここまで惑わせる人物とは、一体どんな人物なのだろうか。
「お姉ちゃん!!速瀬中尉！」

そこへ、オレンジがかった髪の少女が、水月と遥の元にかけてきて、キキーッ！と急ブレーキをかけた車のごとく立ち止まった。
「ど、どうしたのよ茜、そんなに慌てて…」
現れた少女は『涼宮茜』、遥の妹で階級は少尉ある。遥の妹ということもあり、姉の縁で水月とも仲の良い先輩後輩の関係となっている。
「もしかして…ＢＥＴＡ?!」
あまりの慌て様に、もしや敵が…ＢＥＴＡの襲撃が起きたのではと危機感を抱く。
「うぅん。ＢＥＴＡじゃないの。だって警報鳴ってないでしょ？」
「…確かに」
言われて見れば、警報は鳴り響いていない。つまりＢＥＴＡ襲来は観測されていないということだ。思わず警戒して損した。
「だったらそんなに慌てないでよ…びっくりするじゃない」
遥がやたらと慌てる妹の大げさとも取れる反応にため息を漏らした。
「ごめん、お姉ちゃん。でも…」
驚かせてしまったことへの申し訳ない気持ちを表情に出しつつも、すぐにいつもの彼女らしく、真剣味を帯びた顔つきに変わった。
「これを見て動揺せずにはいられなくって…」
茜はポケットから数枚ほどの写真を取り出し、机の上に並べて二人に見せた。

…キン
基地の窓から、外を眺めている少女がいた。
長い銀髪を二本に結い、その髪留めはさながら黒兎の耳のようだ。
遥か遠くの、街の後の景色を見つめながら、少女…社霞は自分がたった今、何かただならぬ存在を感じ取った。
「社、どうしたの？」
後ろから彼女に声をかけてきたのは、この基地の最高責任者であり、ひとつ前までのループにおいても武にとって心強い味方でもあった恩師、香月夕呼。

「…来ます」
「来る…？」
来る、とは…まさか、ＢＥＴＡ？
「いえ、ＢＥＴＡだけではありません」
夕呼の考えを先読みしたのか、先に霞が言い当てて見せた。
「ＢＥＴＡだけじゃない？……ッ！」
この基地の責任者、香月夕呼は、霞が何を感じ取ったものがなんなのかを、確信した。
（遂にここにも来たのね……噂の『あれ』が）

武が振り向いた時、恐怖すべき敵が、このタイミングで姿を見せた。
（なんで…こいつが今、このときに!?）
兵士級ＢＥＴＡ。ＢＥＴＡの中でもいたって小型だが、人間一人と比べたら遥かに脅威の怪物だ。
武はたとえ小さくとも、このＢＥＴＡについては激しすぎるトラウマを抱いてもいる。できることなら、今すぐにでも殺してやりたいほど憎くもある。こいつらのせいで、以前までの世界で仲間たちが、本当なら自分が生きていた世界と同様幸せな未来をつかめたはずなのに、それを打ち砕かれ散っていった。
特に…武のもう一人の恩師、神宮寺まりも。
彼女の死の要因は、自分の失態とそれによる落ち込みも大きかったが、何より
この小さくもたった一人の人間にとっては十分すぎる脅威であるこの兵士級が原因だった。
周りには、軍も戦術機が通っている気配もない。
（…くそ！とにかく逃げるしかない！）
武は必死に駆けていた。かつて元の平和な世界で生きていた頃、当たり前のように通学路として利用していた道を駆け続けていた。
よくもまあここまで逃げ切れたものだ。これも、２度もこの時間を体感し、戦術機のパイロットとして地球の未来のために戦ってきたおかげかもしれない。

でも、今の自分は戦術機さえも持たない、生身の状態。ＢＥＴＡからすればただの格好のえさでしかない。

「ぐ!!」

もう逃げる体力が尽きようとしていた。

それに伴い、武を狙って兵士級ＢＥＴＡが追いかけてきた。

武と違って体力が有り余っているせいも合ってか、簡単に追いついてしまった。

逃げ道さえ、与えられなかった。武は崖に面したガードレールに背中を預け、ただ目の前の兵士級に慄くことしかできなかった。

ふざけるな…!!

俺をこのときになるまで、共に戦い、共に生き、背中を預けあい、

その果てに、散っていった仲間たちを…

涼宮中尉
速瀬中尉
伊隅大尉
まりもちゃん
柏木
美琴
たま
委員長
彩峰
冥夜
純夏を…

みんなを助けるまで…!!

その上でこの地球をＢＥＴＡから守り抜くまで…

「俺は…俺は!!こんなところで死ねないんだあああああああああああ!!」

――諦めるな

武の耳に、どこからとも無く若い男性の声が届いた。

瞬間、まるで隕石が落下してきたかのごとく、赤い光が武のすぐ傍に落下した。

「うあ!?」

その爆発的な衝撃に煽られ、武は吹っ飛んで路地の上に転がった。

落下の衝撃は確かに痛かったが、それ以上に武の中にその痛みさえか

き消す疑問が浮かぶ。
一体、何が起きた？
今度は何が起きたんだ？
俺は助かったのか？
武は、起き上がって自分を襲ってきたＢＥＴＡの立っていた方を見つめると…。
「!!!?」
これまでにないほどの、衝撃を受けた。
武を食い殺そうとしたＢＥＴＡは、どこからか伸びてきた、銀色の巨大な拳によって押しつぶされて、ただの血だまりとなっていた。
ばちばちと静電気を走らせながら、拳が引っこ抜かれる。武はその腕を伝うように見上げながら、その腕の主の姿を見上げる。
一瞬、戦術機か何かと思ってた。
でも、明らかに違う。
武が見上げた『それ』は、戦術機のように全くもって機械じみたものではなく、ましてやＢＥＴＡのようなおぞましさなど欠片もなかった。
『それ』の、乳白色に光る目と目が合ったが、武は不思議なほどに恐怖を抱かなかった。何の根拠さえなかったはずなのに、寧ろ安心感さえ抱いた。
そこに立っていたのは…神々しく雄雄しい姿を現した…。
『銀色の巨人』だった。

「嘘…でしょ…」
水月はわなわなと振るえながら、手にとって確認した、茜が自分たちに見せてきた写真を見つめていた。遙も同様だった。
茜はその反応を見て、やっぱり…と静かに呟きながら表情を曇らせていた。
実を言うと、写真に映されていたものは、ＢＥＴＡが人類を襲っているとか、人類を絶望させるようなものではなかった。
少なくとも、彼女たちに、ある種の希望を抱かせる姿が、疑惑が、そこに焼き映されていた。
「一応…聞くけど…この写真、いつ撮影した…？」
「…一週間前です」
恐る恐る尋ねる水月に、茜は表情を曇らせながら答えた。
でも…ありえない。絶対にありえないはずだった。
だって、自分たちが軍に仕官する２０日前のあの作戦……
『明星作戦』で彼は、親友と共に散ったはずだ。
いつか必ず、水月か遙を…そのどちらかを選んでもらう。
だからこそ絶対に生きて帰ってきて欲しかったのに、先に逝ってしまったはずの…
愛しい人の姿が、
『一週間前に撮影された写真の中』にいた。
「孝之…？」
「孝之、君…？」

これは、数度目のループを果たしたある若き救世主『白銀武』と、伝説の名を刻んだ、神秘の巨人『ウルトラマン』が遭遇したもしもの、とある次元の物語…。

思いついたマブラヴネクサスの設定

白銀武（ＥＸＴＲＡ）

主人公。ＵＮＬＩＭＩＴＥＤ編から数えて３度目（？）のループにて突如ＢＥＴＡに遭遇してしまったが、孝之の変身したネクサスに救われ一命を取りとめ、香月博士の元に護送された。

やがて元の世界の仲間や、明星作戦で死亡したはずの孝之、彼の次に光を継ぐ正樹と戦友としての絆を育む。

終盤で純夏から光を受け継ぎ、最後のデュナミストとなる。だが光を継いだ直後は、ザギに光を奪われていた影響もあり『ザ・ネクスト』の姿に弱体化していた。

鑑純夏

ヒロイン。この世界の武の犠牲によって一時は生き延びたが、ＢＥＴＡの人体実験にかけられたせいで人間としての肉体を失ってしまう。が、後に００ユニットとして新たな体を手にいれて復活。最初は武を奪ったＢＥＴＡへの復讐心でかつての自我を保っていなかったが、別世界の武や霞たちの手ほどきで次第に心を取り戻し、元来の明るくおせっかい焼きな幼馴染としての彼女に戻っていく。

やがて正樹から光を受け継いだが、自分の幼馴染である方の武がザギに憑依された状態で蘇っていたこと、そして武の今回のループで悲劇の発端でもあったことが判明。ＢＥＴＡに対して抱いていた憎しみが、武の体を弄び悲劇を無尽蔵に生み出そうとするザギに対するものに変わってしまい、それが光を奪われ、ザギの完全復活の原因となった。

鳴海孝之。

「君が望む永遠」の主人公。

優しいが、それゆえに女性関係については知ってのとおりのヘタレな性格。

だが、慎二の勧めもあり二人のうちどちらを選ぶかと、明星作戦の

後ではっきり決めようと考えていた。
遙と水月が仕官する前の明星作戦で、米軍がその威力効果範囲を隠蔽したG弾に巻き込まれ、慎二と共に死亡した…はずだった。
死の直前に『まだ答えを決めていないのに死ねるか！』と叫んでいた。
その叫びが届いたのか、そこでネクサスに遭遇し光を掴んだことで一命を取り留めた。以後、遙や水月たちを守るため、そして共に死んだと思われた慎二がどこかで生きていると信じウルトラマンとして戦う。
だが、その慎二が敵として現れるなど予想もしなかった…。

前島正樹
［君がいた季節］の主人公。
孝之の次のデュナミスト。甲２１号作戦でみちるが死亡した通知が届き、やがて失意のうちに病を患ったことで軍を抜けた。
その後、孝之から分離したネクサスと出会い、次代のウルトラマンとなる。
病によって長時間戦うことができず、やがて死期が近づいていく。
だがそれ以上に、死ぬ前にファウストとなってしまったみちるをなんとしても元の彼女として取り戻したいと強く願い、武たちと共に戦う。

平慎二
孝之、遙、水月の親友。
面倒見のいい性格で、内心では水月に思いを寄せていた。
だが明星作戦でG弾の爆発に巻き込まれて死亡してもおかしくないほどの重症を追ったが、その際にダークメフィストと遭遇、一体化して一命を取り留めたが、明星作戦の真相（G弾発射の際、爆破地点に味方がいることをアメリカ政府が無視していたこと）を知ったことで人格が変貌、自分が守ろうとし、逆に自分たちを裏切った人類に対して絶望と憎しみを抱き、ＢＥＴＡを扇動して人類に牙を向いてしま

う。
少なくともかつての仲間，特に水月にだけは、邪魔をしない限りは手を出さないが…。
武にとって2度目の甲21号作戦にて孝之、武たちヴァルキリーズと決着をつけることになる。

伊隅みちる
武の頼もしい上官でもあった女性。正樹に想いを寄せていた。階級は大尉。
甲21号作戦で死亡したが、ザギによってファウストとしての力を吹き込まれたことで復活。復活後の彼女の人格は非常に絶望感に満ちたもので、BETAによる地球完全侵略こそ人類に残された道にして救済（＝死）だと主張しており、生前の彼女とはまるで別人になっている。
人として死を遂げる直前、基地の桜を見たいと願っていたが、その際は自分の姉妹と正樹を交えての願いだった。

白銀武（ALTANATIVE）／ダークザギ
ラストボスにしてこの世界での武自身。純夏を救うためにBETAに捕食された…はずだった。
しかし、ダークザギに憑依されたことで、奇跡的に生き延びた。
ザギに憑依されたこと、一度死んだことは覚えていなかったが、ザギに憑依されたことで未来予知の能力を得てしまい、別世界の自分が純夏たちと触れあう姿を見て、次第にこの世界での居場所が無くなっていくことに気づき、絶望。
その絶望に漬け込んだザギはオルタ武の精神を完全に乗っ取ってしまった。が、互いの自身への絶望に満ちた精神が混ざっているせいで、乗っ取ったというよりも二人が完全に一体化したような状態である。
ファウストやメフィストを操り、BETAをあえて助け、強化させた後、ウルトラマンネクサスの力を奪い去った果てに葬り去ること

で、唯一無二の最強のウルトラマンとなることを目的とする。

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（1）

外史。それは私たちが生きる正史と異なり、人の思いや願いを具現化した可能性
を現実のものとした世界。
正史と似て非なる文化や世界が広がり、それはまさに物語の世界といっても差し支えない。

その世界は、かつて三つに国が分かれていた。少女たちはそれぞれの国の将として互いに争っていた。
白い服を着た一人の少年が、その外史で生きていた。彼はその世界で、世を正そしようと生きる少女たちと絆を紡ぎ、共に生きてきた。
どちらかが先に滅ぶか、それまで戦乱が続くに違いなかったはずだった。
だが、少年の存在を中心とし、三国は異民族の侵攻をきっかけに一つとなった。
少年は、理想に燃える少女、国のために覇道を進む少女、そして愛する家族と台地を守るために戦う女性が納める三つの国を一つにし、平和をもたらすという偉業を成し遂げたのだ。
こうして平和な世が、国にもたらされた。将たちは一人の女性としての平穏を歩み、少年との思いを紡ぎ、国のために働きながら、平和を謳歌していた。
まるで、永遠にも思えるひと時だった。

だが、それはある者たちの出現で、突然潰えることになる…

少年は、気が付いたら火の海の中にいた。
自分がさっきまで歩いていた街が、建物の全てが燃やし尽くされていた。
人も、たくさん死んでいた。老人から子供まで。
さっきまであんなに笑って楽しそうに過ごしていたのに、誰も生き残っていなかった。

そして、少年の傍らにも…

「あ、ああ…」

ウあああああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!

さっきまで共に、平和な世のために同じ道を進んでいた少女たちの、
変わり果てた姿が横たわっていた。

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～

それは、とある外史のことだった。
その世界は、今から１８００年ほど前の中国、正史における『三国志』の時代を色濃く映し出していた世界だった。
この時代の中国は漢王朝の腐敗に伴い、辺境の地から貧しくなっていき、それに伴って賊が多発、国が乱れ始めていた。
そんな世を、一人の長く美しい黒髪をなびかせた少女が武装した服装の上に、身を隠すほどのボロボロの外套を羽織って旅をしていた。
彼女の手には、竜をあしらった長刀が担がれている。素人から見ても、かなりの業物に見て取れる。
今、少女はある村を訪れていた。
村の道を歩くと、道の傍に生えている木が目に留まった。桃の花が咲いていて、花びらが空に舞っていく。
「桃か…ん？」
少女は木の根元に、小さな石がおいてあるのが見えた。
「これは…？」

花も添えてある。もしや、墓だろうか？
すると、それを通りがかった老婆が、重たそうな籠を背負ってやってきた。
「最近このあたりにも賊が出るようになったのじゃ。身包みをはがされて殺されたのもおってな。その花はせめてもの手向けなのじゃよ」
「そうなのですか…」
少女はそれを聞いて、胸を痛めた。何の罪もないのに殺されてしまう。そんな勝手があっていいのだろうか。いや…許せるはずもない。もしこの墓の人たちが襲われたときにこの村に自分がいたら、その賊共に天誅を下すことができたものを。
「お役人様がしっかりしとったらこんなことにもならなかっただろうに…」
ならば自分もせめてと、少女は墓の前で手を合わせた。せめて安らかに眠り、来世では平和な世で幸せに暮らすことを願う…

♪～♪♪～♪～♪～

ふと、少女の耳に何かの音色が聞こえてきた。
（なんだこの音色は…？笛？）
いや、笛の音色にしてはずいぶん変わった音色だ。どこか物悲しく、そして美しい音色だった。
だが、少女はその音色を始めて聞くはずなのに…
（この笛の音…どこかで聞いたことがある）
懐かしい気持ちを抱かされた。
笛を吹いていたのは、少女と同じか1つ上の年齢に見える少年だった。
光っているようにも見える白い服を羽織り、なかなか端正な顔立ちをしている。
笛を吹き終わると、少年は目を開けて笛を服のポケットにしまった。
「まぁまぁ…なんて綺麗な音かしら。あなた、笛吹きなのかしら？」

老婆も少年の笛の音色に惹かれたらしく、感動の言葉を口にした。
「いや、俺は通りがかりの風来坊ですよ。お話は俺もちょうど聞いてましたから、せめてと思って…」
少女と老婆の話を聞いていたらしい。結果的に二人の話を盗み聞きしてしまったことを詫びるが、老婆は首を横に振ってそんなことはないと言った。
「あなたの笛を聞いて、ここで眠っている人たちも安心して眠っていられるわ。ありがとうね…」
「そう言っていただけて嬉しいです。
じゃあ、俺はそろそろ行きます。村は、この先ですか?」
「ええ。旅先、お気をつけてね」
「おばあさんも」
少年は少女と老婆に頭を下げて歩き去っていった。去っていく少年の後姿を、少女は静かに眺めていた。
が、すぐに首を横に振る。旗から見たらまるで彼に見とれてしまったようではないか!と自分に喝を入れた。
そういえば、村はこの先だと言っていたな。
少女も村を訪れようと先へ進み始めたときだった。
「おらおらあああ!!金目のものを置いていきがやれ!!」
旅先で何度も聞いた声だ。ここにも賊の手が入り込んだということだろう。
「世も末だな…」
ため息を漏らしながら、少女は羽織っていた外套を脱ぎ捨てて駆け出した。
駆け出した先では、先ほどの少年が三人の賊に絡まれていた。
脂肪の塊のような巨漢、ちびの男、そして中央にはひげの生えた中年男だ。三人とも黄色の巾をバンダナのように頭に巻いている。
「待たれよ!その方に手を出すことはまかりならん!」
少女は長刀…『青龍偃月刀』を構え、賊と少年の間に立ちふさがった。
「なんだ姉ちゃん?この餓鬼の女か?餓鬼の癖にずいぶん色気づいて

るじゃねえか」
　中央の中年男がいきなり現れた少女に目を細め、少年に口汚く茶化してきた。
「い、いきなり何を言い出すのだ！この無礼者！」
　根も葉もないことを言われ、少女は顔を赤らめた。堅苦しい口調と、女の子が持つとは思えない長刀を持っていることから、恋色沙汰には慣れていないようだ。
「…ん？アニキ、こいつもしかして、噂の『黒髪の山賊狩り』じゃないっすか？」
　するとチビが少女を見て、アニキと呼んだ男に言う。
「あぁ？なんだそりゃ？」
「知らないんですかい？あちこちの山で襲い掛かった山賊を返り討ちにしてきた女武芸者がいるって。巷じゃ話題になってるっすよ」
「知ったことじゃねぇ。だったらこの女に俺たちの恐ろしさを思い知らせてやりゃいいのさ！」
「やれやれ…」
　いきなり見ず知らずの少年の女として扱われるわ…ため息を漏らしながらも、少女は偃月刀を構えなおし、高らかに名乗った。
「我が名は関羽！乱世に乗じて民草を苦しめる悪党共め！これまでの悪行を地獄で詫びたくば、かかってくるがいい!!」
　勇ましくほえながら、偃月刀を振り回して少女は三人の賊に立ち向かっていった。
　その一撃目が、デブの大男に向かってくる。
「お、おでにかてるとおもうなど～…」
　デブは少女が自分に向かって来ると同時に剣を構える。自分の腕っ節には自信があった。脂肪だらけがだが、両腕の筋肉だけはがっちりしており、まして女に遅れを取るほどやわではない…
　…と思っていたのだが。
「せえええいい!!」
　バキィ!!
「ぐへぇ…」

偃月刀の一振りにて、持っていた剣がたたき折られてしまい、そして偃月刀の刃の峰で脳天をぶっ叩いた。その一撃でデブは一撃でノックアウトしてしまう。
「で、デブ!?」
「くそ、この怪力女め!!」
動揺するアニキとチビ。しかし、チビの言った一言が…更なる悲劇を彼らにもたらす。
「…怪力女?」
「あちゃ…」
こいつら死んだな、と少年は思った。
少女のこめかみの血管がピクピクしている。明らかにキレてしまっている。武芸に励んでいるとはいえ、彼女もまた女の子なのだ。不愉快じゃないわけがない。
その怒りの一撃が、今度は彼女を怪力女呼ばわりしたチビに入る。わき腹に偃月刀のみねが、目にも留まらぬ速さで食い込んだ。
メキョ!!
まるで骨が砕けたような音だった。血反吐もセットで吐いてしまい、チビは気絶した。
「さて、残るは…」
「お、おい女!こっちを見ろ!」
ちょうど少女がアニキの方へ振り返ろうとしたときだった。アニキが少女に向かってわめきだした。
「俺に近づくな!この餓鬼がどうなってもいいのか!」
アニキは、少年の首下に短刀を突きつけていた。
「ぬ…!人質とは卑怯な…」
これでは、さっきの二人をあっさりのしたほどの少女でも迂闊に手を出し切れない。
「卑怯?馬鹿が、最後に勝てばいいんだよ!だから俺たちは今まで生き残ってこれた!さあ、こいつの体に傷を入れられたくなかったら、その得物を捨てろ」
「く……」

少女はやむを得ず、偃月刀をその場に捨てた。
「へへへ…いい子だ。じゃあ次は、そのまま服を脱ぎ捨ててもらおうか」
「な…!!」
いきなり服を脱げといわれ、少女が絶句する。
「あんたも結構いい体してるみたいじゃねぇか。ほらどうした？早くんがねぇとこいつの首から血しぶきが飛ぶぜ？」
「下衆が…!!」
非常に屈辱を覚えアニキと呼ばれた男を睨みつけるも、手を出せない少女は、偃月刀を捨ててしまう。アニキへの怒りと自分の肢体が露にされる恐怖で震える手で、自分の服の留め金を外そうとする。
「そうそう、そうやって…がふぁ!?」
しかし、その直後だった。
「え…？」
少女が服の留め金を外し掛けたところで、アニキは急に腹を押さえて悶絶する。
「…ったく、隙だらけだぞおっさん。人質が歯向かわないと思ってたのかよ」
そう言い放ったのは、人質にされていたはずの少年だった。肘打ちでアニキの腹を殴りつけ、続けて手刀を首筋裏に叩き込み、アニキを気絶させた。
「ふぅ…大丈夫か？」
「あ、はい…」
少年の身を案じる言葉に、少女は外しかけた服の留め金をつけなおし、偃月刀を拾い上げる。
「申し訳ない。助けるつもりが逆に助けられてしまうとは。私もまだ未熟だ…」
「いや、二人とも無事だったし、構わないよ」
少年は屈託ない笑みを返してくる。さっきは命の危険にさらされていたというのに、そのことをまったく恨んでいるように見えなかった。

「それより、君こそ大丈夫か？さっき…その…」
「え…あ、ええ!!大丈夫です！怪我もないですし、あなたがあの男をのしてくれましたので」
「そっか…よかった」
少女がなんともなかったのを確認し、少年はほっと安心した。
「本当に良かったよ…○○」
「？今、何かおっしゃいましたか？」
「え、あ…！いや、なんでもないさ!!」
少年は聞かれたらまずかったのか、少女に尋ねられてやたら慌てた様子を露にする。
「じゃあ、俺はこれからこの先の村に行くから」
まるで何かを誤魔化すつもりのように、少年は村の方角へ足を運ぼうとするが、少女が「待ってください！」と少年を引き止めた。
「先ほどは不覚を取られましたが、この『関羽』…二度も遅れは取りませぬ。この先ももしかしたら先ほどのような賊が現れるかもしれません。
よければ私が村まで護衛をいたしましょう」
「護衛なんていいさ。一応、それなりに俺も修羅場を…」
少年は護衛を断ろうとしたが、少女は食い下がろうとしなかった。
「いえ！一度の失敗を次の成功で注ぐのが武人というものです！それとも…やはり、私のような賊に不覚を取るような者では信用なりませんか？」
食い下がりはしないものの、最後の最後でさっきのことを引きずっていたのか、少し落ち込み気味になってしまった。
泣きそうにも見えるその憂い顔を見て、少年は罪悪感を覚える。
「わ、わかった！わかったから！護衛やってくれるんだね？
そうだな…一人より二人の方が、油断さえしなければ安心だし、頼もうかな？」
「ありがとうございます！」
さっきの汚名をそそぐ機会を得ることができて、少女は落ち込んだ状態から立ち直った。

「そういえば、まだ自己紹介をしてませんでしたね？
我が名は『関羽』、字を『雲長』と申します。あなたの名前は？」
「俺？俺は…」
「『北郷一刀』、よろしく」
こうして、ほぼ押しかけ気味に一人の護衛『関羽』を得た少年、『北郷一刀』は村へ向かうことになった。

三国志を知る人なら、一つ疑問に思った人もいるかもしれない。
なぜ関羽が女の子なのか？と。
それもそもはず。これも外史の可能性。
本来なら美しく長いひげを持つ大男…それでいて三国時代における有名な武人であったはずの関羽が、長い黒髪の美少女として存在している世界なのだ。

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（2）

二人はしばらくの時間を置いて村に到着した。
さっきの奴らのような賊の被害はないらしく、まだこの街はある程度にぎわっていた。
「しかし、変わった名前ですね。『北郷』が苗字で、『一刀』が名前。そして字がないとは」
その道中、関羽は一刀の変わった身なりを見て、色々なことを尋ねてきた。
「元々この国の人間じゃないからね。変わった名前に聞こえるのは当然だよ」
「なるほど、その光っているような白い服も、あなたの祖国のものということですか」
「まぁね。といっても、この服は俺の地元じゃそんなに珍しいものじゃないんだ。学校の制服だし」
「がっこう…？」
「あ～、そっか…こっちじゃ私塾って言った方がいいのかな。学び舎のことだよ」
「学び舎、ですか。北郷殿は教養を得ておいでなのですね。立派なことです。今の世では、なかなか徹底された教育を受けることが難しいですから」
「そんなたいそうなことじゃないよ。俺なんてまだまだ…」
と二人が談笑しあいながら村を歩いていたときだった。

どどどどどど……

「ん？なんだ…？」
馬の足音だろうか？妙に勢いのある足音がいくつも聞こえるが。
「で、でたあああ!!」
さらに悲鳴も聞こえてくる。そして砂煙が向こう側から立ち込め始めている。

「なんだ!?賊がもしや…!」
警戒した関羽が偃月刀に力を入れるが、一刀はそっと手を突き出して関羽を阻んだ。
「待ってくれ。あれは……」
目を凝らしながら良く見る一刀。それにならって愛紗もまた、一刀の視線の先に目を向ける。
よく見ると…前から向かってきたのは子供の集団だった。
「どけどけぇ!!『鈴々山賊団』のお通りなのだ!!」
大きな豚にまたがる小さな少女が子分の押さない少年少女たちを引き連れていた。短い赤毛には虎の髪飾りをつけていて、元気にあふれている。
「うりゃりゃりゃーー!!!」
「きゃ!!」
「うおお!」
怒涛の行進に、関羽は『鈴々山賊団』と名乗る子供たちとのすれ違いざまに思わず尻餅をついてしまう。一刀も思わずその拍子に足元がふらついてバランスを崩してしまった。
それには目もくれず、鈴々山賊団は勢いを殺さないまま走り去ってしまった。
「っっっ…ったく、相変わらずだな…と、大丈夫か関…羽…」
子供たちが走り去ったのを確認し、体を起こした一刀だが、そのとき…手に違和感を覚えた。
(なんだろう…やわらかくて暖かくてどこか懐かしいような…)
「…北郷殿?」
「え?」
関羽の顔を見る一刀。彼女の顔が赤く、そしていかにも…今にも切りかかってきそうなさっきをほとばしらせていた。
なぜこんな顔を?その疑問はすぐに解決した。
転んだ拍子に、関羽の豊満な胸を鷲掴みにしていたのだ。
それに気づいた一刀はすぐさま立ち上がって関羽の上から退いた。
「うわわわ!!ち、違うんだ!!これは事故!アクシデント!!わざとじゃ

ないんだ！本当です！信じてください！」
　慌てて許しを懇願する一刀。このままだと殺されてしまうと思っているかのような慌てようだった。
「むぅ…そ、そこまで驚かれるとかえって私が悪者のようではないですか。わかってます。さっきの子供たちが突進してきた拍子に転んで…ですよね」
　まだ若干顔を赤くしていたが、関羽も服に付いた砂を払い落としながら、偃月刀を拾い上げる。どうやらわざとじゃないことが伝わったようだ。ほっとする一刀だが…。
「…どさくさにまぎれてだったら斬りおとしてました」
　…絶対零度の視線に一刀は縮こまった。
　…言わなくて良かった。実は関羽の真っ白で綺麗なパンツまで見えてていたなんて。

「いやぁ、あんたらも災難だったね。そっちのお兄さんはちょこっといい思いをしたみたいだけど」
　その後、二人は近くの店で食事を取ると、外での様子を見ていたのか、店の女将が二人に話しかけてきた。どうも鈴々山賊団に突き飛ばされてから、関羽の胸が偶然にも一刀の手に鷲掴みにされたところまでの一部始終を目撃していたらしい。
　見られていたことに、関羽はさっきのことを思い出して顔を赤らめ、一刀は気まずそうに頬をぽりぽり指先で掻いていた。。
「そ…それにしても、あの鈴々山賊団とはなんなのだ」
　話をそらす意図も合って、関羽はさっきの子供たちのことを話題に持ち上げた。
「名前の通り、あの鈴々って子が大将の悪餓鬼集団さ。
　やってることは畑荒らしとか牛にいたずらする程度だけど、この前なんて庄屋様の家の塀に馬鹿でかい庄屋様の似顔絵なんて書いたのさ」
　ありゃ傑作だったわ、と女将は笑った。
「でも、あの子には親はいないんですか？」

ふと、一刀が鈴々の親のことについて尋ねる。
「そうだ、なぜ子供のいたずらを放置しているのだ。親はいったい何をしている！」
けしからん、とばかりに関羽も不満を口にする。
見るからにあの子はまだ、親のすねをかじらないといけない年頃の女の子のはずだ。それが子供たちと徒党を組んでいたずら三昧とは。
すると、おかみは哀しげに二人に、鈴々という少女のいたずらが放置されている理由を話した。
「親は、いないんだよ。あの子には」
「え？」
驚く関羽に、女将は事情を説明した。
鈴々には確かに親はいたが、それは今よりもずっと幼い頃のことだ。突然自分の家に押し入ってきた賊に両親を殺されてしまい、その後はこの村の近くの山小屋で暮らしていた母方の祖父に引き取られていた。
「根はいい子なんだけどね。今はちょっとは目を外しているだけ。手下のこの親たちも大目に見てやってるのよ」
「でも、だとしてもその祖父殿から何か一言いわせるべきではないのか？」
関羽が最もなことを言うが、女将の表情は晴れない。
「それができたら…だけどねぇ」
「…もしや、そのおじいさんも？」
一刀からの問いに女将は頷いた。
「もう5年近くは経つわね。この村に、この世のものとは思えない恐ろしいことが起きたんだよ」
「え…？」
女将の表情にさらに影が指してきた。
「実はこの村、5年前に一度滅びかけたんだ」
「!?」
女将の口から、今こうしてにぎわっている村が、一度滅びかけたと聞いた一刀と関羽は驚いた。

「かつて、この村には巨大な恐ろしい鳥が現れてね、人間を見つけたら、建物なんてあっという間に吹き飛ばしてしまう大竜巻を起こして、その風で舞い上げられた人を食らっていたそうだよ」
「そんなこと、本当にあったのですか…」
　にわかには信じられない、関羽はそう思った。噂で山奥や水の底には竜が住みついており、ひとたび雷雨が起こると天へと昇る…なんて話を時折耳にしたことがあるが、そんなのは天災を恐れる人々の空想だ。だが女将は嘘を言っているようにも見えない。
「けど、そんな時…」
「そんな時？」
「鈴々の祖父が現れてね。竜巻に巻き込まれた人たちを助けに、自分から竜巻の中に飛び込んで行ったそうだよ」
「そ、そんなの危険ではないですか！」
　勇敢を通り越して無謀だ。関羽が声を上げる。
「ああ、誰もがそう思ったさ。けど鈴々のおじいさんはそれも構わず竜巻の中に飛び込んで行ってね。…けど、不思議なことに竜巻に巻き込まれた人たちは全員助かったんだ。あの子の祖父を除いてね…
　それ以来、不思議なことにあの恐ろしい鳥も現れなくなったんだ」
「……」
　謎の恐ろしい鳥から村の人たちの窮地を救った、まさに英雄だったのだ。一体鈴々の祖父とは何者だったのだろう。
　だが、例え何者であろうと、鈴々にとっては唯一遺された家族だった。それさえも失って天涯孤独となった鈴々。その寂しさは、あの年の子供には苦痛に違いない。
（…竜巻を起こす鳥…）
　一方で、一刀はあることについて気がかりでもあった。
（悪魔の風が吹くかもな…）

　その日の夕刻、鈴々はかつて祖父と共に暮らしていた山小屋にいた。その小屋は鈴々山賊団のアジトである。
　昼間は、この前庄屋の屋敷の壁に描いた落書きの話で盛り上がった

り、適当にとってきた卵をみんなで分け合って食べていたりと、楽しい時間を過ごした。。
　しかし夕方になると、さっきまでここにいた子分たちはもう家に帰ってしまう。さっきまでみんなであんなに楽しそうに馬鹿騒ぎとしていたのに、鈴々一人だけになると、普段は明るく振舞っている鈴々がいてもすっかり静けさに満ちる。
「明日になれば…またみんなに会えるのだ」
　平気そうにしようとしているが、それでも寂しさが消えない鈴々。部屋の中にある『鈴』の旗と、部屋の奥にある台の上に置かれた小さな木箱を見つめながら、鈴々はつぶやいた。
「そうだよね…おじいちゃん?」
　その箱に小さな札が張られており、『封』の一文字のみが刻まれていた。
「ほぅ…ここか。『封印の地』の一つは」
「ッ!!」
　鈴々は聞き覚えのない声を聴いて咄嗟に振り替える。
　振り返ると、そこには白い服を着た若い男が立っていた。年齢は鈴々よりも上、一刀や関羽に近いものに見える。
「だ、誰なのだ!?ここは鈴々が認めた奴以外の立ち入りは禁止なのだ!」
　鈴々が彼の立ち入りを拒否するが、青年は全く聞く耳持たずの様子だ。彼女の存在をまるで路上に転がる石ころ程度の興味しか抱いていないかのように淡々としている。
「…やはり二重封印。元々施された封印が弱まったところで、別の奴が封印を施して強化していたようだな。余計なことをしてくれる…」
　彼は鈴々の家の小屋の奥に置かれている『封』の箱の目をやり、そちらの方へ歩き出す。
「止まるのだ!!」
　得物である蛇矛を持って、青年の前に立ちふさがる。すると、青年は「ちっ」と鈴々を見て露骨に舌打ちする。
「目障りだ、消えろ」

それは一瞬だった。
青年の足から、目にもとまらぬ速さで蹴りが飛んできた。

その夜…。
月の光も差し込んでおらず雲がかかっており、夜風が妙に強めに吹いてきている。
この村には宿がなく、関羽と一刀の二人は女将に頼んで、条件付きで泊まっていたのだ。この日、女将の頼みで食材の切り分け、巻き割り、店の掃除、納屋の片づけなど、色々とお使いをやることになっていた。
しかし慣れない料理には苦戦を強いたものだ。食材を切ること自体はできるが、関羽のとる方法は普通ではない。まな板の上に乗せず、宙へ放り投げたところで切り捨てるというものだ。女将も一刀もその捌き方には驚きと感心を寄せたものだが、その一方で一刀はかなり手馴れている様子で料理を作り上げていた。…武人として生きてきた関羽だが、女としてどこか、ほんのちょっとだが悔しさを覚えてしまったくらいだ。
それはともあれ、もう寝る時間になったところで、関羽は女将から与えられた部屋に向かう。
ふと、その途中で彼女は店の中で一刀を見かけた。
まだ起きていたのだろうか。
そういえば、護衛の期限は特に決めていなかったのを思い出す。もしや、この夜中に外出か？いや、こんな夜中にひとりで歩くなど危険だ。それは彼だってわからないわけじゃないはずだ。遠く離れている、ということはないだろう。自分と同じように夜中にたまたま起きてしまった、と考えるべきだ。
関羽は一刀を探しに、とりあえず水を飲むついでに厨房へ足を運んでみる。
一刀はそこにいた。店の入口にちょうど差し掛かったところに彼はいた。
「北郷殿、こんな夜更けに外出するおつもりですか？」

怪訝に思ってそのように言った関羽に、一刀は振り返る。
「あ･ｉ…関羽か。まだ起きてたのか」
「私のことはいいんです。それよりも、部屋に戻られてください。こんな夜更けに外に出られるのは危険です」
「……」
しかし、一刀は戻ろうとしなかった。神妙な顔つきで、彼は関羽に言った。
「…関羽、すぐに戻って。店の物品をしまう地下倉庫がこの店にあるはずだ。そこへ女将を連れて隠れてくれ」
「え？」
「もうすぐ、悪魔の風が来る」
聞いて、関羽は「はぁ？」と声を漏らす。急に何を言っているんだ、この男は。確かに元から変だとは思っていたが、今度のは頭でも打ったのかとしか思えないような一言だった。
しかし、その直後に…関羽は一刀の言った言葉の意味を知ることになる。
その時だった。
ＵＯＯｏｏｏｏｏｏｏｏｎ……
奇妙な音らしきものが、二人の耳に入る。
「今のは…」
異変を感じたのか、一刀は外に出て夜空を見上げる。月の光が差し込まないほど雲が濃くなっていた。…ただそれだけならなんとも思わなかっただろう。だが二人は目にした現象に対して異常と捉えざるを得なかった。
空を覆う雲の一部が墨汁のように真っ黒に染まり、輪となる。しかも輪の形となった黒雲から、紫色の雷が発生し始める。
やがて雷が強くなるうちに雲はいくつもの竜巻をも発生させ、
一瞬のうちに発生地点から遠く離れた一刀たちの居場所にも、驚くほどの突風を巻き起こした。
「ひゃああ!?!」
突然の大嵐に驚く関羽。当然驚いたのは彼女だけじゃない。真夜

中に突然の大嵐が来たのだ。近くの住民たちもまどろみから目をさまし、各地でパニックを起こしていた。
「ぎゃあああ!!」
「な、なんだこのかぜ…うわあああ!!」
「おとうちゃあああん!!」
「だ、誰か…!!」
街の建物の屋根ははがされて宙を舞い、やがて建物そのものを砕いてバラバラの破片に変えて舞い上げていく。頑丈に作られたはずの庄屋の屋敷もまた同じだった。かつて鈴々たちが落書きをしていた石造りの塀も脆く崩れ落ちていく。しかも吹き飛ばされた瓦礫の一部が、風の浮力を失って落下してくる危険もあった。今も二人の周りに、次々と村の建物から作られた瓦礫が雨のように落ちてきていた。
「あんたら大丈…ひゃあ!!」
「女将!」
女将もこの非常事態に眠ったままではいられなかった。泊めていた二人の身を案じて彼らのもとに来るが、彼女もまた突風にあおられ、店の窓の下の壁に張り付く。風を一向に浴びることになるが、壁がストッパーとなってくれたおかげでやり過ごすことができた。
だが、関羽は店のすぐ近くに発生した竜巻によって、店の外にあっという間に飛ばされてしまう。
「きゃあああああああ!!」
「お嬢ちゃん!」
普段の自分なら、あまりにも情けないと断じてしまいそうなくらいの甲高い悲鳴を上げ、関羽はそのまま遥か上空へと吹き飛ばされてしまった。
それを見て、一刀の目が見開かれる。関羽が風に
「させるかぁあああ!!」
次の瞬間、彼は信じがたい行動に出た。
自ら、関羽をさらった風に乗り出したのだ。
「ちょ、あんた…うあああ!!」
女将が手を伸ばそうとしたが、もう風の勢いが強すぎて、そこにし

がみつくのがやっとだった。
そしてただ、関羽と一刀が風に飛ばされているのを見ている事しかできなかった。

すでに二人の姿が豆粒よりも、蟻よりも小さく見えるほどの高さに飛ばされていた。空中ではどんなに訓練を積んだ武人であろうとまともに動けず無力だ。地上へ自然と手が伸びてしまうが、当然届くはずもなく意味もなかった。

ぐんぐんと、ロケットのように舞い上げられていく関羽。もはや自らの悲鳴さえも聞こえなくなるほどの暴風の中にいた。

そして彼女は、目にした。

「…ッ!!!」

見たこともない、おぞましい姿をした青い怪鳥の姿を。

まるで宙に舞い上がってきた自分を獲物と見たのか、その鋭いくちばしを開いてきた。

関羽は、自らに迫りつつある『死』を感じ、恐怖した。

恐怖など、未熟で弱い人間が抱くもの。武人として強くなるためには恐れる心を捨てるべき。そう考えて自らを律しつつ武人として磨き続けてきた彼女だが、迫りくる死に死への恐怖を抱かずにいられなかった。

そして結局自分は、何もなせなかったことへの無念。偃月刀を握った理由、それは腐敗し乱れた世から弱い者を守るため。

だが、自分はこうして自分よりもはるかに強大な存在に食われるという、武人としてはあまりにも無念さばかりが残る最期を迎えるとは…。

嫌だ…死にたくない…!

関羽はあと少しで、怪鳥のくちばしの中に飲み込まれるところで目を閉じた。

助けて…『兄者』……

助けて、●●●様…!!

その時だった。

――――――愛紗あああああ!!!

自分の『真名』を呼ぶ声が、関羽の耳に轟いた。
それと同時に、一瞬の速さで怪鳥が、下から飛び出してきた光によって突き飛ばされてしまう。
怪鳥からの捕食を免れ、落下していくなか、関羽の意識が薄れていく。
最後に彼女が見たのは、

光に包まれた巨人だった。

意識がすでに朦朧として、恐怖さえも沸かない。だが、関羽から恐怖が消えたのはそれだけじゃなかった。
あの巨人を見て、なぜか強く感じた。
肉親に抱きしめられた時のような暖かな温もりと、

強い懐かしさ、そして『想い』を。

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（3）

「『愛紗』！起きろ！」
青年の呼びかけに、小さな黒髪の少女が目を覚ます。
「…兄者？どうしたのですか？」
眠たそうな目をこすりながら、少女は兄と呼んだ男に尋ねる。
「村が襲われている！」
「ええ!?」
「今すぐ寝台の下に隠れろ！」
兄に言われたとおり、彼女は寝台の下に隠れる。
絶対に声を出すな。そう言い残して兄は外へ飛び出していく。
外からは、何かの声が聞こえる。
賊の声だろうか？その割には、…どこか獣じみている。グルアアアア!!とほえる声が聞こえていた。
兄の無事を必死に祈る少女。だが……
「ぐはあ!!」
兄の悲鳴が聞こえた。さっきまで兄の無事を祈り目を閉じていた少女だが、少女の身を隠していた寝台が、突然大きく吹き飛んだ。
「きゃ…！」
突然のことに開けかけた目を再び閉ざした少女。そして恐る恐る目を開ける。
自分の家が、まるで嵐に見舞われたかのように粉々に、…上部を中心に吹き飛ばされていた。
だが、それ以上に少女にとって恐ろしい現実がすぐ近くにあった。
絶対に見たくなかったおぞましいものだった。
少女が見たそれの正体は…
顔を不気味に発行させている黒い怪物と…
全身をズタズタにされ血達磨となった、兄の変わり果てた姿だった。

――――兄者あああああああああああああああ!!!!

少女の叫びが轟いた。

「はあ!!」

関羽はガバッと体を起こすと同時に目を覚ました。

「おぉ、お嬢ちゃん!目が覚めたのかい!」

傍には、いつの間にか昨日世話になった店の女将がいた。

「いやぁ～、お嬢ちゃん本当に運がいいもんだね。村がこんな有様なのに、あんたはあの高さまで吹っ飛ばされたのに傷一つないなんて」

「え…?」

関羽は女将の口からそれを聞いてキョトンとするが、周囲を見渡してその意味を理解した。

村は、酷い状態になっていた。

建物はいずれも崩れ落ち、昨日まで村として機能していたとは思えないほどボロボロだった。何より、村人たちの顔に不安と絶望が漂っている。親しい人たちや愛する人たちを蹂躙され、奪われた人たちの強い悲しみが漂っていた。

「一体何があ……ッ!」

そこまでいいかけたところで彼女はこの時思い出した。昨日の夜、突然巻き起こった竜巻によって村が…。そうだ、自分もあの時、竜巻に飲み込まれ、あの化け物に…!

「女将、あの化け物は!?」

関羽は血相を変えて女将に詰め寄る。

「お、お嬢ちゃん落ち着いとくれ!」

女将に対して礼儀を忘れ詰め寄ってしまった事に気づき、我に返った関羽ははっとなって落ち着きを取り戻した。

「…申し訳ない。取り乱してしまった」

「いや、いいさ。普通あんなことがあって冷静でいられるわけがない

からね」
　女将は落胆していた。自分の店ももはや見る影もなく、外観は屋根が完全に吹き飛び、壁もひび割れた個所が多くていつ崩れ落ちるかわかったものじゃないほどだった。
「……あの、結局あの化け物は？」
「山の方に姿を消したよ。なんではかよくわからないけどね」
　村の近くの裏山を見上げてながら女将は言った。
「もう、この村は終わりかもしれないね…あの時の化け物がまた現れたってことは…」
　大事なものを壊された、奪われたという点ではこの女将もまた同じようなものだ。幼い頃、故郷を賊によって滅ぼされた関羽にはその気持ちが痛いほどわかる。
　が、下手に声をかけても相手を慰められるとは限らない。これまで旅を続けてきて、何度も経験してきたことだ。自分があと少しで助けられず、賊に大切な人を殺されてしまった人から罵声を浴びせられたこともあった。関羽は、今の女将に何と声をかけるべきか迷った。
　こんなとき、一刀なら何か言えたのでは…などと憶測を浮かべたところで、ようやく彼女はあることを思い出す。
「女将、北郷殿はおられないのですか？」
「ほんごう？あぁ、あんたと一緒にいたあの男の子かい？」
「はい、そうです」
「あの子なら、『関羽のために薬になりそうな薬草探してくる』とか言って裏山の方に行っちまったよ」
「薬草を、ですか？」
　姿が見えないと思ったら、自分のために薬を…度々自分が彼に対して借りを作っている事態に、関羽は一刀への申し訳なさを募らせる。
「はは、羨ましいもんだねぇ。あんな嫁思いの素敵な旦那様と出会えて」
「なぁ？!!」
　恋色沙汰とかそんな話に耐性がない関羽は、一刀と夫婦扱いされて顔を真っ赤にして全否定した。

「ち、ちち違います！私と北郷殿はそんな関係じゃありません!!」
「そうだったのかい。いい男と女二人組だったからてっきり…」
タチが悪いものだ。彼とあったのはつい昨日のことだ。そんなことになったら兄に「気が早すぎる！」と怒鳴られたと思うし、
自分でも恋色沙汰に現を抜かすなど軟弱だと思っている。
…まぁ、あの人がそこらへんの男性よりどこか悪い気はしない、とだけは思う。一刀と出会って間もないがそれだけはなんとなくわかる気がした。
って、何を考えているのだ私は!!
「もうしわけない女将、ちょっと彼を探しに…」
まるで今の話から逃げるかのように、関羽は一刀を探しに向かおうとしたが、そんなとき、妙な騒ぎ声が関羽たちの耳に聞こえてきた。
「鈴々のせいだ！あいつがきっとあの化け物をこの村に呼び寄せたんだ！いいか貴様ら、鈴々を見つけ、即刻殺せ!!」
「庄屋様、落ち着いてください！鈴々があの化け物を手引きしたなど、いったいどんな根拠があって…!!」
庄屋が、半壊している自分の屋敷の門の前で自分の雇っていた部下たちによって暴走気味に喚き散らしていた。庄屋たちも、あの怪鳥が数年前と同様に、昨日の暴風の元凶であることに気付いているようだ。
「あの庄屋、まだ生きてたのかい。全く、ああいうのに限ってどうしてしぶといのやら…」
女将が庄屋に対して呆れるばかりに思った。やはり庄屋という、一般の村人よりも破格の待遇と安全対策をさせてもらっているのだ。もしかしたら5年前にも村を襲ったという災害の再発を考え、地下避難場所の設計などの対策を講じていたのかもしれない。だから彼や彼の護衛兵たちが無事だったのだろう。
「あの小娘の祖父とやらがあの化け物を追い返したそうではないか！ならあの鈴々が関係しているに違いない！」
「そんな、相手はたかが子供…！」
「ええい黙れ黙れ！私は漢の臣下なのだぞ！私の名を使えばこの村に

止めを刺すなど容易いのだぞ！」
「あの男…！」
　鈴々がいたずら好きなのは昨日のことでもすでに知っているが、それを強引に村を破壊した怪鳥と結び付け悪人に仕立て上げようとする庄屋。関羽は、権力を利用して脅してきた庄屋の何とも身勝手な言いぐさに怒りを覚えた。それに身を任せて、一歩踏み出して一発痛い目を見せてやろうかと一歩踏み出したところで、女将が後ろから関羽の肩を掴んだ。
「おやめ！あの男は漢から派遣されたれっきとした臣下なんだよ。少しでも手を上げたら、それだけで重罪扱いなんだ」
「……ぐ」
　女将から差し止められ、彼女は今すぐに爆発させたい怒りを抑え込んだ。
　しかし、庄屋の命令で何人もの兵士たちが派遣されていく。逆らえないことをいいことに、庄屋は鈴々の抹殺命令を下したのだ。
　こんなことよりも、昨日の竜巻の被害状況の確認と、傷ついた村人たちへの手当てを優先すべきだというのに。これもこの国…『漢』が腐敗し始めた証拠ということか。
「あ～ったく、どうしようもない男さね。子供相手に権力乱用して…そんなに鈴々に落書きされたのが気に食わないのかい」
　女将もさっきは庄屋に殴りかかりそうな勢いの関羽を差し止めようとしたとはいえ、自分もさすがに庄屋にアツアツのお湯でもかぶらせてやりたい気分になった。しかし、ここで庄屋に手を出したらかえって後で厄介なことになる。かといってここでじっとしていたら、鈴々が庄屋にあらぬ濡れ衣を着せられて殺されてしまう。
　一度天涯孤独となった身。鈴々も、あの時の自分と同じ傷を負ったはずだ。
　関羽には唯一の肉親だった兄がいた。だが、夢で見た通り自分が幼い頃に…。彼女は兄を失ってから、当時親しかった村の人たちの援助を得ながら武芸の心得を培い、こうして独り立ちするまでに成長できた。だから家族がいない鈴々に対して、どこか放っておけない気持ち

が沸き起こっていた。
なんとかしてあげたい。そんな気持ちが起こる。
だが、関羽にはもう一つやることがあった。一刀の護衛である。まだこれといって護衛らしいこともできていない。
ならばせめて…伝言だけ残そうと思って女将の方に向きなおる。
「女将、すまないが…一刀殿がここに戻られたら伝えておいてくれないか？『関羽は鈴々を探しに行った』と」

その一刀はというと…。
「へっくし!!」
関羽と女将が話している時と同じタイミング、森の中でくしゃみをしていた。
「…うぅ、誰か俺の噂でもしてんのか？」
鼻をさすりながら、彼は森の奥へと足を踏み入れる。彼が今歩いている場所は、村のすぐ近くの裏山だった。
一刀にはどうしても気になることがあった。女将から聞いた、5年前にあの村を壊滅させたという『恐ろしい鳥』。そして、それを鈴々の祖父の奮闘によって姿を消したという事実。
しかし鈴々の祖父は武芸の心得を持っていたわけではなかったらしい。つまり戦いにおいてはど素人だったことになる。そもそも、村を破壊するほどの『鳥』を相手に、そんな人間が立ち向かえるはずがない。
その謎を、おそらく鈴々が握っている。一刀はそれを確信していた。
（けど、思ってみれば意外だったな。俺はてっきり、鈴々が彼女と最初から一緒に旅をしていたとばかり思ってたんだが、ここではそもそもまだ出会ってもなかったのか…）
意味深な思案を続けている一刀。すると、彼の顔に向けて石が一つ飛んで彼の顔に当たった。
「痛ッ…いきなりのご挨拶だな」

なんだ、いきなり石が飛んできたが…誰かこっちを狙ってきたのか？顔を上げて石が飛んできた方を確認すると、木の枝の上にまだ１０にも満たない小さな少年が、両手の中にたくさんの石ころを持ってこちらを睨んでいた。
「どうやら昨日の突風から無事に生き延びれたみたいだな…」
　昨日の夜に起きた竜巻、子供たちにとっても容赦のない災害だったに違いない。一刀は目の前の子供が昨日の災害を受けてなお無事だったことに安堵したが、次に少年は一刀に向けて身に覚えがないことを言い放ってきた。
「ついに来やがったな、オヤビンを襲った悪者め！」
「オヤビンを襲った…??」
　何のことだと言いたげな一刀の反応に少年は「とぼけるな！」と一刀に怒鳴った。
「昨日、オヤビンがじいさんから託されていた大事なものを盗まれたって言ってたんだ！あいつ、お前と同じ白い色の服着てたんだ！またオヤビンを襲うためにここに来たんだろ！」
　じいさんが託されたもの？それについて興味を覚えた一刀だが、とりあえず少年に向けて弁明する。
「待てよ。俺はまだ鈴々と会ってもいない」
「まだとぼけるのかよ！だったら謝るまで、こいつを食らえ！」
　どうも一刀が、鈴々を襲撃しておきながらとぼけていると思い込んでいるようで、少年は一刀に向けて石をだらに投げつける。
「…ふぅ、大人げないけど、君たちに時間はかけられないからな」
　この子から、なぜ鈴々を自分が襲ったという認識があるのか聞きたいが、別に問いただす相手がこの子でなければならないという理由はない。すぐに鈴々から詳細を聞いたい方が手っ取り早い。
　それにいつ、昨日村を破壊したあの鳥が襲ってくるかもわからない。その前に、鈴々になんとしても会わなければ。
　石を避けながら、一刀は少し身をかがめ、陸上選手のスタートダッシュのような構えを取る。何をするつもりか気になった少年だが、構わず石を投げ続けるが、次の瞬間、思いもよらないものを目にする。

一刀が、駈け出したと同時に、一瞬にして姿を消してしまったのだ。
「なぁ!?」
少年は夢でも見たのかと思った。だが、さっきまですぐそこにいたはずの男の姿が影も形もない。一体どこへ消えた?少年は周囲を見渡してみるも、結局一刀の姿は見当たらなかった。
なので木から降りて、一緒に罠を張った山賊団の子供たちに訪ねるも、誰も一刀の姿を見なかったらしい。
ただ聞いたのは、風も吹いてなかったのに、たった一瞬だけ『白くてすごい風』が駆け抜けた、という。

さて、少年の前から姿を消した一刀は、既に鈴々が住んでいる小屋の前に来ていた。あの場からここまで一瞬のうちにたどり着いていたのだ。
ここに鈴々がいるに違いない。一刀はさっそく、ここにいるであろう鈴々を呼んだ。
「『張飛』!!ここにいるんだろう!?出てきてくれ!」
しかし、彼は『鈴々』ではなく、なぜか別の呼び名を呼んでいた。
少し説明を入れよう。
『張飛』もまた鈴々の名前の一つである。
この世界の人間は、家族や恋人、親友など心を許した人間にしか呼ぶことを許されない真の名前『真名（まな）』というものが存在する。『張飛』とはそれに当てはまらない人間でも呼んでも構わない通称である。
もし相手の許しなくそれを呼ぶことは何にも勝るほどの無礼であり、首を斬られても文句を言う資格がないといわれるほどなのだ。何とも物騒で面倒…とも考える人もいるだろうが、この世界では常識なのである。
ちなみに張飛とは、史実においては『関羽』『劉備』と共に『黄巾の乱』で立ち上がった、古代中国の勇猛果敢な武将の武将の名前である。酒好きゆえに失敗もあったが、彼は刃が蛇のようにくねくねと曲がっている長柄武器『蛇矛（ダボウ）』を振るい、その武勇で主である劉備

を支え続けたとされている。
この世界では『鈴々』が、史実における張飛その人に当たる。
史実ではトラ髭を生やした大男なのだが、この世界ではどういうわけか、赤毛の小柄な少女になっている。…なぜかと疑問に思う人もいるかもしれないが、とりあえず流してほしい。
では話を戻そう。
一刀の呼びかけに応え、鈴々が小屋から勢いよく飛び出してきた。史実の張飛同様、その肩には蛇矛が担がれている。
一刀の顔を見るや否や、彼女は一刀を親の仇でも見るような鋭い視線を向けてきた。
「お前は…おじいちゃんの形見を盗んだ奴!!」
「またか…」
さっきの少年も自分が鈴々を襲ったとか言っていたが、昨日の怪鳥騒ぎといい、一体昨日までの間彼女の身に何が起きたというのだろう。
「なぁ、張飛。聞いてくれ、俺はここに来たのは今が初めてなんだ」
「とぼけるななのだ!おじいちゃんの形見をさっさと返すのだ!とりゃあああ!!」
頭に血を上らせ、彼女は蛇矛を担いで飛び上がり、頭上から一刀に向けてそれを振り下ろしてきた。
「うおぉ!!」
咄嗟に避ける一刀、だがすかさず鈴々は蛇矛を突き出す。
「うりゃりゃりゃ〜〜!!」
それもただ突き出しただけではなかった。一瞬の間に二度三度…いや、何発も突き出してきている。しかもすべての一撃が受け止めるだけでもかなりの重みがある。ただでさえ蛇矛は武器の中でもかなり重い。鈴々の小さな体では本来持ち上げることさえ困難なのだ。これは相当鍛錬を積んだ武人でも会得できるものではない。鈴々にはそれだけの才能と技術が備わっていた。
だが……そんな彼女の蛇矛捌きに対する一刀も相当だった。
あれほどの素早い蛇矛捌きに対して、『一撃も受けずに避け続けて』

いた。
「うううううう!!避けるななのだ!!おとなしく当たるのだ!!」
「無茶言うな!!」
とはいえ、一刀も必死だった。かなり集中して鈴々の腕、蛇矛の動きを見極めないと突き刺さってしまう。
(ったく、相変わらず気の短い子だな…)
しかしあまり時間をかけることは、一刀には許されなかった。
(いつ…あの鳥が…『マガバッサー』が動き出すかわからない。…悪いな鈴々、すぐに話を聞かせてもらうぞ!)
一刀は鈴々の蛇矛を避けつつ後ろに飛び退いて一旦距離を置く。
鈴々は彼が一度後退したのが気になったが、特に気に留めなかった。今度こそ一刀に止めを刺すため、改めて蛇矛を構え直す。
「…お前、今のうちに降参した方がいいのだ。でないと、今度は痛い目を見る程度ではすまなくなるのだ」
相手が嫌いな奴とはいえ、警告を入れてくる。そんな鈴々に一刀は、彼女なりの気遣いを感じとる。
「……」
すると、一刀は地面に自ら胡坐をかいて座り込みだした。当然彼のとった選択に鈴々は絶句する。
「な…ど、どういうつもりなのだ!?」
「張飛、俺には君と戦う理由はない」
「お、お前になくても鈴々にはあるのだ!」
「…だったら俺をその蛇矛で刺せよ」
武器もなく、構えさえも取らず、ただ地面の上に腕を組んで座っているだけの一刀。鈴々は、明らかに無防備な彼に刃を向けることに、ここにきてためらいを覚えつつあった。
「どうした?早くしろよ。俺を刺してしまえば、お前のじいさんの形見とやらを取り戻せるんだろ?」
鈴々に視線を向け、やれよやれよと一刀は鈴々を挑発し続ける。避けるそぶりさえなく、それどころか武器を隠し持っているような仕草もなかった。鈴々がその気になれば、首が飛ぶことだって容易に考え

着くというのに、恐怖を感じているようにも見えなかった。
鈴々は蛇矛を構えたまま、一刀を睨み続ける。何かしら罠を張っているのではと疑惑した。油断したところで、自分を不利な状況へ追い落とすのでは？
だが…待ち続けて一刀は一向に動かない。じっとまっすぐ、鈴々を見据えたまま動こうとしなかった。
すると、さすがに観念したのか、鈴々は蛇矛を下した。
「…無抵抗の奴を傷つけるほど、鈴々は落ちぶれた覚えはないのだ。そんなことしたらおじいちゃんに怒られるのだ」
そういいながら彼女は、どこか納得しがたそうに言った。
何とか武器を下してもらえたようなので、一刀は立ち上がって鈴々に話を伺うことにした。
「なぁ、張飛。どうして…」
と、その時だった。一刀は空を切るような音を一瞬だけ耳に拾った。
「鈴々！」
「わぷ!?」
思わず真名で鈴々を呼びながら、彼はダッシュして鈴々を抱きしめる。一瞬いきなり抱きしめられて鈴々は何が何だかわからなかったが、その意味をすぐに理解した。
一刀の肩に、どこからか放たれた矢が突き刺さっていた。
「ッ！」
目を見開く鈴々と、肩に矢を刺され苦痛の表情を浮かべながら矢を引き抜く一刀。振りかえると、茂みの中からぞろぞろと、武装した兵士たちが姿を見せてきた。
「村の役人か…」
彼らを見て一刀は悟る。庄屋が鈴々を捕縛するために兵を差し向けてきたのだ。
「やはりここにいたか、鈴々」
「悪く思うなよ、これも庄屋殿の命令だからな。お前を捕まえるか、難しかったら殺害しろ…だとよ」

いきなり自分を対象とした捕縛命令および抹殺命令を聞いて鈴々は絶句する。なぜなのか理解できない。命を狙われるような行為に走った覚えはない。あくまで子供のいらずれ程度に済まされていたはずなのに、庄屋が自分の身柄を狙ってきた。

「さて、悪いが我々に着いて来てもらうぞ」

捕まってしまったら何をされるかわかったものじゃない。兵たちが逃がすまいと取り囲んでいる。蛇矛を構えて身構える鈴々。

「目を閉じろ、鈴々！」

しかし、一刀が鈴々の前に立ち、腰から一枚の札を取り出し、兵たちに掲げる。鈴々は何が何だかわからなず、え？と声を漏らす。

すると、その札からまばゆい光が放たれ、兵たちの視界を塗りつぶした。

「うわあああ！」

「こっちだ！」

眩し過ぎる光で兵たちの視界を奪ったのを確認し、一刀は鈴々の手を引っ張る。

兵たちの視力が回復し、一刀と鈴々の二人の失踪を確認したのは、それから5分もの時間を要した。

「マガバッサーの回復にはどれほど時間がかかる…？」
「怪獣カードのエネルギーを食わせればすぐに治せますよ。ただ、今のカードの補充数を考慮すると、全快とはいえませんね。やはり、『二重封印』の影響で力が弱まっていたことも関係しているのでしょう」
「っち…なぜあんな男を、聖剣は選んだのだ！本来なら、この俺が…」
「どうも聖剣は、我々の存在を疎ましく思っているのでしょう。何せ我々は……を否定する……ですからね」
「その……の無価値さを理解できないとは…ふん、所詮無能のなまくらだな。思えばあの男も、こんな世界のために聖剣を捨てた愚か者だからな」
「…あまりそのような陰口をいうものではありませんよ？返り討ちにあったとあれば、その分だけ自分のみっともなさを思い知らされますから」
「うるさい、黙れ。それよりさっさとマガバッサーを回復し活動再開させろ。
今度こそ…あの男からすべてを奪い去っておかねば…！」

一方その頃、鈴々が庄屋の命令で鈴々の捕縛を命じられた兵たちに狙われていると知った関羽は、一刀のことをひとまずおいて彼女の身の安全を確保するべく、村付近の裏山へと向かっていた。裏山のふもとあたりで、彼女はふもとにある一本杉の辺りで道が二つに分かれていることに気付く。女将の話だと左の道を道なりに進めば鈴々の小屋に繋がっているそうだ。当然左の道を選び、道なりに進む。
それにしても、まさか女将の言っていたことが真実だったとは。５年前に現れたという、鳥の化け物の起こした突風のせいで滅亡の危機に瀕していた。それを聞いたときは正直半信半疑だった。だが昨日発生した異常すぎる暴風によって村が破壊されたこと、さらには…自分があの暴風によって遥か上空へ舞い上げられた時に見た、あの青い

翼の巨大な怪鳥。夢というにはあまりに現実味を帯びた形で記憶している。真実と認識するしかない。
だが、もう一つ気になることもある。そういえば意識を失う直前、光に包まれた巨人を見たような…。空中に舞い上げられ、身動きできなかった自分はあの怪鳥に食われるはずだった。たとえ食われなかったとしても、そのあと地上へ落下して…。
（あの光の何かが、私を救ってくれたのか？…いや、そんなまさか…）
答えの見えない疑問ばかりが浮かび続ける。
いや、今は早く鈴々を見つけて保護してやらなくては。自分のために薬草を探しているという一刀を待たせることも避けたい。再び前を向いて歩き出した。
すると、道の両端に生い茂る草むらから、４人の子供たちが現れる。鈴々山賊団に所属している子供たちのようだ。
「役人の手先だな！」
「帰れブス！オヤビンのとこにはいかせないぞ！」
「年増！」
「な…だ、誰が年増だ！私はまだ１７歳…」
口々に悪口を言われ、関羽はカチンときて近づこうとしたところで、足を止める。ちょうど足もとに、木の葉が大量に敷かれている。何ともあからさまに存在感を現しているのか。
「ふぅ…なるほど、落とし穴か。子供にしては知恵を絞ったみたいだが…この関雲長には通じんぞ！」
とぉ！と魅せるかのように飛んだ彼女は、そのまま落ち葉の上を飛び越えた。着地したところで、どうだと言わんばかりにドヤ顔を浮かべる。
しかし、足の感触に彼女は違和感を覚える。見れば、目の前の子どもたちがしてやったり、といった感じの悪い笑みを見せている。なぜそんな顔を浮かべる？
その直後だった。関羽の足もとがズボッ！と崩れ、彼女は落ちた。木の葉のダミーを使った落とし穴作戦。裏をかけなかった関羽はもろに引っかかってしまったのである。

「やーいやーい！」
「引っかかりやがった！」
　子供たちは穴から関羽を覗き込んで大笑いしていた。一生の不覚だ…関羽は自分の浅はかさを呪った。まさか二重トラップとは…相手が子供だからって舐めていたのが祟ったのだと痛感する。
「足止めは出来た！今のうちにオヤビンを役人から逃がすぞ！」
　山賊団の一人の大柄な少年が、同じく山賊団メンバーである３人の少女たちに言う。少女たちも頷き、一目散に関羽の落ちた穴から離れようとする。
「待あああああああてえええええええ!!!」
「ひぃ!!?」
　が、その途端穴からすごい勢いで関羽が飛び出し、逃げようとした子供たちの前に着地した。あまりの勢いに子供たちは動揺し、動けなくなる。そこからは関羽のターン、雑巾絞りや万力などの体罰を加えて子供たちを懲らしめてしまう。
「ふぅ…まったく、手を焼かせる子供たちだ」
「ち、ちくちょう…オヤビンさえいれば、お前なんか！」
「オヤビンは役人の手先なんかに負けないんだぞ！」
　山賊団の子供らが口々に捨て台詞のような言葉を飛ばす。役人の手先だと誤解されている。すでにこの子たちも、鈴々が役人に狙われているのだと知っていた。
「待て待て。私は鈴々を役人に引き渡しに来たわけではない。寧ろその逆だ」
　それから関羽は、なるべく子供たちに不安を与えないように、優しげな口調を保たせながら、自分が鈴々を役人の手から逃すために来たのだと語る。
「本当に役人にオヤビンを渡したりしない？」
「もちろんだ。この偃月刀に誓おう」
　関羽は持ってきていた偃月刀を掲げて誓いを立てる。多少の不安こそあるようだが、子供たちも納得し、村へと戻って行った。子供たちが戻って行ったところで関羽は少し疲れたようにため息を漏らす。

「まったく、子供という者の相手は妙に体力を使わされるな」
まぁ、別に賊を斬るよりはずっとマシだ。それよりも、鈴々を早く探して一刀とも合流しよう。そう思って鈴々の小屋の方へと視線を向き直った。
ふと、関羽は自分が通ろうとして来た道の先に、二人組の姿を見つける。
両者共に見覚えがある。あれは一刀と……鈴々ではないか。
「関羽？村にいたんじゃなかったのか!?」
「北郷殿こそ、薬草を探していたのではなかったのか？なぜ鈴々と…」
「なるほど、北郷殿まで鈴々を探しに…だったらそうと仰ってくだされば良かったではないですか」
一刀から、彼もまた鈴々に会いに言っていたことを知った関羽は、やや不服そうに一刀を睨む。一刀はその視線を向けられ気まずくなる。
「ご、ごめん…でも、どうしても気になることがあってね。そのために鈴々からどうしても話を聞いておきたかったんだ」
「気になること？」
嘘ついて自分より先に鈴々と接触を図りたくなるほどなのか。一刀は鈴々の目線に合わせて身をかがめ、鈴々に訪ねた。
「張飛。君は昨日村を襲った怪鳥について何か知っていないか？それに、俺が君の大事なものを盗んだっていうことも…」
「……わかったのだ。お前には役人から庇ってもらった借りがあるのだ」
かつて鈴々には、親に代わって引き取ってくれた育ての親がいた。自分の親とはある事情で知り合っていたらしい。年配の人間だったから鈴々は彼のことを「おじいちゃん」と呼び慕っていた。自分に文字の読み方と書き方、狩りの仕方、護身術、さまざまな知識と技術、そして愛情をもたらしてくれた。
しかし、あの怪鳥が5年前に村を滅ぼそうとした。昨晩のような激しすぎる突風。彼はその中に自ら飛び込んでいった。その後で、風が

やむと同時に怪鳥は姿を消してしまった。
彼が身を挺して封じ込めた…という。どんな技を使ってあの怪鳥を封じていたかはわからないが、祖父と慕っていた男が、村を守るために自分の身を挺して守ってくれたのだと確信した。
その後、鈴々の小屋の前にて男は鈴々の目の前で異変を起こした。彼は人の姿から光の粒子状に散り始めたのだ。
『許してくれ、鈴々。私は、これ以上お前の祖父代わりをできそうにない』
少なくとも、今まで通り祖父と慕う男と共にいられなくなる。それを予感した鈴々は叫んだ。
『やだよ…やだよおじいちゃん!!鈴々を置いて行かないで!!一人にしないで!』
手を伸ばして祖父の手をつかもうとする。まだその時は、手を握ることができた。
『よく聞くんだ鈴々。この先の未来、私の力を継ぐに相応しい戦士が、お前の前に現れるはずだ。その時まで、私の力で奴を封じ続ける。その札は、悪しき者の手に渡らぬよう、この場から決して動かさずに安置しておきなさい。そうすれば、あの怪物は目覚めない』
『おじいちゃん…』
『…いいか、鈴々。お前は決して一人ではない。私は常にお前と、お前が大切に思う人たちのことを見ている…』
それが、鈴々が最後に祖父が残した言葉だった。祖父はやがて人の姿を保たなくなり、赤い光の雫となって天へと昇り、姿を消した。
遺された鈴々の、祖父の手を握っていた手に握られたのは、一枚の札だった。見たこともない姿をした人型の戦士の姿が、絵型として刻まれていた。

「あの札がとられちゃったから、おじいちゃんが封じていたあの鳥が復活しちゃったのだ…そのせいで村がめちゃくちゃにされてしまったのだ…」
「札の力で、あの鳥を封じていたというのか…?」

にわかには信じがたそうにつぶやく関羽に、鈴々は目くじらを立てる。
「おじいちゃんは嘘をつかないのだ！」
「わ、わかっている。決してそなたの祖父を侮辱したわけではない。すまなかった…」
嘘つき呼ばわりされたように聞こえ不快感を覚えた鈴々に、関羽は謝罪する。しかし、あの怪鳥を封じ込めていたという札…もし本物だとしたら、一体どんなものなのだろうか気になってしまう。
（にしても、鈴々のおじいさんって…まさか…）
一刀は鈴々の祖父のことに、何かしら確信めいた予感をよぎらせたが、この事についてはひとまず置いておくことにした。気になるのはそれだけじゃない。
「で、君は俺を、札を盗んだ犯人だと思っていたのか。大方山賊団の子供たちにも、そのことを伝えてたから、あんな出迎えだったのか」
鈴々が自分に対して敵意を向けてきた理由がなんとなくわかった気がした。祖父から託された大切なものを奪われて気が立っていたのだろう。
（…この子は、『彼女』のバレバレな変装にも気づかなかったくらいだしぁ…）
「だって、おじいちゃんの札を盗んだ奴、白い服を着ててちょうど、お前と同じくらいの年の男だったから…」
「…なに？」
鈴々からそれを聞いた一刀は一瞬耳を疑った。
「そいつの特徴…他に何かなかったか？」
彼女の祖父の残した封印の札を奪った男について、彼は詳細に訪ねる。
「え、えっと…あいつの顔は影になってて見えてなかったけど、確かに若い男だったのはわかったのだ。武器は持ってなくて、代わりに蹴りがすごかったのだ。あの蹴り、すごく重くて、鈴々…悔しいけど一撃でやられたのだ…」
蹴りが重くてすごい。そして一刀と同じ年齢に見られた若い男。

且つ、白い服。
一刀の記憶の中で、思い当たるのは一人しか浮かばなかった。
長い長い時を経て結ばれた因縁を持った、あの男の顔。
（…くそ、あの野郎…またか…！）
一刀の顔が険しくなっていく。まるで、憎き親の仇を目の当たりにしたような鋭い眼光があることに気づく。そして…一刀があのような顔を浮かべていることに、…関羽と鈴々はわずかに恐怖を感じた。
（北郷殿…）
ガシャアアアアン!!
大地が割れたような音が轟いた。三人はその音に強く反応し、音の聞こえた方を見やる。
自分たちがいる山のすぐ隣の山の表面が崖崩れを起こしている。崩れた土砂の中から、巨大な怪鳥がその姿を現した。
「あ、あれは…!!」
間違いない。目を見開いて関羽と鈴々が、そして一刀は確信した。こいつは昨日、村を荒らしたあの怪鳥だ。
「そこに隠れてやがったのか…『マガバッサー』!!」
一刀は敵意をむき出しにしながら、怪鳥の名を口にした。

「回復したようですね…さあ、外史破壊のために生まれた『魔王獣』が一体…
『風ノ魔王獣マガバッサー』よ」
「奴を……北郷一刀をこの外史もろとも八つ裂きにしろ!!」

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（5）

マガバッサーは鈴々の住む山の隣の山の中に隠れ、その身を休めていた。
本来なら、この旧時代の文明の段階で、マガバッサーほどの怪獣を滅ぼせる者も技術も存在しない。故に容易く村ひとつは愚か、国だって滅ぼしつくすことができた。
しかし、昨日関羽が絶体絶命の危機に瀕しておきながら命を拾い、村も無事で済んだ。
村に止めを刺す前に、邪魔をされたのだ。その際に負ったダメージを回復するために、どこかで身を隠していたのである。
そして今、マガバッサーは目覚めた。今度こそ…その本能に従って『破壊』をもたらすために。
「奴め、また村を襲うつもりか！」
村の方へマガバッサーが飛んで向かっていくのを見て、関羽は怒りを見せる。
「みんな…!!」
同じようにそれを見ていた鈴々が即座に駆けようとしたところで、関羽は彼女の肩をつかんで引き留める。
「待て、鈴々！村へ行くのは危険だぞ！」
「だから鈴々が行かないといけないのだ！あそこには山賊団や村の皆が残っているのだ！」
確かに今の自分には家族がいない。だからこそ、村の人たちや、一緒に遊んでくれている子供たちは大切な存在だった。わずかなつながりである彼らまで失ったら自分には何も残らない。鈴々は関羽の腕を振りほどいて走り出す。
「あ、こら!!待たぬか!!」
関羽は再度引き留めの声を上げるが、鈴々の勢いあるダッシュには追いつけ切れず、結局鈴々は村に行ってしまった。
「まったく、無謀なことを考える…!!」
「そういう君も、村へ行ってみんなを助ける気満々って感じだろ」

後ろから一刀に指摘され、関羽はう、と息を詰まらせる。明らかに図星である。最も彼女の性格を考えればすぐに考えつくことだが。
「その考え自体は俺も納得こそしているけど、関羽。正直君はここにいた方がいい。俺があの子を連れ戻してくる」
「ほ、北郷殿こそ無謀ではないですか！あのような怪鳥が襲っているのですよ！ご覧ください！」
村の方を指さす関羽。マガバッサーが現れてたった2分ほどしか経っていないにも関わらず、昨日と同じくマガバッサーが村上空を占領し、その翼を羽ばたかせるたびに発生する暴風によって村を破壊し始めている。
「あのような嵐の中に飛び込むのは危険です！ですが鈴々や村人たちを見捨てるわけにもいかないのも事実…なれば、私一人で助けに行けば、あなたも巻き込まれずに済みます！」
「関羽…」
全滅という最悪の事態を想定すれば、彼女の案も間違いではない。だが、どちらにせよ同じことだ。
「では北郷殿、私は村人と鈴々たちの救助に向かいますので…くれぐれも!!村に向かおうとは思わないで下さい！あなたの護衛任務、私自ら引き受けたことお忘れなき用に！」
そう言って、関羽もまた村の方へと駈け出して行った。
すっかり忘れそうになっていたが、まだ護衛任務続けてる気だったのか…と一刀は内心突っ込みたくなる気持ちになる。まぁ、自分も彼女の立場だったら念押ししていただろう。たとえミイラ取りがミイラになるとしても。
（…彼女らしいけどな）
…まぁ、最も一刀にとってある意味ちょうどよかった。
関羽の姿が見えなくなったところで、彼は服の下に隠していた、輪のついた奇妙なアイテムを取り出していた。

鈴々がたどり着いたとき、村はすでに台風以上の暴風に見舞われていた。関羽と一刀が世話になっている女将もかなりまずい状況に

あった。暴風の影響で何人もの人たちが煽られていた。建物や木々にしがみつこうとする者もいたが、先日のマガバッサーの起こした災害ですでにしがみつけそうなものさえ減少していた。しがみつくのにちょうどよさそうなものもなく、多くの村人たちが次々に風にあおられていく。中には、鈴々山賊団の子供たちも混ざっていた。

「お…オヤビいいいン!!」

「いやあああ!!助けてえええええ!!」

「み、みんな!今助けに…!」

鈴々がたどりついたとき、すでに山賊団の皆が風によって宙に舞い上げられていた。鈴々は無謀にも、彼らを助けようと飛び出そうとするが、直後に後ろから襟をつかまれた。

「だから行くなと言っただろう!」

関羽だった。また邪魔をされたことに鈴々は顔を歪める。

「は、離すのだ!!このままじゃみんなが…!!」

「お前まで行ってはこの突風の犠牲になるぞ!ただでさえこうしてしがみつくのもやっとなのに…!!」

今の関羽は、偃月刀の刃を地面に突き刺す形でマガバッサーの風から飛ばされないように耐え忍ぼうとしていた。だが長くこの状態が持てるとはとても思えない。現に鈴々の小さく軽い体は風に乗りやすく、こうして捕まえておかないとすぐに風に飛ばされてしまう。

「いらないお世話なのだ!早く話すのだ!」

しかし鈴々は構わず関羽を振りほどこうとする。だが関羽は決して離そうとしない。

「…張飛、と言ったな。お前のことは…女将から聞かせてもらった」

少し目を伏せてから、関羽は鈴々に向けて語り始めた。

「な、なんなのだ突然…」

「…私も同じだ。幼い頃に故郷を賊に滅ぼされた。父も母も…兄も…何もかもを失った」

「え…!?」

それを聞いて鈴々の、関羽を見る目が見開かれる。

「だから、私は誓ったのだ!あの時のような悲しみを繰り返さない世

を目指すためにこの刃を振るうと！」
「そ、それがなんなのだ!?鈴々に何の関係があるのだ!?」
「張飛、お前は変えたくないのか？たとえあのような怪物の間の手がなかったとしても、今の世は戦に乱れ、賊に襲われ、罪もない人々が傷つけられるこの世を…あるべき平和な世にしたいと思わないか!?お前のおじい様がこの村を救ったように!!」
「そ…そんなのわからないのだ！」
鈴々は訳が分からなくなったのか、がむしゃらに頭を横に振り回し始める。
「鈴々は…ただ…父様も母様もいなくなって…おじいちゃんもいなくなって…寂しくて…でも…どうしたらいいのかわからなくて…!!」
ずっと長く孤独に苦しめられてきた鈴々は、その寂しさを思い出し、そして泣き出した。いたずらをするのも、彼女の寂しい気持ちの表れ。誰かにかまってほしかった…ただそれだけなのだ。
すると、関羽は強引に鈴々を引っ張り、そして腕の中に抱きしめた。いきなり抱きしめられて動揺した鈴々だが、関羽の抱擁を受けて、自然と大人しくなっていった。
彼女の温もりが、祖父に出会う前に感じた…父と母の温もりのそれと似ていた。
「…辛かったであろう。私とお前は同じ痛みを持つ者同士…こうして一人ではないことを知ることができる。だから…自分のことも大事にしてやれ。お前は…一人じゃないのだから」
「…う…うぅ……うあああ……」
ついに涙が止まらなくなった。もはや遠い記憶となった、泣いたときに親が胸を貸してくれた時のように、鈴々は泣いた。
しかしその時だった。ついに関羽の偃月刀は二人を支えたまま暴風を受け続けたことで、地面を支えにすることができなくなり、地面から引っこ抜けてしまう。
当然、それは二人を再び宙へと舞い上げる。
「うあああああああああ!!!」
そんな中でも、関羽は決して偃月刀と鈴々を離さなかった。あそこ

まで啖呵を切ったのだ。絶対に守って見せる。そう強く誓って彼女は先ほどよりも鈴々を離さずに抱きしめ続けた。
しかし、このままでは今度こそ自分も助からないだろう。
先日のような、二度目の奇跡などないかもしれない。だが…それでも…願わずにいられなかった。
ふと、その時…彼女の脳裏に一人の男の姿がよぎった。
それは、振り返って自分に微笑みかけてくる一刀の姿だった。
(なぜ、こんな時に…北郷殿の姿を…?)
…なぜだろうか。彼とは数日前に出会ったばかりのはずなのに……とても懐かしくて暖かくて…そして、胸が切なくなる。まるで、昔から想いを交し合った…恋人のような…。
思えば一刀を地上に残したままだ。もしかしたらあの怪鳥に、今度は一刀が狙われるのでは?そんな胸を裂くような悪い予感を抱いた。
(…兄者…どうか北郷殿を…一刀様を守って…!!)
それと同じ時だった。
地上にいた一刀は取り出した光の環、『オーブリング』を前に突出し、光に身を包む。すると、彼は黒いタイツのような服のみとなり、不思議な光の空間の中にたたずんでいた。
「諸先輩方…『今度こそ』彼女たちを守るために…一緒に戦ってください」
すかさず一刀は、一枚のカードを腰に下げていたホルダーから取り出す。
そのカードには、銀色の体に赤い模様を刻んだ光の戦士の絵柄が描かれていた。
「ウルトラマンさん!!」
『ＵＬＴＲＡＭＡＮ！』
それを輪の中に通すと、カードは光の粒子となり、絵柄に描かれた戦士の姿を象り、一刀の左に立つ。
さらに一刀はもう一枚のカードを取り出す。そこにはさっきの戦士と違う姿の、赤と紫のストライプを持つ戦士が描かれている。
「ティガさん!!」

『ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＴＩＧＡ！』
それをさっきと同じように輪の中に通すと、輪の中に通したカードが、今度はその赤と紫の戦士に姿を変えて一刀の右隣に立った。
「光の力…」
二人の戦士に挟まれ、一刀はオーブリングを頭上に掲げた。
「お借りします!!!」
『ＦＵＳＩＯＮ　ＵＰ！』
オーブリングのウィングが開かれ、一刀の隣に立っていた二人の戦士がそれぞれ金と青のオーラに身を包む。一刀の姿もまた、白いオーラに包まれた戦士の姿へと変わり、『ティガ』と『ウルトラマン』の二人の姿が彼と重なり……その姿にさらなる変化をもたらした。
『ＵＬＴＲＡＭＡＮ　ＯＲＢ　ＳＰＡＣＩＵＭ　ＺＥＰＥＲＩＯＮ！』

マガバッサーは、自らは起こした風によって引き寄せた村の人間たちを食らおうとしていた。目を開くと、鈴々を抱き寄せたままの関羽にも、マガバッサーの鋭いくちばしが迫っていた。強く目を閉じる関羽。だが…その直後だった。
「シュワァ!!!」
「ギィィィ!!?」
突然マガバッサーは、どこからか飛んできた光の拳によって殴り飛ばされた。その光は関羽たちや、宙に舞い上げられた村人たちを包み込み、地上へと降り立つ。
光は人の形をなし、その手から関羽たちを地上へそっと優しく下した。すでにその時、マガバッサーが起こしていた風は止んでいた。
目を開けた関羽は、周囲と、真っ先に抱き寄せていた鈴々を見る。
「け、けがはないか!?」
「う、うん…」
鈴々も関羽や、同じように宙に舞い上げられた村人、そして何が起こったのか理解できずにいる。

「オヤビン！」
　すると、山賊団の仲間たちが鈴々の元に駆け寄る。
「みんな、無事だったのか!?怪我はない？」
「うん!!」「でも、あたしたちどうして…」
　子供たちもまた同じだった。どう考えても、あの怪鳥に食い殺されるのを待つだけだと思っていた。だがこうして生きている、何事もなかったかのように…とは言えないが、それでも五体満足で無事でいる。
「あ…みんな、見て！」
　山賊団の一人の少女が頭上を指さす。
　関羽、鈴々、そして村人たちは驚愕する。自分たちの目の前に、自分たちの何倍もの巨体を誇る、黒や紫の模様をその身に刻んだ巨人が立っていた。
「もしかして、あいつが俺たちを助けてくれたのか…!?」
　巨人を見て村人たちは恐れおののいた。だが、巨人は自分たちを襲う気配さえなかった。それどころか、自分たちをあの怪鳥から守ってくれていた。
　巨人は、村人たちを…関羽と鈴々の二人を見た。彼女たちが無事であることを確認すると、優しく頷いて見せた。
　まるで人間そのもののようなしぐさに、関羽は戸惑う。
　巨人は背を向けて、空から降りてきたマガバッサーと対峙し、静かに身構えた。
「ゼア…」
　その戦士は、彼方の世界から人々の…世界の平和のために誕生した戦士の一人にして、北郷一刀の真の姿。
　その名も…
『ウルトラマンオーブ』!!

ウルトラマンオーブ無双～乙女大乱～（6）

「ギギギィ!!」

マガバッサーが、突如現れ自分の獲物を奪った光の巨人、ウルトラマンオーブを敵とみなし、滑空しながら突進する。オーブはそれに対し、蹴りをお見舞いしてマガバッサーを押し返す。マガバッサーはすぐに態勢を立て直し、今度はその鋭いくちばしでオーブを突き刺そうとする。突き出されたくちばしを両手でつかんで防いだオーブだが、脇が空いたのを見たマガバッサーは両翼でオーブの脇腹を叩き、再度滑空を利用した突進でオーブを突き飛ばした。吹っ飛んだオーブだが、即座に跳ね起きて再度突進してきたマガバッサーの真上に跳躍。

「シュワァ!!」

真上からの、オーブの掛け声に乗せて拳マガバッサーに叩き込まれ、マガバッサーは地面に押し込まれた。

立ち上がったマガバッサーに、再びオーブは攻撃を仕掛ける。跳躍と同時に、マガバッサーの喉元にチョップを叩き込むが、マガバッサーはオーブの頭上辺りまで羽ばたき、蹴りに載せてその鋭い足の爪を突き出してオーブを怯ませる。さらにもう一発蹴りを加えてオーブをダウンさせると、真上からオーブを踏みつけ始めた。

だが、オーブはこの程度で倒れることはなかった。マガバッサーが再び宙に上がったところで、その足を両手で捕え、マガバッサーを振り回し始めた。

「ヌウウウウウウ……オリャアアアアアアアア!!!!」

「ギイアアアアア!?」

豪快なジャイアントスウィングが炸裂。マガバッサーは背中を地面に打ち付ける形で落下した。

「すっげえ…!!」

村人たちは、オーブとマガバッサーの激闘に目を奪われた。この世界にて執筆されている物語でも、巨人と怪物の戦いなんて想像されてもいなかっただろう。だが、そんな夢にも思えない非現実的な光景

が、こうして現実となって目の前で起こっている。
「か、かっこいいのだ!!」
「がんばれーーー!!」
子供たちは歓喜していた。恐ろしい怪物と戦う勇敢なオーブの姿は、まさに子供たちの憧れとなってその目に焼き付いていた。
対して、関羽だけはまた違った反応だった。
奇妙な感覚だった。あの巨人を目にしたのは今回が初めて…のはずだ。なのにどうしてだ…なぜ…胸がこんなにもざわつくのだろう。
(あの巨人…私は前にも会ったような…いや、そんなはず…)
関羽が、自分の中に抱かれた新たな違和感に困惑する中、オーブとマガバッサーの激闘は続く。

マガバッサーは、オーブに向けて翼をばたつかせる。猛烈な風がオーブを襲い、彼は風にあおられてうまく立ちきれなくなる。だが、オーブは踏ん張り、手にノコギリ状の光輪を形成、マガバッサーに向けて投げつける。
(くらえ…〈スペリオン光輪〉!)
「シャ!!」
すると、マガバッサーは翼をばたつかせるのを即座に止め、空へ羽ばたいて回避する。逃がさない!オーブは投げつけた光輪を咄嗟に掴んで、再度空に逃げたマガバッサーに投げつけ、自分もマガバッサーを追って空に飛ぶ。
逃げていくマガバッサーの翼の一部を、光輪が切り裂いた。鳥など、空を飛ぶ生き物は翼の一部が欠けただけでも飛行するのが難しくなる。バランスを崩して落下を始めたマガバッサーに、オーブは追撃を加えるべく接近。マガバッサーは反撃に翼を使ってオーブを殴ろうとするが、手を持たない生物のジャブでは到底オーブの鉄拳には敵わなかった。逆に頭に埋め込まれた赤いクリスタル部分を殴り付けられ、ヘッドロックを懸けられたマガバッサーは、オーブと共に地上へ落下した。
戦闘開始から、このときまでわずか2分の事だった。そのたった2

分の短時間で、オーブはマガバッサーを圧倒していた。
なんて強さなのだ。それに空を自由に飛んだり、光の輪を飛ばして切り裂いたり…まさに超人というべきオーブの戦闘力に、村人たちや、地上で待っていた関羽たちはそう思うしかなかった。
しかし、巨人の身に異変が起きた。
「む、あれは…?」
関羽は、オーブの胸に埋め込まれた青い光の輪が、赤く点滅し始めたことに気付いた。それに伴い、オーブが疲労を蓄積したのかわずかにふらつき始める。
ウルトラマンは、世界によっては大気汚染の影響、変身の維持に必要なエネルギーの関係などから地球の環境に適応しきれず、その個体の多くが変身してからわずか3分ほどしか地上でその姿を保つことができない。胸の『カラータイマー』の点滅は、北郷一刀がオーブとして戦えるまで、あとわずかの時間であることを知らせているのだ。
その際、『ウルトラマン』と『ティガ』の姿が、カラータイマーを赤く点滅させながらオーブの体から引きはがれるようにちらついて消えた。
もう時間がない。だがマガバッサーもすでに限界のはず。なら、ちょうどいいタイミング。
最大の必殺技で、止めを刺す!
オーブは、頭上に右手をかざすと、鏡のような光の円が形成される。両腕を十字型に組み上げ、円が収束すると同時に、ウルトラマンオーブ最大の必殺技が炸裂した。
「〈スペリオン光線〉!!」
青白い破壊光線が、マガバッサーに炸裂した。
「ギヤアアアアアア――――!!!」
マガバッサーは避けることもできず、その身に光線を浴び続け、やがていくつもの羽を散らしながら木端微塵に砕け散った。
「お、おおおおおお!!!」
村人たちは、たちまち歓喜にあふれた。あの怪物によって、この村

は今度こそ滅亡すると思われた。しかし、突然現れた光の巨人によって、自分たちは救われたのだ。
すると、関羽は巨人の元へと駈け出した。
「あ、待つのだ!!」
それを見かねて鈴々も関羽を追った。
「お嬢ちゃんたち!」「オヤビン!」
村人の集団の中にいた宿の女将や鈴々山賊団の子供たちが引き留めるように声を出すが、関羽らの耳に入らなかった。
関羽と鈴々はオーブの前に立つと、ちょうどオーブと視線があった。
不思議だった。普段の自分なら、驚異の可能性が大きいと考え、警戒していたはず。だが、この巨人からは敵意も悪意も感じられず、脅威であるとは不思議と思えなかった。
「そなたは…一体…?」
この巨人に言葉が通じるかはわからない。だが何者か知りたかった。問わずにいられなかった。関羽は思わずその問いを口にする。
すると、オーブが関羽と鈴々を見つめた時、彼女らの頭の中に声が聞こえてきた。
――――俺の名は、オーブ
「お、欧布?」
もしや、今の声はこの巨人が発しているのか?目を見開く関羽の言葉にオーブが頷く。
――――闇を照らして、悪を討つ
まるで、決め台詞のような自己紹介だった。オーブは頭上を見上げると、「シュワ!」と掛け声と共に、空へと飛び去って行った。

その夜、関羽は鈴々の山小屋に泊めてもらうことになった。
助けてもらったお礼ということで、鈴々が自分の小屋に泊まることを勧めてきて、少々押し切られる形ではあったが、言葉に甘えて泊まることにしたのだ。
「ふぅ…」

風呂の脱衣所にて、拭きを脱ぎながら関羽は深いため息を漏らした。この数日、あまりにもハードなことが続きすぎて、さすがの彼女も疲れてしまった。
北郷一刀との出会い、鈴々山賊団、怪鳥と村の崩壊の危機、そして…光の巨人『欧布』。
腐敗したこの国を変える。その方法・手段を探すために旅を初めてある程度のことには慣れたつもりでいたが、今回ばかりは驚かされるばかりのことだらけだ。
特に、彼女の記憶に深く刻まれたのは、一刀とあの巨人のことだ。
思い返せば、一刀はマガバッサーの出現の際、「悪魔の風が来る」と予感めいたことを口にした。そして実際にあの怪鳥が現れ、それを光の巨人が倒した。
「北郷殿…欧布…」
二人の名を自然に洩らしながら、風呂場の方へ足を踏み入れた。
「…ふぅ〜〜、いい湯だ。まさか鈴々の家にこんないい風呂があるなんてな」
「…え?」
思わぬ先客が、そこにいたことに関羽は目が点になった。
昼から姿を消していた一刀が湯船につかっているではないか。それも…全裸で。
それも全裸で!!（大事なことなので二度言いました）
「…え?ッぶふ!?」
一刀もようやく関羽が入ってきたことに気が付いて入口の方を向いてしまった。
湯気で見えづらかったが、それでもお互いの目に映った、異性の裸体。
「き…きゃあああああああああああ!?」
「ぐぼあぁあああああああああ!!!」
初心な関羽にはあまりに刺激が強すぎる状況に、一刀は天国から地獄へ叩き落とされるのだった…。

「まったく、先に一刀殿が入っているのをなぜ言わなかったのだ！」
湯から上がり、関羽はさっそく鈴々に文句を言った。いきなり風呂場で異性に遭遇し、それも互いの裸を見てしまったなんてシャレにならない。…ちなみのあの後、一刀は気絶させられたところで鈴々に回収、そのまま入れ替わる形で関羽が入浴している。
「にゃはは…ごめんなのだ。先にお兄ちゃんお風呂に入れてたの忘れてたのだ」
「忘れないでくれ…」
鈴々は苦笑いしながら関羽に謝ると、既に気絶から回復して鼻を押さえていた一刀が涙目になりながらぼやいてきた。
「でも嫌わないでほしいのだ。こうして他の誰かと一緒に寝るの、久しぶりだから…」
「はは、いいって。別に嫌いになったなんていってないよ？」
「にゃはは…」
笑みを見せて頭に手をポンポンと乗せた一刀に、鈴々は照れくさそうにしながらも嬉しそうに笑みを返した。
「それにしても張飛、お主いつから北郷殿をお兄ちゃんと呼んだのだ？」
「さっき関羽お姉ちゃんをここに連れてくる前に、お兄ちゃんにお礼がしたくてここに連れてきたのだ。その時に鈴々の真名も預けたのだ」
「そうだったのか」
既に真名も預けていたのか。自分が何とかしてあげようとも考えていたが、その前に鈴々に心を許してもらえるとは、心なしか関羽は若干複雑さも覚える。
「でも、やっぱり大の男の俺が一緒ってのはまずくないか？」
少し言いにくそうに一刀が言う。鈴々がどうしても三人で寝たいと申し出てきたから来たのだが、やはり同じ年頃の娘たちと一緒というのは、さっきのような不可抗力なこともあり得そうなのでちょっと抵抗がある。…それ以上に思春期ゆえの嬉しさもあるが、また関羽にどやされそうなので内緒だ。

「…うぅ、やっぱり嫌なのか？」
「う…!!い、いやぁ…別に嫌なわけないじゃないか！な、なぁ関羽!?」
「え、ええ！」
　涙目でこちらを見つめる鈴々。無垢な少女の涙で訴えられてはいかなる理由があっても抵抗しきれない。結局一刀と関羽は折れた。
　月がさっきよりも高く昇り始めた頃、三人は川の字で横になった。
「にゃはは。こうしてるの…久しぶりなのだ…父様と母様と…一緒みたいで…」
　うとうとし始めている鈴々の言葉に、関羽はぼっ！と赤くなった。
「は、ばば馬鹿を言うな！それでは、まるで私と北郷殿が…その…」
「関羽…ッ!!」
　一刀がとっさに人差し指でシーッ！と言って関羽を黙らせようとする。ついでに鈴々の方を指さすと、既に鈴々は眠りの世界に旅立っていた。それを見て関羽は、こほん…とまだ赤面のまま咳払いする。
「眠っちゃったか。久しぶりに他の誰かと寝れて安心したみたいだな」
「…そうですね」
　こうして眠っている鈴々を見ていると、心が癒される。亡き兄が幼い頃の自分を寝かしつけた時も、こんな感じだったのだろうか。
「なぁ、関羽。明日になったら、この子の姉替わりになったらどうかな？」
「わ、私が…この子の姉に、ですか？」
「この子には身寄りがないし、このまま村に置いておくにはまた寂しい生活を紛らわすために山賊団ごっこを続けそうだ。しかも、あの庄屋鈴々のいたずらに業を煮やしてただろ？
　武術も俺が一度手合せしたときかなりものだったし、頼もしい仲間になってくれるはずだ」
　そういえば、確かにあの庄屋のこともあった。それに天涯孤独の身である鈴々の心を解きほぐすには、誰かが傍にいてあげるのがいい。なら、一刀の言うとおりこの子を旅に連れて行くのが一番よさそうだ。

「…そうですね。明日になったら、この子に相談しましょう。
ですが、北郷殿は明日からどうなさるつもりですか？次はどこに向かわれるおつもりで？」
「俺は…」
関羽から明日の予定を問われ、少し言葉を濁したが、一刀はすぐに答えを出した。
「俺は旅の風来坊だからな。君たちとずっと一緒…というのは難しいかな。明日からまた一人で旅に出るつもりだ」
「そう、ですか…」
自分たちの旅には同行してくれるつもりはないらしい。できれば着いて来てほしかったのだが、無理強いは好ましくないので、それ以上言わないことにした。
「なに、どうせこの世界は丸いんだ。またどこかで会えるだろ」
残念そうな表情を浮かべる関羽に、一刀は笑みを見せてきた。
「ほら、もう寝ようぜ」
「…そうですね。では、おやすみなさい」

鈴々に続いて関羽もまた眠りについたところで、二人を起こさないように小屋を後にした一刀はマガバッサーがオーブに倒された場所に来ていた。そこには、赤く不気味に明滅する『マガクリスタル』が遺されていた。一刀はオーブリングを掲げると、クリスタルが砕け散って光となり、オーブリングを介して新たな形を成す。
そこには、オーブとも、ティガやウルトラマンと異なる姿をしたウルトラマンの姿が描かれていた。
「マガバッサーを封じていたのは、メビウスさんの力でしたか。お疲れさんです。
そして、これからよろしくお願いします」
その絵柄にある戦士…ウルトラマンメビウスへの敬意を払いながら、一刀は腰に下げていた、カードホルダーにメビウスのカードを仕舞い込んだ。
「けど、やはり鈴々がじいさんから託されたって言ってたカードは回

収できなかったか…」
マガクリスタルが消え、クレーターだけが遺された地面を見つめながら、一刀は呟く。
マガバッサーの封印は、弱まっていたメビウスの封印の上に、誰か別のウルトラマンの力が上乗せされていたに違いない。だが、マガバッサーのマガクリスタルからそのウルトラマンの力の結晶を固形化した『ウルトラフュージョンカード』は回収できなかった。
「封印に使われていたとはいえ、すでにカードって形で鈴々の手にあった以上、新たに回収はできないってわけか。だとすると…やっぱ奴から取り返すしかないな。
…くそ、あの野郎…」
一刀は、鈴々が祖父から託されたというカードを奪った犯人に対する、憎悪ともいえる怒りをその胸の中で燃え上がらせていた。
「お前だけは許さねぇ…待っていろよ…『左慈』！」

これから先、一刀は一人で旅をしつつも、幾度も関羽をはじめとした少女たちと出会いと別れを繰り返しながら、平和のため…そして己が目的のため、ウルトラマンオーブとして戦うこととなる。
その果てに待つものは、果たして…。

その頃…。
「結局マガバッサーでは無理だったか…っち、使えん駒だ」
一刀と同じ年くらいの若い男が、露骨に舌打ちする。その手には、一刀の持つオーブリングと似た、黒い輪のアイテム『ダークリング』が握られている。
そのリングの輪の中から、一枚のカードが生成される。そのカードには、オーブに倒されたマガバッサーの絵が描かれていた。
すると、メガネの男は苛立つ彼をなだめた。
「まぁまぁ、どちらにしても構わないじゃないですか。奴がここで倒れてもよし、たとえ奴が今の段階で『六体の魔王獣』すべてを撃破してもよし…我々の計画に何の支障もありません」

「だが、忌々しいことこの上ないが、『奴ら』の力は侮れん。曲がりなりにも北郷一刀はその力に選ばれた男だ。どんな力を使って我々を凌駕するかもわからん。この世界が、歴史が『リセットされた』形とはいえ存在し続けている理由も、まだ憶測の範疇だ」
「その時はまた、策を講じるのみです。私は策を練るのが得意ですからね…ご遠慮なく頼ってください。我々にとって…北郷一刀は邪魔者ですからね。
　幸い、北郷一刀…いえ、『ウルトラマンオーブ』は本来の力を失い、他のウルトラ戦士の力に頼らなければ変身できない死にぞこないですからね。たとえば…あなたが持ってきたこのカードとか、ね」
　眼鏡の男は、一枚の札を若い男に見せる。そこには、深紅の体に金色の瞳を持つ戦士の姿が描かれていた。
　鈴々の祖父となった男が彼女に残していた、マガバッサーを封じていたカードである。
「やはり他のウルトラ戦士も関与していたか。年月と共に消えかけていたウルトラマンメビウスの封印の上に、自らの力を加えることで封印を長持ちさせていたか」
「平和を守るウルトラ戦士が、破壊のために自らの力を使われる…くくくく、考えてみればなかなか面白そうですね」
「悪趣味な奴だ…まぁ、貴様のような男に頼るのは気持ち悪いが、貴様は頭が切れる。
　せいぜい、奴を確実に殺せる算段を立てておくことだ。それができなければ、この俺自らの手で奴を殺してやる」
「ふふ…その血気盛んなところは見ていて飽きませんね。ゾクゾクさせられますよ」
「…っち。このホモ野郎が…」
　眼鏡の男から感じられる『男色の気』を感じて、若い男は心底気持ち悪さを覚えていた。だがこうしてかかわっているのは、ずっと長く達成しようとしても達成しきれなかった、ある目的のためだ。
「北郷一刀…後悔させてやる。あの時死ねなかったことをな！」
　若い男……『左慈』は一刀に対する激しい憎悪の念を抱きながら、彼

への殺意を露わにした。

インフィニットウルトラマンジード（1）

Ｍ７８星雲に、とあるひとつの星がある。
その星は、われわれの地球と非常によく似た環境ゆえに、地球と同様に人間が（正確には人間に限りなく近いヒューマノイド型宇宙人）、悠久の平和のときを過ごしながら暮らしていた。
星の文明も地球よりもはるか未来の系譜にあり、まさにＳＦ映画の一幕をそのままリアルに表現したかのような光景が広がっていた。
しかし、現在から２０万年以上前のある時期、彼らの星の太陽が寿命を追えて爆発してしまう。太陽を失い、世界は凍てつく暗闇に閉ざされてしまい、その星の人間たちは絶望と共に滅びのときを迎えようとした。
しかし、その星の科学者たちをはじめとして、諦めない心を糧に、新たな太陽を作り出す計画が始まる。彼らの尽力により、人工太陽『プラズマスパークコア』が完成する。コアのエネルギーをタワーに接続させ、星全体にそのエネルギーが行き届いたそのとき、彼らの体に異変が起きた。
人間のシルエットをベースに、彼らは予想外の進化を果たした。
彼らは後に、『ウルトラマン』と呼ばれる。

ウルトラマンとなったその星の人類は、その力を正しいことのために使うべく模索し、『宇宙警備隊』を結成する。
あらゆる自然脅威、侵略、災害…彼らの活躍により数多の星で発生したそれらは解決され、乱れていた宇宙の秩序は徐々に正されていった。
しかし、長い歴史の中でただ一人、ウルトラマンの強大な力の誘惑に負けてしまった男がいた。

名は…『ウルトラマンベリアル』。
宇宙警備隊の中でも、後にウルトラの父と呼ばれる戦士『ウルトラマンケン』と肩を並べる凄腕の戦士。しかし以前から彼は、「悪は徹底

的につぶすべし」という、正義というには過激な思想を持っていた。
それゆえに彼は、光の国に宣戦布告し後に『ウルトラ大戦争』と呼ばれる戦争を起こした『暗黒大皇帝エンペラ星人』の邪悪な闇の力に心惹かれていた。
やがて、悪と正義の境界線の上にあるその過激な思想を持つ彼よりも、堅実かつ最善の結果で平和を求めるケンの方が周囲から理解され、そして力をつけていく。やがて宇宙警備隊の大隊長に任命された彼に嫉妬を抱いたベリアルは、禁忌に触れてしまう。
それは、人口太陽『プラズマスパークコア』のパワーを手に入れること。
これを得れば、そのウルトラ戦士は莫大なエネルギーと力を得られるが、それは同時に光の国から、再び光を奪い、闇に閉ざされた氷の星へと変えてしまうこととなる。故に触れることは禁忌とされ、光の国では最悪の罪となる。
力を渇望していた彼はかまわずにコアに触れてしまう。

―力だ、力が欲しい…
―越えてやる…俺を見下したあいつらを!

だがコアの力はベリアルほどの戦士でも耐えられるものではなく、逆に彼の体を苦しめる。禁忌に触れたことが露となったベリアルは、光の国からの追放処分を下された。
そして彼の運命を決定付ける出来事と遭遇する。
『光の国が憎いか?』
『だ、誰だ…?』
暗い宇宙の片隅にある星。傷ついていたベリアルは、ある思念体と遭遇する。思念体はベリアルに語る。
『私はレイブラッド。全宇宙を支配する者だ。お前に力を与えてやろう』
それは、かつて宇宙を制覇し恐怖に陥れた、宇宙の歴史の中でもっとも最悪の宇宙人、レイブラッド星人だった。

数多の怪獣軍団を率い、強大な力を持ったレイブラッド星人だが、肉体の限界を向かえ、いわゆる幽霊の状態でさまよっていた。再び宇宙の頂点に返り咲くため、自分の遺伝子を受け継がせた星人たちを争わせたりなど策謀をめぐらせていたが、その果てに彼はベリアルを見つけ出したのだ。

自分の野望を受け継ぐにふさわしい、器として。

『うわあああああ!!やめろおおおおお!!!』

この時点でのベリアルは、まだ正義の心が残っていた。しかし、レイブラッドはベリアルの意思を無視し、彼の体に入り込んでいく。

やがて、ベリアルの銀色の体は…暗黒の色に染まり、その顔も鮫のように凶悪な容姿に変貌してしまう。

これが、光の国唯一の悪の戦士、ウルトラマンベリアルの誕生だった。

これをきっかけに、ベリアルは自分の故郷への復讐と全宇宙制覇に乗り出す。

強大な力を持つベリアルはまさに無双の力の持ち主。ウルトラ戦士が何人相手でもかなわないほどで、しかも何度も敗北と死を迎えてなお、彼は復活し宇宙警備隊を苦しめていく。

それは、ウルトラの父以外でベリアルと因縁のある若き最強戦士『ウルトラマンゼロ』でも手を焼くほどだった。

最初は善戦していたゼロだが、とある別宇宙の地球での決戦で、自分よりも高い成長を見せたベリアルの前に敗北する。

「どうしたゼロ?貴様の力はその程度か?俺が貴様の肉体を乗っ取った時に見せたあの力も出せないか?」

「ちっくしょおが…」

敗北したゼロの左腕には、かつてはベリアルとの戦いで勝利への切り札となったウルティメイトブレスレットが巻かれていたが、ベリアルの攻撃によって無惨にも破損していた。

ゼロでさえ勝てず、彼と共にベリアルに挑んだ戦士たちにも、ベリアルに勝てる者はもはやいなかった。

「くくく、ゼロ、ケン、そして他のウルトラ戦士共。貴様らは俺の宇宙制覇に何度も邪魔をして来た。俺も同志の多くを失ったが、ここまで俺を手こずらせた褒美を貴様らにくれてやる」
「なにをする気だ!?」
ゼロを庇うようにかれの前に立った戦士の一人、ウルトラマン８０が問うと、ベリアルは上空に巨大な鉄製の塊を出現させる。
「貴様らが我が僕共の相手をしている間に作らせたものだ。こいつを起動させる」
１００体もの怪獣を操り、且つ武器にもなる究極の魔具、ギガバトルナイザーを掲げるベリアル。すると、頭上に出現した鉄の塊が動き出した。
「貴様らへのプレゼント…それは…」

地球の…この宇宙の最期の光景だ！

ベリアルが動かしたそれは、宇宙を破壊するほどの威力を持つ史上最悪の破壊兵器『超時空消滅爆弾』だった。
地球を中心に起動したその兵器は、ウルトラマンたちでも止められないものだった。
大気圏外から脱出したウルトラ戦士たちは、赤く染まり、ひび割れていく地球を見つめるしかできなかった。
「何とかしないと！」
「行くなゼロ！もうこの宇宙は持たない！」
阻止しようとするが、父であるウルトラセブンから止められるゼロ。
超時空消滅爆弾によって、地球を中心に断層が発生する。それはやがて太陽系を、そしてその外の銀河系の星々さえも飲み込んでいった…

かに見えた。

地球を覆う炎の中、多くの人々が無に帰っていった。その中で、一人の少女が傷ついた状態で空を見上げた。
もう、私はここで死ぬのだろう。できることなら、あの空の彼方へ行ってみたかった…
しかし、その時だった。
金色に光る流星が飛来した。
髪を生やし、赤い目を持つ顔。雄々しいマントを羽織り、まるで神のようにも見える神々しさを備えた、巨人だった。
彼は自らを黄金色に輝かせ、崩壊していく地球を包むように天を仰いだ。
少女は、その奇跡のような光景を、ただ脳裏に焼き付けていた。

インフィニット・ウルトラマンジード

今から１０年前だ。この世界にインフィニット・ストラトス、通称ＩＳと呼ばれるパワードスーツが開発された。
これは人間が等身大のまま宇宙への潜行が可能となる上にコンパクトで強力な武器が仕込まれたもので、それを開発したのは、当時まだ１４歳の少女、『篠之乃束』だった。しかし科学者たちはまだ若い彼女の発明を「所詮子供が作ったものだ」と嘲笑い、認めなかった。
彼女はよくも悪くも天才過ぎたが故に、異端児だった。そして同時に…非常に問題のある人格だった。彼女は天才過ぎたがゆえに、相手が興味を抱くに値しない凡人とみなせば顔の認識さえできない有象無象でしかなかった。彼女が認められなかったもう一つの理由、その人格故に『もてあましすぎた頭脳を悪事に使うのではないのか？』と

いう大人たちの考えによるものが最もだった。
しかし、逆にそれが彼女に火をつけることになる。
認められなかったことに不満を抱いた彼女は、後に『白騎士事件』と呼ばれる事件を引き起こす。
それは、彼女の開発したＩＳ『白騎士』を身に纏った人物に、束がハッキングして捜査している各国のミサイル等の兵器を返り討ちにするというものだった。ありとあらゆる兵器が、『白騎士』に向けて放たれる。
だが、白騎士は全ての兵器を……『傷一つ追うことなく』返り討ちにして見せた。
束を否定していた大人たちは、彼女の持つ技術を認めざるを得なかった。
白騎士事件をきっかけに、世界各国でＩＳが普及され始めた。
だが、それは世界を悪い方向に傾けてしまうこととなった。
なぜなら…ＩＳは『女性にしか動かせない』という致命的な欠陥があったからだ。
正確には、一部の女性にしか動かせないというものだが、最強の兵器でもあるＩＳを優先して保有しようとする国は、『アラスカ条約』を締結して兵器としてではなくスポーツのようなものとして扱うと取り決めた一方で、女性優先の法律を定め力をつけて行った。それに伴い、ＩＳの存在を盾に、女性による犯罪・冤罪が続出していったのだ。法的にも肩身の狭い男性の失業率、自殺率が年々高まっていった。かつて女性にも男性と同等の権利を与えよと主張してきた女性利権団体も、今ではその大半が女尊男卑主義者で構成されるという、愚かしい姿へと堕ちてしまっていた。今では政界でもこのような差別を平気で行う女性が乗り出すことも多くなった。
当然これを快く思わない女性もおり、同じ女性として恥ずべきだと主張して、今の世に不満を抱く男性たちと結託して女尊男卑主義の女性たちと対立を深めていった。
そして、事件の首謀者だった束は一時政府に監視の身となっていたが、ある日４５０を超えるＩＳコアを残して姿を消した。

都内のとある一軒家。表札には『織斑』と名前が刻まれている。
『ニュースをお伝えします。おととい、新宿駅にて女性が男性から体を触られた事件ですが、実際には女性が男性からの慰謝料を払わせるために公言した冤罪だったことが判明しました。警視庁によりますと、女性は近くにいた男性を見て……』
その家で一人の少年が、アパートで、テレビニュースを危機ながら朝食をとっていた。
「また女による冤罪事件か」
向かい側で、同じように朝食をとっているスーツの女性が、苦々しげに呟く。
「ＩＳがあるからという理由で、すべてを正当化する…まったく、馬鹿な女たちが増えたものだ。お前も巻き込まれないように気をつけろよ」
この女性は織斑千冬。かつて世界一のＩＳパイロットとして世界に名を馳せたことがある。現在は現役引退し、ＩＳパイロットを養成する学校『ＩＳ学園』の教師をしている。
「わかってるよ。二度も誘拐されるのはごめんだ」
それに対して、少年は頷く。
彼の名は一夏。千冬の弟で１５歳。今年から高校生として藍越学園を受験することになっている。
実は、彼は数年前に本当に誘拐されたことがあった。
前述で語ったように、千冬がＩＳパイロットだった頃、世界一のＩＳパイロットを決める大会『モンドグロッソ』が開催されていた。一度優勝経験がある千冬の二連覇を見ようと、一夏も応援に来ていた。
だが、千冬の優勝を妨害しようと、一夏を何者かがさらって人質にするという事件が起きた。決勝戦前にこれに気づいた千冬は、自ら決勝戦を辞退、優勝の栄光を捨てて一夏を救ったのだった。
『今でもこの白騎士の正体についてはわかっていません。一説によれば、篠之乃束博士による犯行と見られています』

テレビには、解説者が白騎士を遠くから撮した写真を視聴者に見せている。白くてごつい鎧に身を包む謎の女戦士の写真を見て、一夏は口を開く。
「白騎士って、なんであんなことしたんだ？束さんにしたって、ＩＳって女性にしか使えないなら、まず男から使えるようにしてから発表した方がよかっただろうし」
実を言うと、篠之乃束とこの姉弟は知り合い同士でもあった。だが、白騎士事件が起きて以来、束は各国の政府に追われる身となり、消息を絶っている。彼女にも家族はいたのだが、血縁者ということでそれぞれ政府の監視下に置かれるという不遇な立場に追いやられたほどだ。
「いくら頭がよくても、あいつが人の気持ちをいちいち気に留めるような奴か？」
「…だよね」
束の性格の悪さもまた、二人は認識しているようだ。
二人がそんな風に会話しているころには、ニュースは次のコーナーに入ったころだった。
『今回も、この事件の秘密に迫ります。白騎士事件も謎ですが、もう一つ人類が無視できない謎があります。それは…クライシス・インパクト』
『クライシス・インパクト』と呼ぶ事件について触れると、解説者は新たに写真パネルを視聴者に見せてくる。
クライシス・インパクト。
白騎士事件よりさらに以前の時期に発生したとされている。
話によると、この戦いで『ウルトラマン』と呼ばれる巨人の姿をした宇宙人が、自分たちの故郷でただ一人反逆を起こした『ベリアル』率いる軍勢と戦い、地球が壊滅しかけたという。
だが、当時の資料がほとんど存在せず、地球が傷ひとつなく存在しているということもあり、そもそも発生していたかどうかさえも不明…いや、起きてもいない幻の事件とされている。
だが、公式の資料や各国のデータベースで、ウルトラマンやベリア

ルなど、クライシス・インパクトに関する記述がわずかに残されていたこともあり、実は何かしらの形で発生していたのではないだろうかと噂されている。とはいえ、ＩＳの存在が強く浸透しているこの世界では、ただの都市伝説程度にしかなっていなかった。特に女尊男卑主義の女性からは強く否定されている。

「…」

ニュース番組の出演者たちも見ている、『ベリアル』の写真は白黒でとても画質がよいとはいえなかった。だが、確かに見える。モノクロの写真の中に、釣り上がった目を持った黒い悪魔のような巨人がいる。ベリアルを見ている千冬の目は、鋭かった。

「千冬姉、聞いてる？」

「む、あぁすまん。少しボーっとしていたよ」

なぜか千冬はすぐに返事をせず、弟の呼びかけで我に返る。

「ビール飲み過ぎじゃね？千冬姉って外じゃしっかりしてる割に、うちの中じゃすげぇズボラだし。これじゃいつ婿さんがくるのかわからねぇな」

「…ほう、それは私に対する挑戦か？一夏」

「…あ、やべ…」

生意気にもからかってきた一夏に、千冬は不敵に笑って腕をポキポキと鳴らす。やばいと思ったそのときはもう後の祭りだった。

千冬の最強ぶりは弟である一夏もよくわかっている。同時に女尊男卑の世の中だから、千冬の近づく男性は今でも一人もいないので、本人も気にして悟られないようにしている。

下手に機嫌を損ねれば……一瞬でボロボロにされる。当然ながら姉の逆鱗に触れてしまった一夏はしばらく物言わぬ屍になる……と思われたがそうはならなかった。

「三十六計逃げるにしかず!!」

「逃がすかこの愚弟め!!」

「やっぱ昨日の酒残ってるだろ千冬姉!?」

急いで受験対策グッズを詰め込んだ鞄を持ってとんずらを図る一夏を、千冬はどこからか出した竹刀で襲いかかってきた。その時の彼

女の顔は、一夏の思った通り酒気を帯びているためなのか、赤ら顔になっている。
逃亡を図った一夏はすぐにリビングの扉を閉め、すぐに玄関を出て少しでも恐ろしい鬼と化した姉の魔の手から逃げ切ろうとする。千冬がリビングの扉を蹴破り、そしてすぐにでも一夏を捕まえてとっちめてやろうとした。だが彼女が玄関から外に出た時には、一夏の姿は家からかなり遠くの路上に立っていた。
「おのれぇ……なぜあの馬鹿はいつもいつも私の手から逃げ切れる…」
このままムキになって追い続けても追いつけない。
ようやく落ち着きを取り戻した千冬は、既に豆粒以上に小さくなって見える一夏の姿を追いながら考える。自分でも、身体能力は人並み以上だという自負はある。だが……彼女は知っていた。
弟の一夏の方が、自分より遥かに身体能力が優れているということを。
自分は絶え間ない努力と生まれ持った才能で、ＩＳの名パイロットとしての栄誉を得た。個人的に好ましい呼び名ではないが、『ブリュンヒルデ』という敬称で呼ばれ、男性より女性のファンが圧倒的に多いくらいだ。
だが…一夏は違う。
あいつは昔から、身体能力については『異常』だった。
子供のころ、少しでも体力をつけられるようにと、束の実家でもある篠之乃家の剣道道場に通わせたことがある。その時の一夏は…自分より格段上の相手をたった一瞬、力が入り過ぎて面への一撃でノックアウトしてしまった。使っていた竹刀さえ、ひび割れたほどである。これには千冬自身でも、大概の事では驚かないつもりでいたが…弟に対して戦慄さえ覚えた。
それ以降、彼は初めての学校の体力テストでもあり得ない数値を出した。
短距離走は誰よりも速く走り、握力テストでは使っていた器具さえも壊しかけ、全員がマラソンでばてばてなのにただ一人だけ息切れ一

つ起こさなかった。
もしあいつがＩＳに乗れたら…一瞬で自分など超えられるだろう。同時に彼の存在は世間的に目立ちすぎたものへと変わってしまう。
だから千冬は、一夏に力をなるべく目立たないようにコントロールしろと念を押した。目立ち過ぎれば、一夏に何をされるかわかったものじゃない。
（…やはり、あいつは…『そう』なのか？）

「ふぅ…あっぶねぇ…ったく、千冬姉も冗談通じないよな…」
確かに頭に血が上りやすい千冬も問題ないわけではないが、デリカシーがない自分が一番悪い癖に愚痴をこぼしながら、一夏はある場所を目指していた。
今年受験するこちになっている高校、藍越学園だ。しばしばＩＳ学園と名前の響きがかぶっていることでちょっと有名だ。
しかし、この短時間でここまで逃げ切れるとは。一夏も自分の身体能力については異常だと思っていた。最初にこれに気が付いたとき、調子に乗ってあちこち走り回って見せたが、千冬から調子に乗り過ぎだとこっぴどく叱られた。子供は少しでも自分が他人より優れた部分があると調子に乗って間違いを犯す。それを千冬は避けたかったのだと今なら理解できる。
千冬の２連覇を賭けたモンドグロッソで誘拐された時は、さすがに逃げ切ることはできなかった。なぜなら誘拐犯の一部にＩＳを使った女性工作員がいたからだ。いくら素の身体能力が優れている一夏でも、ＩＳを纏った人間相手では敵わず、千冬の助けが来るのを待つだけだった。
彼はその時、誘拐の理由には自分のこの『異常な身体能力』が関係しているのではと思った。あくまで憶測でしかないが、以後一夏はめったなこと以外では本気で運動することは避け、剣道もやめた。
（……）
駅に着いて、自分の手を見る一夏。

この異常な身体能力の正体は、今でもわからない。ただ、子供というものは親から才能を遺伝するといったことは聞いたことがある。千冬も結構な才能もちだし、自分もそうなのだろうと、自惚れた言い方になるがそう思っている。もしこれが親からの遺伝だとしたら…

(俺の親って、どんな人だったんだろうな…)

…実は、二人の両親はずっと昔に蒸発していたのだ。千冬はともかく、一夏はどうしてか、両親の顔はまったく覚えていない。というか、七歳以前の記憶があいまいだ。

一番昔の写真といえば、小学1年の一夏と高校1年の千冬のツーショットのみ。ゆえに、子供の頃は消えた両親の残した貯金と、姉が必死に行ったバイトの稼ぎで食いつないできたのだ。初優勝した時のモンドグロッソの優勝賞金も全部一夏との生活のために、彼女は使い切ってしまっている。そんな姉のために、彼は剣道を放棄してバイトを始めた。高校に行かず働こうとも考えていたが、中卒の…それも男性の就職率の低さゆえに反対された。だからせめて、学費も安くて就職率が高いとされる藍越学園を受験することにしたのである。

自分たちを勝手に生んで、貯金を残すだけ残して勝手に姿を消したという両親。ちょっと気にはなるが、今は千冬との間で出来た暗黙のルールで禁句としている。だから今でも、親のことについては貯金以外の事は何も知らない。

「って、今はそんなこと言ってる場合じゃないか」

今は顔も覚えていない親の事なんかより受験だ。

モノレールに乗り、藍越学年を目指す一夏。

そんな中、彼と同じ車両に載っていた幼い子供が、泣きじゃくっているのを見かけた。

「うあああああああん!!」

「もう、泣いたっておもちゃは買ってあげないわよ!」

「やだやだだ!!買って買って買ってええええええ!ドンシャイングッズ買ってよおおおお!!」

どうやら欲しいおもちゃを母親に買ってもらえずに泣いているようだ。一夏はちょっと懐かしく思った。ああいうわがままな態度を

千冬相手にもとったことがあるからだ。
それに、彼の言う『ドンシャイン』については自分も知っている。
『爆裂戦記ドンシャイン』。
自分が子供の頃から、何度か再放送されているほどの根強い人気のある特撮ヒーロードラマだ。子供のころ、グッズが欲しくて姉に何度もしつこくねだっては「甘ったれるな」と怒られたものだ。その反動で、ちょこっとバイト代を使ってグッズを買ってたりする。
ふと、周囲を見ると、列車内にいる何人かの人が不機嫌そうに子供をにらんでいた。特に女性が目立つ。女尊男卑主義の人なのだろう。酷ければ、彼女たちはあの男の子と母親に噛み付いてくるかもしれない。
ドンシャインや、姉千冬への憧れもあって、一夏はヒーローへの願望というものを今でも消せずにいた。
（ジーッとしてても、どうにもならないな！）
見過ごせなくなった彼は、その男の子の元へ席を立って歩み寄ってきた。
「君、ドンシャインが好きなのか？」
「ぐず…ふぇ？」
いきなり声をかけられて男の子は泣き止んで戸惑いを見せてくる。
「お下がりでいいなら、ジャーーーーン!!」
そう言って彼がかばんから取り出したのは…ドンシャインのチェーンキーホルダーだった。
「これをあげるから、ドンシャインみたいにわがまま言わないで強くなるんだぞ？」
「…お兄ちゃん、いいの？」
「そ、そんな悪いですよ…！」
子供に変なものを与えないでと言うことなく、申し訳なさそうに母親が一夏に返そうと思ったが、彼女はここで周囲の視線がきついことに気がついた。特に同性からの視線が重い。ここで何とか大人しくさせないと、彼女たちから息子が何かしら因縁をつけられるかもしれない。

「遠慮しなくていいですよ。まだ家に別のグッズありますし」
「すみません、ありがとうございます…」
「ありがとう、お兄ちゃん！」
「おう、兄ちゃんとの約束忘れるなよ？」
「うん！」
親子から礼を言われたのとちょうどそのとき、一夏は目的の駅へとたどり着いた。
少しはドンシャインに近づけたかな？内心一夏は、小さな子供に手を差し伸べられた自分に満足感を覚えていた。

一夏が列車に乗る前の時間…。
彼と同様に、受験を控えた長い赤茶色の髪をした少年と少女が、町のとある食堂『五反田食堂』から飛び出してきた。
「あああああやばいやばい!!後少しで試験始まるじゃんかよ!!こっから15分もかかんのに!!」
「もう！お兄ってばなにやってんの！あたしはともかく受験生のお兄が遅刻するとか!!」
後から遅れて、妹と思われる少女が兄に対して文句を言う。
二人はめちゃくちゃ慌てていた。どうやら自分が受ける受験校までの到着予定時間を大幅に遅れてしまったようだ。一夏は彼と比べて試験開始時間は遅れているので心配はなかったのだが、彼は朝早い時間帯らしい。その影響で、本当なら妹の出発時間よりも早いはずが、一緒の時間帯となっていた。
この兄は結構ずぼらな面が目立つようだ。
「くっそ、電車の時間を読み間違えるとか、俺の馬鹿!!試験に間に合わなかったら、じいちゃんたちに叱られる！」
とにかく少年は必死こいて駆け出していった。

この少年…五反田　弾と、

織斑一夏。

二人はこれから…大いなる運命と立ち向かうことを余儀なくされるのだった。

インフィニットウルトラマンジード（２）

「……」

暗闇に包まれ、電子コンピュータのディスプレイの光のみで照らされたその場所で、一人の女性が画面に映る世界地図を食い入るように眺め続けていた。

その格好は一般的に見えて異様だった。ウサミミと、胸元の開いたエプロンドレスを着ており、かの有名な『不思議の国のアリス』を強く意識したとしか思えない。だが、その反面彼女はあどけなくも美しい容姿をしており、スタイルも理想的な形になっている。

この女性こそが、ＩＳを発明した科学者にして『天災』と称されている、篠ノ之束だった。

「束様。暗くしては目が悪くなりますよ」

後ろから声がかかる。同時に周囲に明かりがともされ、部屋の全容が明らかになる。そこは、普通の部屋ではなかった。確かに束の私物と思われるぬいぐるみやら数多の機器とコード、そしてどうしてかドンシャイングッズが散らばっていた。それを除けば、まるで宇宙船の中のような近未来的な環境だった。

声をかけたのは、流れるような銀髪を持った、少し幼い印象を持たせる女の子だった。

「…クーちゃん、この何から何までオーバースペック全快の束さんがそう簡単に視力が落ちる体質じゃないことは知ってるでしょ？暗いほうが落ち着くのに…」

「だとしてもだめです」

振り返って『クーちゃん』に少し不満げに言う束だが、ぴしゃりと言い返される。

クーちゃんこと、クロエ。しばらく前からどういうわけか、束と行動を共にしている。研究開発、および娯楽に興じている束に代わって家事を請け負っている。

「それよりも、お食事の時間ですよ」

しかし、料理の腕はよろしくない。現に彼女がさらに乗せた料理は

消し炭とゲル状の何かになっている。だというのに、束は「ありがと、クーちゃん♪」といって遠慮なく口に運び出した。…こんなところでもオーバースペックらしい。
「ところで、見つかりましたか？『例の奴ら』の生体反応を…」
「…うぅん。今日もこれといって何もなし。いっくんたちにも手出しをしてきてる様子はないよ」
ナプキンで口をふき取りながら、クロエからの質問に束はそのように答えた。どうもコンピュータ越し
に何かを追っているようだ。
「このまま、いっくんとちーちゃんが、何事もなく暮らせるならいいんだけどね。万が一出てきても、束さんが作った子供たち（ＩＳ）を使う連中が退治してくれるなら…」
この『いっくんとちーちゃん』だが、予想はしていると思うが一夏と千冬の二人の事を指している。二人から性格の悪さを指摘されている割に、この二人に対してはそのような態度を示していないようだ。
「…それは束様ご自身がすでにわかっていると思いますよ？」
「わかってるよ。わかってるけどね…」
クロエの言葉の先に何が隠れているのか、束は先に読み取ったらしく、肩を落としながら呟き出した。
「どうせなら私だけが世界をかき乱す側に立ちたかったよ。あいつらは…束さんでさえやばい奴らって思えるんだから」
そんなときだった。
束が見ていた電子モニターの画面に、赤い点がマークされると同時に、二人のいるフロア中に警報が鳴り響いた。

束たちが警報を聞くほんの少し前、一夏は無事藍越学園の受験会場のビルへと到着した。
（ここで試験落ちて千冬姉の負担を増やすわけにいかない。バイト増やして、それでいて学業もちゃんとしないとな）

入口の自動扉を潜り抜けた一夏は、千冬の苦労を強く考慮し、試験を必ず合格しようと考えていた。
「さて、試験会場は…」
この会場には、藍越学院以外にもあらゆる学校の試験会場が用意されている。その中に、ＩＳパイロット操縦者を養成する『ＩＳ学園』もある。姉の存在以外、自分には縁がないけどな…と一夏は流した。ＩＳを使えることができれば、ドンシャインや千冬みたいに、誰かのために力を振るえると思ったことがあるが、男である自分にあれが動かせるはずがない。
自分が受ける試験の部屋を探ろうと、案内板を探し始めた。
すると、一夏の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「あああぁぁよかった…さっきの列車間に合ってなかったら…マジ焦った」
「次はもうないようにしてよね、馬鹿お兄！見てるあたしまで変に焦ったじゃん」
「だったら先にいけばよかっただろうに…ここから近いって言っても、お前も今から学校だ「弾か？」…ろ？」
急にどこからか声をかけられ、弾と呼ばれた少年と、彼の妹は振り返る。見ると、一夏が彼らの下へ手を振りながら駆けつけてきた。
「え、嘘!?一夏さん!?」
「あれ、蘭もいたのか？まだ今年で中３だろ？」
妹『蘭』は一夏の顔を見た瞬間、顔を赤らめて酷く慌てた。彼と会うなんて夢にも思ってなかったらしい。一夏も、まだ受験生じゃない彼女がいたことに目を丸くしていた。
「一夏!?お前ここで受験する予定だったのか!?」
「うちの事情、二人も知ってるだろ。藍越学院は学費も安いし、就学率も高いからな」
この兄妹と一夏は、数年前からの知り合い同士で、弾とは友人だった。
「ど、どどどどうしよう。今のあたし変に見られてないかな？髪とか跳ねてないかな…？」

「いや、蘭落ち着けよ。めちゃくちゃあがってんぞ」
「う、うっさい！それよりお兄！なんで一夏さんが一緒受験するって教えなかったの!?」
「いや、普通学年の違う者同士がこんなとこで鉢合わせしないだろ…」
兄からの指摘を受け、蘭はうぐぐ…と唸る。
実は、蘭は一夏に知り合ってからの好意を抱き続けている。一夏は気づいていないが。
「大丈夫か蘭。今日は妙に機嫌悪いな」
「べ、別にそんなことはないです！」
「本当に大丈夫か？顔赤いし、熱でもあるんじゃ…」
だからつい、彼の前では少しでもいい子に見られようと、落ちつきがあって余裕のある女の子を演じようと猫を被っている。だが一夏は彼女の好意に気付かなくとも、蘭が弾に対する扱いが少し雑だということを知っている。兄妹だから遠慮が少ないので当たり前なのだが。
（こいつ、相変わらず鈍感だな。普通少しは察するだろうに…）
弾は自分の妹からの好意に全く気づきもしない一夏に呆れるばかりだった。

試験会場ビルの屋上から、そんな彼らを見下ろしている人物がいた。
黒い装束に身を纏い、頭も顔を包むほどのフードで覆われている。
『…奴の位置は特定できたか？』
「問題ない。何も知らず呑気に受験…学生らしくしているよ」
声からして、女性…いや、外見年齢からして女の子というべきか。耳に付けたインカム越しに聞こえた男の声に対し、少女はそのように答える。
『なら計画に変更はないな。あの女の妨害もない。そのまま作戦に入れ』
「…了解」
少女はその手に、黒い模様を刻んだ赤いアイテムを、続いて二つの

黒く染まったカプセルを取り出した。

その直後だった。突如、大きな地鳴りが、彼のいる藍越学園を中心に発生し始めた。

「きゃあああ！」

「な、なんだあ!?」

突如発生した地震は、試験会場ビルを中心に広がり、都市全体に響く。やがて都市の中心部から、おぞましい姿の怪物が姿を現した。

「キシャアアアアアアアアアア!!!」

二つの三日月状の角を持ち、髑髏のような顔と赤黒い牙を持つ怪物。今にも自分たちを食らいたそうな血に飢えた顔で、怪物は周囲の建物を破壊し始めた。

「か、怪獣だああああああああ!!」

「速く逃げて!!」

こうなっては試験どころじゃなかった。その『怪獣』に、見た人すべてが恐れ慄き、逃げ出した。周囲に避難警報が町中にうるさく鳴り響いた。

「な、なんなのあれ…!?」

「怪獣って、マジでいたのか…」

蘭が唖然としながら言った。一夏もあんな巨大な怪物がいるだなんて思わなかった。怪獣、それはこの世界ではクライシス・インパクトの中でしか聞いたことがなかった。しかし伝説にしか思われていなかった怪獣が現に現れ、街を破壊している。

「二人とも、ぼさっとしないで走れ!!」

弾が即座に一夏と蘭の二人に向けて叫び、二人は駆けだす。だがそんなときだった。

「もう、男のくせに邪魔よ!!」

後ろから走ってきた女性が弾を突き飛ばし、バランスを崩した彼をそのまま放置して先に逃げ出していった。

「弾！」「お兄!?」

すぐに二人は弾の元へ駆け寄る。一夏が弾に肩を貸して彼を起こ

す。
「大丈夫か!?」
「お兄、まだ歩ける!?」
「あぁ…にしても、あのばばぁ…!!」
自分が助かるために、弾を突き飛ばして姿を消した女性に対して、弾は悪態をつく。
怪獣は、自分たち人間がただ逃げるがままなことをいいことに、さらに破壊活動を加速させていった。壊れていく街を、多くの人たちが嘆き、恐怖しながら駆け抜けていた。
「くっそ、俺たちの街を…!」
逃げていく人たちと、蹂躙されていく街を見て、一夏は怒りを覚える。
その時、頭上を一瞬で通り抜ける人影がいくつか通り過ぎた。
「ＩＳ部隊！」
ＩＳを纏う軍隊『ＩＳ部隊』が、この非常事態を聞きつけ、駆けつけてきてくれたのだ。
「こんな化け物…ＩＳの敵じゃないわ！」
「私たちの力を見せつけてやりましょう！」
「無我口を叩くな！散会して敵の動きを探りつつ、奴の侵攻を食い止めろ！」
駆けつけた隊員の一部にも女尊男卑思考に染まっている者もいれば、ただ単純にＩＳが無敵だと考える者もいる。解決すべき問題こそあるが、それでも優れた実力者たちをそろえたＩＳ部隊は、赤黒い怪獣の周囲を散会する。
「攻撃開始！」
隊長の女性の命令が下され、ＩＳ部隊の隊員たちは、それぞれのＩＳに搭載されているミサイル、ビームを放って一斉射撃を開始した。
巨体を持つ怪獣は素早く避ける余裕などないのか、ＩＳ部隊の一斉射撃に対して、ただその身に攻撃を受けるがままだった。
一夏たちは、内心で声援を送りながら、怪獣がそのまま倒れてくれ

ることを願った。
「ギギャ！」
怪獣から悲鳴が聞こえた。それを聞き、ＩＳ部隊の隊員たちは自分たちの攻撃が効いていると確信し、さらに攻撃の手を強めた。
「よし、止めだ…!!」
立ち込めていく煙の中にいる怪獣に向けて、隊長がＩＳから大型サイズ砲口を、肩に乗せる形で展開する。方向にエネルギーがほとばしり、彼女は煙の中にいる怪獣に向けて、放った。
「ストライクバニッシャー!!」
それは隊員たちが発射したものよりもさらに巨大なエメラルド色のレーザーだった。怪獣の胸元近くに、レーザーは被弾し、さらに大きな爆発が怪獣を包み込んだ。
隊長はそれを見て、ふう、と深く息を吐いた。あれほどのレーザーを放てる大砲を使う成果、彼女の体には強い反動による痛みが伝わっていた。だが、強い達成感がその痛みさえも心地よくしていた。
「やった!!」
「流石隊長です！」
「ふん、図体がでかい獣の分際でＩＳに逆らうからこうなるんだ！」
ＩＳ部隊の隊員たちが、隊長が最後に放った一撃で勝利したことを悟った。
しかし…
「キシャアアアアアアアア!!!」
「…え……」
怒り狂うような猛獣の叫び声に、彼女たちは唖然とした。
「き、効いてない!?何で!?」
ただ驚愕し、硬直している彼女たちの隙を、怪獣は見逃さなかった。
「馬鹿者、早く逃げろ！」
隊長の声が轟くが、遅かった。真っ先に狙われた隊員の一人が、怪獣が振るった剛腕に直撃し、地面に叩きつけられた。
「キャアアアアア!!」
その隊員が落下した地点から、爆発と共に炎が立ち上った。同時に

…その隊員は、ただの肉片と炭と化すという、あまりにも無残な最期を遂げた。
「な……!?」
隊員たち全員に、衝撃が走った。
ＩＳには、かつての『白騎士』の頃から引き継がれた性能『絶対防御』がある。これはあらゆる兵器から身を守れるほどの超強力なシールドを展開できるのだが…ＩＳが無敵と言われる伝説の源が、たった今打ち破られたのだ。
怪獣の猛威はさらに強まる。彼女たちが呆然としている隙を見て、今度は尾を振るって彼女たちを攻撃した。その攻撃で、また二人とＩＳ部隊に犠牲が発生する。
彼女たちは、さすがにこの時点で我に返り、何とか怪獣の攻撃を回避しようと図る。もはや、ＩＳの絶対防御は頼ることができなかった。
「絶対防御に振り分けているエネルギーを、それぞれの兵装のパワーにバイパスしろ!!」
「し、しかし…」
「何をしている！速く…!!」
隊長は、使い物にならなくなった防御より、まだ使い道のある攻撃の方にエネルギーを振り分けるように命令を下したが、生き残っている隊員たちの多くはそれを強く躊躇した。
ＩＳの絶対防御、今の今まで、それは自分たちにとって命綱であり、自分たちが男性よりも強者になった証でもあった。依存しすぎて、それを手放せないでいたのだ。
「も、もう嫌よ！こんな獣の相手なんかできない!!」
「やってられるか!!」
「ま、待て!!」
しまいには、彼女たちの中で恐怖のあまり敵前逃亡を図る者まで出始めてしまった。隊長の命令を無視し、ＩＳ部隊で戦闘続行が可能な者は……いなくなっていった。
邪魔者が著しく減っていき、怪獣は自らの角に、赤黒い電撃をほと

ばしらせ……一発の光線として町中にはなった。
奴の放った光線は、試験会場のビルを木端微塵に砕いた。
「た、隊長、撤退しましょう！このままでは全滅します！」
自分たちの手勢もヘリ、元よりあの怪獣を倒せるだけの攻撃力も、攻撃を防ぐ防御もなくなった今、自分たちに勝ち目などなかった。残った部下の隊員の一人が、隊長に進言した。
「…やむを得ん。お前たちは撤退しつつ住民の避難を優先しろ！当然男女問わずだ！それまで私が奴の注意を引く！」
「何を言ってるんです！隊長のような前頭指揮の取れる人間がいないと…」
「速くするんだ!!!」
部下の口答えを許すまいと、隊長はＩＳに搭載されていたナイフの刀身を、進言した部下に向ける。怪獣はその時、街の破壊の方に意識を向けているが、いつまたこちらを向くかわからない。
「…隊長、ご武運を…」
ただ一人残っていたその部下は、隊長と共に敬礼を交し合った。
おそらく、これが最期となると、予感しながら…。

「うわあああ!!」
ビルの爆発による激しい爆風に、一夏たち三人は煽られる。固いアスファルトの道路の上に落ちる前に、一夏は身をひるがえし、そのまま地面に落ちかけた弾と蘭の二人を一気に受け止めた。
「ぐぉ…!!」
流石に自分と斗詩の変わらない人間二人を受け止めるのは勢いがあり過ぎたのか、二人に押し倒されるように一夏はアスファルトの道路に激突、その代り五反田兄妹に怪我はなかった。
「一夏、大丈夫か!?」
「一夏さん！」
「お、俺なら平気…！」
「でも、あたしとお兄と同時に…」

「大丈夫。俺こう見えて頑丈だから…千冬姉仕込みの鍛え具合は伊達じゃないって」
普通なら怪我の一つをしてそうなのに、一夏は軽口を叩いて余裕を見せてくる。
そんな時、一夏の目の前に何か大きなものが転がっているのが目に入る。
「あれは、ＩＳ…！」
一夏は直に見たことが、弾と蘭は新聞やテレビで見たことがあった。
ＩＳの量産型第２世代機種『打鉄』だ。近接用ブレード『葵』、アサルトライフル『焔備』を標準装備した、安定した性能を持つ機体だ。
「なんでＩＳがこんなとこに？」
「多分、試験場になってたビルの中にあったんだ」
疑問に思った蘭に対し、一夏が予想を立てる。藍越学園とＩＳ学園の試験会場は同じ建物にあった。ＩＳの適性を持つかどうか、受験希望者のために一機ここに運ばれていたのだろう。
「お前を起動できたら、あいつと戦えたのかな…」
そんな敵わないとしか思えない機体を口にした一夏は、打鉄に触れる。
だが…そのまさかの出来事が起きた。
打鉄が、一夏が触れると同時に光を帯び始めたのだ。
「嘘、ＩＳが起動してる…!?」
「マジかよ…」
蘭と弾は驚愕した。確かＩＳは女性にしか反応を示さないはず。なぜ、『男である一夏』に反応したのだ!?
二人の予想をさらに超えるかのように、打鉄は一瞬にして、ＩＳ部隊に装備されていたＩＳと同じように、一夏の体に兵装となって纏われた。
「俺が、ＩＳを…!?」
一夏自身も信じられなかった。まさか、姉と同じようにＩＳを動かすことができようとは。

一夏は自分の左手を開いたり閉じたりして、着心地を確認する。
どうしてこいつが反応してくれたのか、神の気紛れなのかはわからない。だが…一つ彼が理解したことがあった。
「これなら…俺も戦える！」
ＩＳを装備することができた、その事実が彼の中に高い昂揚感を与えていた。意を決し、一夏は弾と蘭に向けて言った。
「二人とも、先に逃げろ！俺があいつを食い止める！」
「お、おい正気か!?ＩＳ部隊でもまともにダメージ…っておい!!」
弾は止めようとしたものの、一夏は彼の制止を無視して飛び出して行った。
「ば、馬鹿!!やめろ一夏!!」
「一夏さんだめ!!」
蘭も一緒に止めるように叫んだ。ＩＳ部隊でも全く歯が立たずに圧倒されていたのだ。それをわかったうえで、彼はあの怪獣に向かっていったというのか。

同じ頃、地球の大気圏外に位置する宇宙空間…そこに空間の歪みが生じた。その歪みの中から、銀色の輝かしい鎧を着た、青と赤の模様を刻んだ巨人が姿を現し、同時に歪みは収縮して消滅した。
巨人の鎧も、巨人の左手首に腕輪となる形で小さくなるが、腕輪になった時にはかなりボロボロになっていた。
「ありがとよ、ウルティメイトイージス。戻ったら直してやっからな」
巨人はその腕輪を、まるで昔ながらの戦友に対するもののように礼を言った。どうやら、すでに破損していたらしく、ついに限界を迎えてしまったらしい。
巨人は、今度は地球の方に目を向ける。
「久しぶりだな、キングの爺さん。っつっても、今は俺の声なんざ聞こえてねえだろうけど……ん？」
その時、彼はその金色の瞳を通して、不穏な気配を地球から感じた。
どこかで感じたことがあるような、嫌な意味でなじみ深い気配。ど

す黒く、邪悪な…
「…まさか!!」
彼は居てもたってもいられず、地球へと一直線へ向かった。

一夏は無我夢中で怪獣に向かっていった。なぜ初めてＩＳを動かしたのに、空の飛び方を心得ているのかとか、冷静な状態だったのなら一夏も考える余裕ができた。だがこの時の彼の心は…ＩＳという新たな力を得たことへの昂揚感と、正義感から湧き上がる怪獣への怒りで支配されていた。
部下たちが、この地にまだ残っている住民たちの避難をさせている間、自ら殿となって怪獣の注意を引いていたＩＳ部隊隊長は、思わぬ横槍が飛んできたことに目を見開いた。
「少年が、ＩＳを動かしてるだと!?」
彼女も、女性にしか動かせないはずのＩＳを少年が動かしているということに一番驚きを見せていた。
怪獣も、一夏が向かってくることに気づいて、街の破壊を中断して彼の方を振り向いた。
あれだけの巨体に決定的なダメージを与えるには…どこか急所を狙ってしまえばいい。一夏はそう思い、真っ先に奴の目に狙いを定めた。
「くらえええええ!!」
近接ブレード『葵』を引き抜き、彼は怪獣に向かっていく。怪獣は一夏の接近を許すまいと、その剛腕を振るって一夏を叩き落とそうとする。
「何をしてるんだ!」
止せ、そんな単調な攻撃が訊くわけがない！隊長はそう思って一夏に病めるように叫ぼうとした。
一夏は、かろうじて怪獣の腕を潜り抜け、奴の目に向けて刀を振り下した。
ザシュ!!

だが、目に彼の攻撃は当たらなかった。眉間に、小さな傷が付いただけだった。
「くそ、ならもう一度…」
今度こそあいつの目を叩き斬ってやろうと啖呵を切って、もう一度空中を旋回しようとした一夏。
…だが、彼は忘れていた。
たとえＩＳを動かせたとしても、今の自分は………『ド素人』だということを。
一夏は後ろに後退しようと意識したが、勢いが強すぎて予想以上に距離を取ってしまった。思うようにＩＳが動いてくれなくなったことに、一夏は動揺する。何とか必要な分まで距離を詰めて次の攻撃に出ようと思ったが、今度は彼の意思と裏腹に、前方ではなく、下方に降りてしまう。今度こそ怪獣の方に向かおうと思っても、今度は勝手に体が回転してしまったりと、全く頭の中に描いたイメージと異なる挙動になってしまう。
「なんでだよ!?さっきまでは確かに…!」
困惑する一夏だが、さらに忘れていたことがあった。
一夏という、自分と比べて羽虫のようなちっぽけな奴に、眉間に傷を入れられたことで、怪獣が怒り狂っていたことに。
「ガアアアアアアアアアア!!!」
怒りに身を任せ、一気に近づいてきた怪獣の頭突きが、一夏に直撃した。
「ガハッ…」
強すぎる衝撃のあまり、彼は声にならない悲鳴と共に吐血した。まるで生身のままトラックか列車に体当たりを食らったような衝撃だった。そのまま一夏は地上へと落下していく。
「いかん!」
ＩＳ部隊隊長はすぐにＩＳを加速させて一夏を追い、彼があとわずかで地面に直撃しそうになったところで彼を受け止めた。
だが、怪獣の怒りはさらにヒートアップしていく。
二つの角にエネルギーをほとばしらせ、怪獣は周囲の街の建物に向

けて、口から赤黒い光線を解き放った。
まるで、核戦争で使われた超兵器のような威力の破壊光線だった。
その光線であらゆる建物が破壊され、爆発。たちまち火の海が広がり、そして瓦礫も飛び散っていく。
「あ……！」
それは五反田兄妹にも及んだ。蘭のもとに、瓦礫が頭上から落下してきた。呆気にとられるあまり、彼女は体が動かなかった。
「蘭危ねぇ！」
その時だった。兄である弾が彼女を突き飛ばした。直後、頭上から落ちてきた瓦礫の雨に、兄は……飲み込まれていった。
激しい瓦礫の散っていく音と共に、蘭は我に返った。
「お、お兄…？」
目の前に積み上がった瓦礫の山。さらに近くの建物が倒壊し、兄がいたはずの場所にさらに積み上がっていく。
「……やだ……嘘、でしょ…？」
信じたくなかった。いつも当たり前に共に暮らしてきて、自分の我儘や文句に付き合いながら、一夏への恋を応援し続けてきてくれた兄が……
「お兄いいいいいいいいい‼」
蘭の叫び声が、荒れ果てて行った街に広がって行った。
その叫び声を聞き付けたように、遥か彼方から青く輝く光が飛来したのを、この時意識を失っていた一夏は知らなかった。

インフィニットウルトラマンジード（３）

「…う、うぅ…」
一夏は、とある病院の病室で目を覚ました。
「気が付いたか、一夏？」
少しボーっとしたまま目を開けると、姉である千冬の顔が目に入る。
「千冬姉…？俺、なんで…」
「話は、ＩＳ部隊の隊長殿から聞いた。ＩＳを動かして、あの怪獣に向かっていったそうだな？」
「…うん」
一夏は頷いた。結局あの怪獣に勝てなかったのだと悟った。
「それより千冬姉、あの化け物は⁉」
「…怪獣なら、去って行った。お前が運ばれ始めた後で……光の巨人が追い払ったよ」

一夏が気絶し、弾が蘭を庇って瓦礫の下敷きになってしまったその直後だった。
怪獣は、憂さ晴らしのごとく暴走の一途をたどっていた。目に映るものは全て、自分が蹂躙するためだけに存在しているとばかりに。
千冬もまた、その場に駆けつけていた。一夏を探すために。何せ怪獣が出現した場所は、一夏の受験会場ビルのすぐ近くだった。何か弟の身に起こる、そんな悪い予感が彼女をここまで走らせた。
「一夏！一夏ぁ!!」
弟の名前を必死に呼ぶ千冬。だが一夏の姿は見当たらない。見つかるのは、瓦礫の山と、怪獣の攻撃で沸き立つ火の海。
頼む…頼む一夏。どこかで生きていてくれ。
一夏は、自分にとってたった一人の家族だ。あいつだけは…絶対に喪いたくない！
決して普段は見せない弱さを顔に露わにしながら、彼女は一夏を探し回った。しかし、そんな彼女を阻むように、ついに怪獣が彼女の前

に現れる。
「グルルルル…」
「…!!」
思わず息をのむ千冬。怪獣はうなり声を漏らしながら、彼女のもとに迫ってきた。
そんな時だった。
空の上から、エメラルド色に輝く閃光が、まるで切り裂くように怪獣の前に降り注いだ。
とっさに、閃光によって巻き上がる砂煙から顔を覆う千冬。今のはなんだ？ＩＳ部隊の増援が来たのだろうか。それにしても、威力が高すぎる。あのＩＳ部隊の隊長の放ったビームよりもとんでもない威力だ。
さらにもう一つ、怪獣と千冬の間に、青く輝く巨大な光の塊が落下する。光は輝きを収めていく内に、青と赤の模様を刻んだ巨人の姿へと変わる。
「デュ!!」
千冬は、その巨人を見て目を見開いた。
まるで自分を守るように降り立ったその巨人の姿に、目を吸い寄せられたかのような錯覚を覚えた。
いつでもかかってこいと言うように、巨人は怪獣に向けて身構える。
数秒の間、巨人と怪獣は互いににらみ合ったまま動かなかった。しかし、怪獣は全身を黒く染まったオーラに身を包むと、跡形もなく姿を消した。
「！」
巨人も、言葉で「消えた？」と言ったかのように周囲を見渡した。敵の姿が見当たらない。敵の気配がない、その事実を確認した巨人は構えを解き、自分もまた青い霧状の光となって空気の中に溶けて行った。
千冬は、影も形もなくなった巨人と怪獣のいた場所を見て、思わず呟いた。

「ウルトラマン…なのか…!?」
かつて、発生したこと自体が幻とされていたクライシス・インパクト。だが、怪獣に続き、そして光の巨人さえも姿を見せた。
「やはり本当の事、だったということか…クライシス・インパクトは…」
「ウルトラマンが、怪獣を追い払った…!?」
「証拠ならある。既に写真がネット上にアップロードされているからな」
証拠として、千冬は一夏に、スマホのネット検索を利用し、その巨人の姿を見せる。怪獣のように、合成とかそんなものじゃなかった。何一つ修正されることのない状態で、『ウルトラマン』の姿があった。
「マジでいたんだ…ウルトラマンは」
「そうだな。それについては驚いた。お前がＩＳを動かしたことも含めてな。
……だが、そんなことはどうでもいい」
ＩＳを、まさか自分の弟が動かすとは思わなかった。だがそんなことは、今の千冬にとって問題じゃなかった。千冬は弟に向けて苦しそうにしながらも、強く訴えるように睨み付けた。
「馬鹿者が…なんて無茶を…！何をしたのか、お前はわかっているのか!?」
病室であるということを省みないほどに感情を露にした千冬に睨まれ、怒鳴られた一夏は、自分が縮こまっていくのを覚えた。
「お…俺は、みんなを守ろうとして…」
千冬は構わず、一夏の胸ぐらを両手でつかんで、泣き叫ぶような声で一夏に怒鳴った。
「たかが、偶然ＩＳを起動させただけの素人のお前がか!?ＩＳ部隊の精鋭たちが立ち向かっても歯が立たなかった怪物に、お前が勝てると本気で思っていたのか!?」
千冬さえ超えた一夏の異常な身体能力とＩＳの絶対防御を備えた性能。それが組み合わされば…と思っただろう。だが結果はこれだ。

「でも、俺…」
「でもとか俺じゃない!!どうして素直に謝れない!?お前が軽々しく命を投げ打ったことで……お前は自分の親友を……ッ!!」
そこまで言い掛けたところで、千冬は喉を詰まらせた。これ以上は、一夏には言えない戸でも言いたげに。姉が躊躇していることに気付いた一夏は尋ねた。
「親友…?弾が、弾がどうかしたっていうのかよ!?」
何か嫌な事実が、自分が寝ている間に起きていた予感がした。千冬に尋ねたと同時に、一夏の病室に蘭が来訪した。
「…一夏さん」
「蘭!弾は…弾はどうなったんだ!?」
嫌な予感がする。認めたくない真実がその時にある。だからできれば聞かないままでいたかった。だが、思わず弾の事を聞いてしまった。蘭が「兄は無事ですよ」と言ってくれる…そんな根拠のない逃避同然の希望を抱いていたかもしれない。
蘭は……ありのままの事実を一夏に言った。

「兄は…死にました」

「!!?」
頭の中が、真っ白になった。
聞き違いかと思った。でも、意識ははっきりしていたし、自分の聴力もいたって正常だった。
「嘘だろ…そんなの…」
「嘘じゃありません。あの時、兄は私を庇って瓦礫の下敷きになり、亡くなりました」
一夏は、千冬と共に弾のいるとされる病室へ案内された。彼の怪我は軽いものだったため、歩くことに支障はなく、千冬の肩を借りる必要はなかった。
蘭に連れられる形で弾の病室を訪れた二人。

一夏は、目に飛び込んできた光景に、絶句した。
ベッドには、かけ布団の他に顔の上から白い布を被せられた少年がいた。誰かだなんて、顔の白い布の傍らから流れる長い赤髪で一目でわかった。でも認めたくなかった。だから白い布を取って、本当は別の誰かの顔なのだろうと思いたかった。
だが、布を取ってその顔を見てようやく確信になった。小5から中学時代、一緒につるんでバカやってた親友が…二度と動くことなく眠りについていた。
（一夏…）
弾の亡骸の傍らで、ショックのあまり膝を着く一夏を、千冬は心の痛みを顔に出さないように必死に堪えていた。
「嘘だろ…弾…なんで……」
「なんで…ですって？」
弾を見たまま、言葉をうまく口にできない一夏の後ろから、どす黒い感情を露わにした低い声が漏れ出てきた。気が付いて振り返った途端、パン！と乾いた音がその病室内に響いた。
「う…！」
頬に痛みが走るのを感じ、今自分は頬を叩かれたと気づいた。
「あんたのせいで…あんたのせいでお兄が!!
あんたがあの時、蜂の巣を突っつくような真似しなかったら！お兄は死ななくて済んだのに!!!」
目の前では…蘭が大粒の涙を流しながら自分を睨み付けていた。一夏の胸倉を掴み、彼女はひたすら彼に対して恨みを口にし続ける。
蘭の憎しみを帯びた言葉は、一夏の心に剣のように突き刺さって行った。
あの時の自分は…ただ守りたかっただけなのに…守るはずの人を守れず、そればかりかそのうちの一人から…憎まれていた。
「もういい！止せ！」
千冬が無理やり蘭を引きはがす。蘭の一夏への怒りと兄を失った悲しみはまだ止まらない。
「あなたのこと、好きだったのに…それなのに…」

恨み言の次に、思わぬ告白をその耳に聞いて、一夏は絶句する。
全く気付かなかった。蘭がそんな目で自分を見てくれていたとは。そして……良かれと思ったことが、結果として彼女の心を深く痛めつけてしまったのかをようやく理解した。
「帰れ!!二度と顔見せんな!!!」
蘭のその言葉を節目に、一夏は死人のような足取りで病室を後にした。
「俺のせいで、弾が…」
ＩＳが使えるという事実。それが自分の人間離れした身体能力と合わせれば、何でもできる。かつての千冬や、ドンシャインのように。そう思い込んでいた。だが…現実はこれだ。自分の無謀な出しゃばりで怪獣を怒らせ、弾が死んだ。そして自分に好意を寄せてくれていた蘭が、一転して自分を憎むようになった。
気が付けば、一夏は千冬の車に乗せられ、実家に戻されていた。あれからしばらく時間が経ち、門の前に来たというのに、一夏の目に光が戻らない。
「一夏…」
できれば、廃人のように気力を亡くした弟の傍にいたいという、姉としての嬢が千冬の中で沸いた。だが…
「すまない、一夏。私はこれからあの怪獣とウルトラマンのことについての対応のため、ＩＳ学園に向かわねばならん。そこで教師をやっている以上はな」
「……」
一夏から返事はない。
「…気にするな、なんて言える状況じゃないのはわかる。だが、いつまでもそんな顔のままでいるな」
でないと…私まで辛くなってしまうじゃないか。そう思ったが決して口にしなかった。玄関の扉の鍵を開き、家の中に弟を送り届けた。

一夏がリビングで座り込んだのを確認すると、千冬は外に出て携帯を取り出した。
「山田君、私だ」
『あ、千冬さん！ご無事だったんですね！よかったぁ…』
電話の向こう側から、どこか優しげな感じの女性の安心しきった声が聞こえてくる。
『弟さんは、その…大丈夫でしたか？』
「ああ、怪我については大事なかった…」
『…あまり元気がないように聞こえますけど』
どうやら、千冬が今自分に向けた際の声から、彼女に何かあったことを、通信先の山だという女性は察したようだ。それを悟られまいと、千冬は山田に向かって凛とした声を張る。
「気にしないでくれ。それより、今からＩＳ学園に戻る。おそらく、ＩＳ部隊に代わる戦闘員をうちの生徒から動員させるつもりだろうからな」

怪獣が暴れ出した現場。そこには、ＩＳ部隊の関係者と思われるスーツの調査員たちが、周囲の調査を行っていた。ＩＳを動かすわけではないためか、中には男性の隊員も混ざって任務にあたっていた。
そこを、一人の少女が物陰から隠れた形で訪れていた。長い髪をリボンでポニーテールで結っており、怪獣が暴れ回ったことで荒れ果てた街を見て、苦しそうに顔を歪めていた。
「…奴は、ここには戻っていないか…」
彼女は、ある人物を追っていた。
少し時間を遡ろう。
昼間、ウルトラマンの出現と同時に姿を消した二本角の怪獣だが、実はある秘密があった。
ウルトラマンから逃げるようにその姿が靄のかかった黒い霧のように小さくなりながら消えると、消失地点のすぐ近くのビルの影から、深くて黒いフードを被った少女が姿を見せた。実は、あの怪獣はこの少女が変身していたものだったのだ。どんな芸当かは不明だが、

彼女は紛れもなくあの怪獣の姿に変身して、街を破壊していたのである。
『ウルトラマンゼロ』…あの方の憎むべき敵、か…！」
忌々しげに、巨人の名前を口にした少女だが、この時の彼女はあとで自分に対してわずかな迂闊さを咎めたくなった。
自分が変身を解除したところを、見られたからだ。長いポニーテールの少女に。
「ようやく見つけたぞ……!!」
彼女は竹刀袋から、なんと刀を引っ張り出し、その刀身をフードの少女に向け、問答無用で切りかかった。
フードの処女は舌打ちしながら、ポニーテールの少女が振り回す刀の剣劇を軽快に避けていく。どちらとも少女とは思えないほどに、戦いの心得を持っていた。しかし刀の動きがさらに加速し、フードの少女は避けるのが難しくなっていく。
「仕方ないか…！」
彼女は自ら左手首を突き上げ、振り下ろされた刀の盾にした。普通だったら、正気の沙汰ではない。自ら自分の腕を持って行ってくれというようなものだった。
だが、そうはならなかった。
刀が彼女の腕を切り落とす直前、ガキン!!と金属音が鳴り響き、ポニーテールの少女の刀は受け止められた。
「ＩＳの部分展開か！」
彼女は憎らしげに言った。自分の刀が、フードの少女によって展開されたＩＳの左腕の装甲部分によって防がれていた。
フードの少女は、強引にその状態からポニーテールの少女を刀ごと押し退くと、彼女を見てこのように呟いた。
「その顔…貴様、篠之乃束の妹か」
「ッ！」
フードの少女から、束の名前が出てきたことに、ポニーテールの少女は驚いたのか動きが止まってしまう。その隙を突いて。目に見えないほどのすばしっこい動きでフードの少女は引き上げた。

逃げられた。ポニーテールの少女は歯噛みした。
「今度は逃がさん…！」
昼間狙っていた相手に、逃げられたことを思い返し、手に握っていた竹刀袋をぎゅっと強く握り、『篠之乃箒』はその場を一度後にした。

弾の病室。一夏が去った後、蘭以外の彼の家族もまた彼の訃報を聞いて駆けつけ、そしてこの場で涙した。時期に葬儀の打ち合わせが始まるだろう。
「……」
蘭は、兄の亡骸の傍に椅子を置いて腰かけていた。
「あたし、最低だ…」
彼女の中に、一夏への後悔が募った。
自分と兄を守るための行動でもあった。そう思うと、彼の行いは全否定できることではない。だが彼の行いの結果が兄の死だ。昔から抱いていた好意と相まって、心の中をかき乱していた。その結果が、一夏に対するあの八つ当たりのような怨念の叫び。
超の着く鈍感な人だが、ずっと好きだった一夏。交際して、一緒にデートして楽しい思い出を作りたかった。でも、あんな言葉を自ら口にしたことで、自分は自らのそのチャンスを永遠に失ったことを悟った。兄の命が、もう二度と戻らないことと同じように。
「…お兄。そろそろお母さんたちが来るころだと思うから…ちょっと待っててね」
蘭はそう言って弾の病室を後にした。当然ながら返事はなかった。

家に残された一夏は、まだ抜け殻状態から抜け出なかった。
いつもなら夕飯の支度をしているのだが、この時の彼は何もやる気が起きなかった。
夜の闇で部屋も暗く、何一つ光を差し込まなかった。一夏のこの時の心をそのまま表したかのようだった。

（俺のせいで…弾が……）
蘭のあの呪いに満ちた言葉が頭の中によみがえる。本当に、彼女の言うとおりだったかもしれない。
力を得て、調子に乗った。ＩＳの力を得た自分なら、ドンシャインや千冬のように何でも守れるはずだと。
自分の身体能力は千冬でさえ驚く。そこにＩＳが装備できるとなれば、怖いものなどないに等しいかもしれない。…だが、それはあくまで『相手が人間だったら』の話だ。怪獣にも勝てるだなんてありえなかったのだ。ＩＳはあくまで対人用だ。怪獣との戦いを想定した攻撃力など備えていないはずだ。
「…マジで馬鹿だ…俺」
挙句の果てが親友の死だ。よくニュースで、今の女性を優先する法律ばかりが制定され続けることをいいことに、女尊男卑主義の女たちがあれやこれやと横暴な行いをするニュースを何度も聞く。全てじゃないにせよ、彼女たちがちゃんと罰せられていることを聞くたびに、隔たった思想への嫌悪感を感じていたが……自分も、ＩＳの存在を盾に好き放題する奴らと何も変わりなかったのだ。
何時間もの間、暗闇の中で一夏は己の浅はかさを呪い続けた。

ピンポーン

インターホンが響く。しかし一夏は反応を示さない。屍のようにソファに座り込んだままだ。それでもインターホンは二度も、三度も四度も鳴り響き続ける。
気が付けば１５回も鳴らされ、さすがに一夏も反応を示して玄関に向かう。
「うっさいんだよ！・さっきから！」
玄関の向こうにも聞こえるほどの怒鳴り声を散らしながら、一夏は玄関を開ける。
そこに現れたのは、思いがけない人物だった。
「やっほー!!・久しぶりいっくん!!」

「え…？」
来客の姿を見て、一夏は目を見開く。
そこにいたのは、行方不明になっていたはずの、今の女尊男卑の世界を作った元凶ともいえる女性、篠之乃束だった。
「おぉ、見ない間に中々のイケメンになったんじゃないかな？」
「……なんで…ここに」
「ありゃ、なんか元気なさそうだね。何かあったのかな？」
「…あんたには、興味のない話だろ？友達が、俺のせいで昼間の怪獣騒ぎで死んだって言っても」
そういう人だ、この人は。幼い頃、一夏はこの女性がどんな人間だったのか知っている。自分が興味を抱くに値しないと見なした人間は、たとえどんなに話しかけられても無視を通す。千冬に「返事くらいしないか」とぶっ叩かれるまではそうしていた。それでも彼女は、赤の他人に対してさっさと失せろと言わんばかりのつれない態度ばかりだった。弾のことなんて、絶対に興味を抱かないだろう。一夏の中にそのような確信があった。
「…まぁ、ね。いっくんのお友達については否定できない。正直私は、ちーちゃんといっくん、箒ちゃんたちがいれば他にいらないって今でも思ってる……というのは、昔の話」
「…は？」
聞き違いか？一夏は束の言葉に対して信じられない、と表情を言葉代わりに返事していた。
「あ、信じてないでしょ！これでも束さん、知らない女の子拾って飴ちゃんくらいは分けられるようになったんだよ!?」
「…」
いまいち信用できない、訝しげな一夏に少し悔しげな顔を浮かべる束。
「うぐぐ…まぁ、今はいいや…今からいっくんに話さないといけないことの方が重要だし」
「俺に、話…？」
ずっと行方をくらましていた女性が、いったい何を自分に話すつも

りなのだろう。
疑問に思っていると、さらに驚くことが目の前で起きる。
何もないはずの庭の芝生の上に、突然エレベーターのようなものが、まるでＣＧ映像内で物体が構成されたような形で現れた。
「これは…!?」
「乗って、いっくん。話は、この中じゃないとできないから」

インフィニットウルトラマンジード（４）

千冬は、自分の勤務先であるＩＳ学園へと到着した。
学園は、日本領内にある一つの島をまるごと教育機関として設置されていた。
到着後、彼女は後輩教師である山田真耶共に、校舎内の会議室に到着した。
すでに会議室には、ＩＳ関係の要人たちが集まっていた。当たり前だが、この場に男性は一人もいなかった。
「これは、かのプリュンヒルデの織斑千冬さん。やはりあなた様もこちらに来られたのですね」
入口の傍らにいた女性が、握手と共に千冬を出迎えてくる。
「その呼び名は止めてくれ。あまり好きじゃないんだ」
「失礼しました。ですが、あなたが我々にとって尊敬すべき方であることに変わりありません。同時に…この状況を打開するには必要不可欠な方でもある」
「……引退した私に、もう一度ＩＳに乗れと？」
薄々勘付いていた予想を口にすると、その女性は頷いた。
「ええ、あなたはまだ十分に若い。この学園で聞かせていただいたお仕事ぶりと併せて考えても、ＩＳパイロットとしてもまだ完全にさびているようには思えません」
やはりそうか。彼女たちは自分をもう一度ＩＳパイロットとして味方につけたいと考えていた。当然と言えば当然か。既存のＩＳ部隊が一方的にやられたのだ。ＩＳの無敵伝説を継続させるには、これまでのＩＳパイロットの中でも最強とうたわれ続けている自分の存在なのだろう。要は…安心したいのだ。強力な味方を自分たちに付けることで。
（……）
だからこそ、気が進まなかった。
彼女たちは、依存先を求めているのだ。ＩＳに代わる、絶対的な安心をくれる何かを。

しかし、彼女たちの頼みを無碍にできない自分もいた。たった一人の家族である弟を、この街を守らなければならない立場にあるのだから。

すると、会議長であるＩＳ委員会の議長が、手を叩いて出席者の注目を集めさせた。

「織斑女史も揃いました。それらについても含め、今から行う会議で話をするとしましょう。これからのＩＳ部隊、そして昼に出現した怪獣と巨人のことについてもね」

束と予想外の再会を果たした一夏は、彼女が出現させた謎のエレベーターによって地下に向かっていた。

「ようこそ、束さんの秘密基地へ！」

到着と同時に、束からの来訪者へのあいさつが飛ぶ。

ＳＦ映画の中でしか見られないような未来的すぎる、円形の様式のフロアに、束の私物と思われる人形やらドンシャイングッズやら、散らかったコードなど、歩きにくそうな状態だ。だがそれでも、この未来的なフロアの光景に一夏は目を奪われていた。

っていうか、束さんもドンシャイン見てたのか…。

「といってもこれ、束さんが作った基地じゃないんだけどね」

「え？俺、てっきりそうだと思ってたのに…」

「正確には、クーちゃんと一緒に奪ったの」

「クーちゃん？」

一夏は目を丸くする。もしや、この自由人過ぎる束と行動を共にしている人がいるのか。

「私の事です。織斑一夏様」

すると、自らがそうであるというように、部屋の奥の扉から銀髪の少女が姿を見せた。

「初めまして、私はクロエ。クロエ・クロニクルと申します」

「ここに住まわせてから、束さんの家事手伝いをやってもらってるんだ。ちょっと不器用さんだけどね」

「……」

本当に意外だ。束が本当に、誰かを旅の道連れにしていたとは。本当にこの人の、人を見る判断基準がわからない。だから疎まれもしたのだろう。平気で白騎士事件とか起こすし、今だってこの基地を奪ったとか…

「って、そういえば束さん。この基地ってなんなんです？誰かから奪ったとか、なんか穏やかじゃないことまたやらかしてるみたいだけど…」

一夏がそう尋ねると、束は部屋の隅の棚に置いてあったテレビをつける。

ちょうど、ニュースキャスターが昼間の事件について、ウルトラマンと怪獣の戦いの映像が取り上げられてた。

『ニュースをお伝えします。今日の午前９時ごろ、市街地にて５０ｍと超える巨大生物が出現し、街が混乱に陥るという異例の事態が発生しました。この生物に対しＩＳ部隊が対応しましたが…ＩＳ部隊が逆に反撃を受け、撤退を余儀なくされたとのことです』

無理もないだろう、ＩＳの力をもってしても勝てなかった化け物と、それにただ一人対抗することができた巨人『ウルトラマン』。どちらも幻の事件であるクライシス・インパクトの中にしか存在しないはずと断じられていたのに、それが現実に現れたのだ。取り上げられない方がおかしい。

さらにニュースでは、これに関して新たな続報があった。

『ＩＳ部隊の敗北を聞き、各地では不安の声が上がっています』

『ＩＳが勝てないなんて…』

『これから県外へ家族と疎開しようと思います。ここにいると、いつ怪獣に襲われるかわからないので』

『ＩＳが負けるなんてありえないわ！あれは篠之乃束様が私たちに授けてくれた神の…』

と、最後にコメントしていた女性の言葉を遮るように、束はチャンネルを変えた。

「勘違いも甚だしいね。束さんは神様じゃないってのに。所詮はゲームでいうモブってところかな」

不愉快そうに束はテレビを睨んでいた。よほど最後の女性のコメントが気に食わなかったようだ。ＩＳの出現で調子に乗った女尊男卑の女性たちの中には、束の存在を神格化するというカルト的な集団までいる。束はそんな人間を特に嫌っていた。

「ねぇ、いっくん。クライシス・インパクトのことは知ってるよね？」

束は一夏の方を振り返り、いつになく神妙な顔つきで彼に尋ねた。

「あ、はい…１８年前に、ウルトラマンベリアルが光の国と対立して地球が滅亡しかけたっていう…やっぱり本当のことだったんだよな」

「うん、私もその現場にちょうどいたからね。ウルトラマンや怪獣の存在も知っていたよ」

「!?」

束の口から語られた事実に、一夏は言葉を失った。束が、クライシス・インパクトの現場にいただって!?

「あの時、あるお髭のウルトラマンが、自分の持つ力のすべてを使って、この宇宙を修復したの。だからクライシス・インパクトの痕跡は見当たらなかった。

まだ6歳だったけど、束さんは今でもはっきりと覚えてるよ。あの時の光景…」

それは嘘偽りのない告白。今でも彼女は、頭の中で鮮明に当時の記憶をよく思い出す。

火の海に包まれた都市の真ん中に立つ、あの悪魔の巨人の高笑いも…

あの光景は、束に今でも恐怖を抱かせた。

「だから、またベリアルや怪獣が襲ってきても大丈夫なように、実家の道場の跡継ぎを放棄して、ＩＳを設計・開発したんだ。みんなを守るための、剣と盾になれるようにって。…結局、力不足だったんだけどね。自分でも天才って思ってたけど、束さんもまだまだ未熟でしたってことかな」

「そうだったんですか…」

彼女の実家は、長い歴史を持つ伝統ある剣道の道場『篠之乃道場』だった。

まさか、ＩＳの開発のきっかけがクライシス・インパクトにあったとは。これを世間に知られたらかなりの衝撃ものだ。
「でもね、知っての通りクライシス・インパクトは幻の事件扱いになってるでしょ？だから、束さんがどれだけあの事件が本当のことだって言っても…誰も信じてくれなかった。学会の人たちも、お父さんたちも……信じてくれたのは、ちーちゃんと、いっくんのお母さんだけ。それ以来、ほとんどの人のこと信じられなくなったちゃった」
束の中には、クライシス・インパクトが事実だという確固たる記憶があった。だが、自分が確かだと考えていることを世界レベルで、それも肉親からも信じてもらえない。それは耐えがたい苦痛なのだろう。
彼女が極端に人を避けるようになった理由を、一夏は理解した。
だが、もう一つ気になることがある。束は、自分と千冬の母について触れてきた。
「じゃあ束さんは、俺たちの母さんと会ったことがあったのか？」
「うん。元々ちーちゃんと私の出会いって、両親が知人同士だったから。いっくんたちのお母さんは、もともと科学者だったんだよ。束さんが科学の道に行けたのも、その人のおかげ。つまり、恩師ってことかな」
一体どれだけ驚かせたら気が済むのかと言いたくなる。まさか母とも知り合いで、束が剣道の名門でもあった実家の跡継ぎを蹴って科学者になったきっかけも母だったとは。
でも、待てよ…だとしたら…
「俺たちの両親が……蒸発した理由も？」
千冬との間では決して口にしなかったその質問を束に向ける一夏。
「……」
しかし束は、それをためらうかのように一夏から視線を逸らして口を閉ざしていた。こんな束を見るのは、僅かとはいえ子供のころの彼女との記憶を含めても初めてだ。
「束さん。何とか言ってください！俺、なんでか親といたときの記憶がないんです。でも束さんなら知ってるん…」

「お二人とも、これを！」
その時だった。二人が話していている間に展開した電子モニターから、外の様子を眺めていたクロエが、二人に向けて声をかけてきた。一夏と束は、咄嗟に彼女の方を見やる。
クロエは二人が視線をこちらに向けると同時に、二人が見えるように、さらに大型電子モニターを出現させる。
そこには、昼間に町を蹂躙した、あの二本角の怪獣の姿が映されていた。

怪獣が再出現する少し前…
ビルの屋上に、あのフードの少女が姿を見せていた。
『こちらの調べだと、ウルトラマンゼロは次の戦闘に必要なエネルギーが戻っていないようだ。奴の切り札でもある腕輪の破損も確認できている。どうも、「あの戦い」での後遺症が今も強く残っているようだ。
この隙になんとしても任務を成功させろ』
「了解」
耳に付けた通信機から指令を受け、少女はその手に黒いカプセルを取り出す。カプセルには、昼間自分が変身していた怪獣と同じ特徴を持った怪獣が、それぞれ絵柄として刻まれていた。
「冷却完了…今度こそ手に入れてやるぞ。『リトルスター』を」
彼女は、二つのカプセルのスイッチをスライドさせ、次に取り出した黒い基盤の穴にセットすると、さらにもう一つ赤い認証機械のようなアイテムを取り出して、黒い基盤にスライドさせる。
すると、妖しげな音声が赤いアイテムから再生され、少女に変化をもたらした。
【フュージョンライズ！】

あの黒い悪魔の巨人…ウルトラマンベリアルへと。

【ゴモラ＋レッドキング＋ウルトラマンベリアル！】

黒い巨人となった彼女は、二体の怪獣をその口の中に吸い込んでいき、そしてその姿は、昼間に出現した怪獣の者へと変貌した。

【スカルゴモラ！】

怪獣スカルゴモラの出現と同時に、再び町中に警報が鳴り響いた。

「くそ…変身する前に見つけられなかったか…！」

箒はこの時、弾たちが留まっている病院の傍にいた。病院内でも、怪獣出現と同時に入院者たちがパニックに陥っていた。しかもそれだけじゃない。あの怪獣は、こちらにまっすぐ向かってきているではないか。

「か、怪獣がこっちに来てるぞ！」

出現しただけでも大事なのに、こちらに向かってくるなんて冗談じゃない。院内の人たちは、動ける人間はすぐ外に出始める者や、院内で動けない患者がないか急いで確かめに行く者と二つに分かれた。

箒はあの怪獣がどうしてこちらに向かってきているのか…検討がついていた。

「まさか、この院内の患者に『リトルスター』が!?」

何かに気が付いたのか、彼女はすぐに病院内へ駆け込んだ。

一方、千冬のいるＩＳ学園でもスカルゴモラの出現の情報がすぐに届いた。

校舎の窓から見える街に、再び火の手が上がっているのが、遠くから見ている千冬たちにも見えた。

「残存している隊員を現場に派遣し、様子を見させて！」

「了解！」

すぐに現場に向かって、ＩＳ部隊の残った隊員たちがＩＳを展開して派遣された。しかしできることといえば、怪獣の手から現地の人たちを避難させるか、怪獣の様子をモニター通信でこちらに配信することだけだった。

「まだ新部隊の編制に入ったばかりだというのに…」

こんなところでもたついたら、街の人たちは…一夏が…！
だが、今の自分の立場を放棄すれば、ここにいる彼女たちにも迷惑をかけることになってしまう。板挟みにあう千冬の頭に、浮かび上がるものがあった。
現役引退と同時に封印していた…自分の愛機だったＩＳが。

「怪獣がまた…！」
一夏は大型電子モニターに映る怪獣を見て戦慄する。
しかし、今度は誰も怪獣に対して抵抗ができないという状況だった。ＩＳ部隊は壊滅的打撃を受け、あまりに早すぎた再出現に再編成が追いついていない。そもそも歯が立たない以上、現場での避難誘導がやっとだろう。
「けど、怪獣が出たのなら、あのウルトラマンだって…！」
昼間もスカルゴモラと共に現れたあのウルトラマン…『ゼロ』がまだ最後の砦として存在しているはずだ。
「…たぶん、ゼロはこれないよ」
だが、束はゼロが来ないと断じた。
「なんで!?」
「束さん、いっくんが来るまで確認していたけど、どうもウルトラマンゼロはベリアルとの戦いのダメージが残ってたみたいなんだ。ウルトラマンは万全の状態でも3分間しか地上にいられないし、今は当てにできないと思う」
「そんな…でも、このままじゃ街の人たちは!?千冬姉や蘭たちは!?」
何一つ、勝つ方法どころか抵抗する術さえもない。今度こそあの怪獣の餌食にされてしまう。そんなこと…!!
焦る一夏に、さらに束は疑問を募らせるような質問を問いかけてきた。
「いっくんは、まだヒーローになってみたいって思う？」
「え？」
こんな時に何を尋ねてくるんだ。一夏は意味がわからずに束を見

る。
「もし、自分にあの怪獣を倒せる力があるなら、戦いたい？」
「……はい」
「どんなに罵られるようなことがあっても？」
連続するそれらの問いかけに答えている場合なのかそもそも疑問に思ったが、一夏は頷いた。
「俺、ＩＳを動かしたとき、舞い上がってました。千冬姉や、子供のころにあこがれたドンシャインみたいに、誰かを守れる人間になれたんだって。でも結局、俺は怪獣を怒らせただけで…それで友達が死んでそいつの妹から恨み言言われたんです。
それでも、俺が弾への償いも含めて、誰かを守ることができるっていうなら…俺は、戦いたい!!」
もし本当にその力があって、あの怪獣を倒すことができても、弾が二度と帰ってこないことはわかるし、蘭がもう一度自分と向き合ってくれる保証なんてない。でも自分にはまだ、千冬という大切な家族がいる。たとえ永遠に和解できなくても、蘭にも兄を失った悲しみと自分への恨みだけ抱いて死なせたいとも思わない。
だから、願うなら戦いたい。今度こそ…大切な人たちを守れるヒーローになりたい。
一夏の強い願いを聞いて、束は笑みを浮かべてクロエに視線を向けた。
「クーちゃん」
「はい」
クロエは電子基板を出現させて、電子スイッチをタッチすると、基地の中央にあるテーブルの上にあるアイテムが出現する。
それは……あのフードの少女も使用していた、あの赤い認証機械と、白く透明な二つのカプセルだった。
「これは？」
「『ウルトラカプセル』と『ライザー』。昔、ウルトラマンヒカリがベリアルに対抗するために開発した、ウルトラマン専用のパワーアップアイテムだよ」

「ウルトラマンが作った!?」
　驚く一夏に、束は頷く。
「これを使うとね、ウルトラマンたちはそのカプセルに描かれているウルトラマンの能力に合わせて、自分の能力と姿を変異させられるの」
　カプセルには、確かにウルトラマンの絵がえがかれていた。一つは、至ってシンプルかつヒロイックな姿をした銀色のウルトラマン。だがもう一つは…一夏も息をのませるものだった。
「ベリアルのカプセル…!」
　クライシス・インパクトを引き起こした、ウルトラマンベリアルの絵が描かれたカプセルだった。
「今使えるのは、その初代ウルトラマンと、ベリアルのカプセルだけだよ。大丈夫、いっくんの体には害はないはずだから」
　はずって…なんだか束にしてはあまり自信を感じさせない言い方だ。
「もしかして、これを俺が使うんですか？でも俺…」
　ウルトラマンじゃない。そう否定するつもりだった。なにせこのライザーというアイテムは、ウルトラマン専用のアイテムだと束自身が言っていた。
　が、その前に束が言い放った。
「うぅん。実はね、いっくんには……ウルトラマンの血が流れているんだよ」
「……!?」
　俺に……ウルトラマンの血が？
「…すみません、冗談じゃないですよね？」
「じゃあどうしていっくんは、今まで体育の成績がずば抜けていたのかな？剣道でも、少なくとも束さんが見てる間も、格上の人相手にも無敗だった。
　普通のウルトラマンのパワーと比べると強くはないけど、それでも人間以上の力を出せていたのがその証拠だよ」
　耳を疑ったが、束のその言葉で息を詰まらせた。

彼女の言う通りなら、納得ができた。この身に宿る異常な身体能力の理由が、ウルトラマンの血を引いているというのなら…。
「それに、こんな時に冗談なんて言える？」
改めて束は、大型モニターの方に視線を向け、一夏も流されるようにそちらを見た。スカルゴモラは、遠く離れているとはいえ、弾たちのいる病院にまっすぐ向かっている。道中に見える建物や車を容赦なく踏み潰し続け、それに伴う火災など無視し続けながら。
「時間がないよいっくん！覚悟があるなら、すぐに外に出て変身して！やり方はそっちで教えるから！」
束はエレベーターを出現させる。状況が状況なだけに、一夏も慌ただしくその中へ駆け込んだ。
彼を乗せてエレベーターが地上へ向かうのを確認したところで、クロエは口を開いた。
「よろしいのですか、束様？」
「何が？」
「あなたは、千冬様と同じように、一夏様を運命から遠ざけたかったはずでは？
この秘密基地を奴らから奪ったのも、敵の思惑から一夏様を巻き込むことなく我々だけで事を解決するためだったはずです。
彼がウルトラマンになることは、敵の計画の内ですから」
おそらくこれを一夏が聞けばまた驚くだろう。だが、それを一夏に伝えずにいた。
「…ＩＳでどうにかしたかったけど、もう間に合わないって気づいたから。それに…薄々感じていたんだ。こうなることは、きっと運命だったって」
そのように言ったときの束は、どこか苦しげだった。
「でも、私はただ運命に流される気はないよ。それはあいつらに自分から負けを認めたってことになる。
私はあいつらの思惑に乗りつつも、最後にいっくんたちと一緒に、運命に勝ってみせる」

病院にて箒は、逃げていく患者を目で追いながら、あるものを探していた。
「誰だ、一体誰の身にリトルスターが…？」
しかし雪崩のように外へ出て避難していく患者や看護師たちの中に、探している対象の人は見あたらない。そんなとき、カウンターに看護師の声が耳に入る。
「五反田さんの避難は!?」
「死んだ人間なんて放っておきなさいよ！」
「何言ってるの！遺族から後で酷いクレーム来るわよ！その遺族もご一緒だっていうのに！」
どうもまだ残っている人がいるようだ。五階へ急ぐ看護師たち。
すると、その五反田一家がエレベーターの方から現れた。証拠に蘭と、目覚めない弾を背負っている彼の父、同行していた母と祖父も一緒だ。
「よかった！すぐに避難してください！」
看護師たちは一家に急ぐように伝え、彼らを連れて避難を開始した。どうやら彼らで最後らしい。箒も着いていく形で病院から外に出る。
怪獣の方を見ると、奴の行動にわずかな変化を見受けた。まっすぐ病院へと向かっていたのが、今度は病院から避難していた人たちの方へ進路を変えたのだ。
「やはり、リトルスターはあそこの誰かにあるのか！」
引き続き、箒は病院からの避難者のもとへ急ごうとした、その時だった。
数年ぶりに、幼馴染の顔を見ることになるとは、この時の彼女は予想もしなかった。
「…一夏？」
最後に会ったのは、小４…篠之乃束の関係者という理由で、彼女と束…篠之乃一家の全員が政府から発令された『重要人物保護プログラム』で一人ずつ別離する羽目になった。そのため道場に通い出してか

らずっと一緒だった一夏や家族とも離れ離れになった。
その一夏が、なぜ…突然現れたエレベーターのようなものの中から姿を現したのだ。

地上、怪獣が狙う病院のすぐ脇に出た一夏は、町の様子を確認した。夜だというのに、町に上がっている炎のせいで街が明るい。
スカルゴモラは病院へとまっすぐ向かっていた、が…病院を出た避難者の方へ進路を変えていた。耳を澄ませると、遠くから逃げ惑う人たちの声が聞こえる。
「やばい…ここで食い止めないと！」
『いっくん、聞こえる!?もし聞こえるなら、ライザーと一緒に持たせた装填ナックルを触って返事して！』
束の声が聞こえる。言われてみて、一夏はライザーとカプセル以外に持った、黒い基盤に触れる。
「聞こえます、束さん！これ通信機にもなってたのか…」
『そういうこと。でも触れてない時は、こっちからの声は聞こえるけど、そっちからの声は聞こえないから気を付けて。
じゃあ、今から本来の使い方を説明するね』
「はい！」
決して聞き逃すまいと、束の声に一夏は耳を澄ませた。
『まず、さっきの二つのカプセルのスイッチをスライドして、装填ナックルに装填して』
一夏は第1に、初代ウルトラマンとベリアルのカプセルを二つ共取り出す。
『装填したら、ライザーのスイッチを押して、その先端を装填ナックルにスライドさせてカプセルの中にある力を認証させるの。後はもう一度ライザーのスイッチを押せば大丈夫。普通のウルトラマンたちより光の力が弱いいっくんでも、カプセルに秘められたウルトラマンたちの力を借りることで変身できるよ』
束はさっき、自分の中にあるウルトラマンの力は弱いと言っていた

が、なるほど、光の力をお借りすれば問題ないということか。
ここまでわかれば、もう不安はない。後は変身して…今度こそ皆を守って見せる。ＩＳに乗ったことで調子に乗って立ち向かった昼間のような失敗はもうしない。
『じゃあ最後。変身した後の君の…ウルトラマンとしての名前を決めて。それでライザーは反応するはずだよ！』
「わかりました！束さん、ありがとう！」
『頑張って、いっくん…！』
束の祈るような声を最後に、彼女からの通信は終わった。
一夏は二つのウルトラカプセルを見る。
自分の中にある、普通よりも弱い形だが、それでも人間以上の力の恩恵を与えてくれたウルトラマンの血。なぜこれが自分の中にあるのか…束は自分よりも自分のことを知っているようだ。
それに……初代ウルトラマンの方はともかく、片方は…クライシス・インパクトを引き起こしたあの悪のウルトラマン『ベリアル』の力を秘めているものだ。悪の力を行使する…考えてみると不安だ。
だが…ためらっている暇はない！
「ジーッとしてても…ドーにもならないからな!!」
今自分がすべきことは、皆を守るためにウルトラマンとなって戦うことだ!!
「〈融合（Ｙｏｕ Ｇｏ）〉!!」
一夏は第１に、初代ウルトラマンのカプセルを機動する。すると、カプセルから漏れ出た光が、彼の隣で初代ウルトラマンの姿となって現れる。
「〈相合（Ｉ Ｇｏ）〉!!」
初代ウルトラマンのカプセルを装填し、続いてベリアルのカプセルを起動する。今度はさっきの初代ウルトラマンのように、カプセルから出てきた黒いエネルギーがウルトラマンベリアルとなって反対側に降り立つ。
「Ｈｅｒｅ　Ｗｅ　Ｇｏ!!」
一夏はベリアルのカプセルも装填し、ライザーのスイッチを、かつ

て憧れたドンシャインの決め台詞として覚えていた言葉と共に押す。
そして装填ナックルをスライド、二つの力をライザーが認証した。
【フュージョンライズ！】

――――――決めるぜ、覚悟!!

友の死という自分の過ちも、この先の過酷な戦いに対する覚悟を決め、一夏は再びライザーのスイッチを胸の前で押し……
自分のウルトラマンとしての名前を高らかに叫んだ。

「ジイィィィィーーーーードッ!!!!」

一夏の姿は、彼の姿をよく確認しきれないほどのまばゆい光に覆われ、ウルトラマンとしての姿に変異する。
【ウルトラマン】＋【ウルトラマンベリアル】
続いて、隣に立っていた初代ウルトラマンとベリアルの姿が、一夏の体と重なり、新たな変化をもたらした。

【ウルトラマンジード・プリミティブ！】

そして…光と闇の渦に包まれた一夏の体は……巨人『ウルトラマンジード』へと変身を遂げた。

「シャァ！」

その様は、実は一夏の事が気になって密かに隠れて見ていた箒に見られていた。
「な…!?」
ただでさえ予想外にも幼馴染の顔を見ただけでなくまさか人ならざる者へ変身を遂げるなど予測などできるはずもなかった。巨人への変身を遂げた一夏の姿を、箒はただ驚愕のあまり呆然と硬直してい

た。

千冬のいる、ＩＳ学園の会議室は混乱していた。新たなＩＳ部隊の編制どころか、メンバーの選抜もロクにできていない状況。対抗策がまるでない状況だった。そんな時にまたしても、ＩＳ部隊を壊滅させたあの怪獣が現れてしまった。

「こんな時に…!!」

怪獣スカルゴモラは街を壊しながら、どこかへと向かっていく。

「ＩＳ部隊の残存している隊員は？」

「…戦闘可能な者は５名にも満ちてません。午前中の戦闘ですでに半数以上が負傷、死亡しています。負傷兵を含めても、応援に向かわせるだけの余裕もありません」

千冬からの問いに、出席していたＩＳ部隊の隊長代理の女性が、とても十分なん戦力じゃないことを報告する。

千冬は歯噛みする。こちらから満足に反撃に出ることさえもできない。

（…行くしか、無いのか）

千冬は、引退と同時に封印していた自分のＩＳのことを思い出す。一夏や町を守るためにも、自ら出向くべきかと考え始めた…その時だった。

街の上空に、花火のように一つの光が打ち上げられ、巨人の姿となって地上に降り立った。

「あれは…」

遠すぎて、突然現れた巨人の姿がよく見えない。

「ＩＳ部隊、聞こえるか!?そちらの様子を映してくれ！こちらでも様子を見たい！」

すぐに千冬が現場にいるＩＳ部隊隊長代理の女性に通信を入れ、会議室のスクリーンも下ろす。現地の隊長代理の女性のＩＳのモニターを通して、スクリーンに巨人の姿が映しだされた。

途端に、彼女たちの顔が蒼白になった。

「あ、ああ……そんな…」
震えあがる彼女を見て、千冬も、そして会議に参加していた他の面々も、映像を確認して戦慄、恐怖した。
銀色の体の上に刻まれた、禍々しい赤と黒の模様、牙をむき出したような口、そして……鋭く吊り上った、青い目。
その映像内の巨人……一夏の化身であるウルトラマンジードの姿を見た千冬は、ある名前を口にした。
「ベリ…アル…!?」

インフィニットウルトラマンジード（5）

「な、なんだあれ!?」
　避難中の五反田一家や、病院から避難した人々もまた、ジードの姿を見て、恐怖・戦慄する者が続出していた。
「ベリアルだ…ウルトラマンベリアルだ!!」
「嘘でしょ…クライシス・インパクトが本当だったってこと!?」
「に、逃げろ!!早く!!」
　ただでさえ死の恐怖に追われ続けている彼らに、今の一夏の姿は刺激を与えた。完全にジードをベリアルと同一視した一部の避難者にパニックを引き起こした。

　その禍々しい姿を、秘密基地の大型モニターから束たちも確認していた。
「フュージョンライズの成功を確認しました。でも、これは…」
　クロエも、物静かでリアクションが薄かったはずが、わずかに驚きを露わにしていた。
「予想はしていたけど、いざ見てみると…ね」
　子供の頃、クライシス・インパクトで見た……悪魔の巨人ウルトラマンベリアルによく似ていたジードを見た時の束も、その表情があまり晴れやかなものと言えなかった。

　スカルゴモラに変身していたあのフードの少女も、怪獣の体内の奇妙な空間からジードとなった一夏の姿を見ていた。
　彼女のジードを見る目に、驚きはなかった。
「…やはり、気に入らない」
　だが…なぜだろうか。彼女の目に宿る感情には、確かなものがあった。
　目の前の巨人に対する、猛烈な殺意と憎しみが。
　忌々しげに彼女は唇を噛みしめ、ジードに向かって吠えた。
「貴様ごときが…あのお方と同じ力を使うなど…!!」

変身を遂げた一夏は、自分の両手を見やる。確かに人間だった頃と異なり、肌の色が銀色だ。周囲の建物も、変身前と異なり小さく見える。
（変身できたのか…！）
束に導かれるまま変身していたが、まさか本当に変身できたとは。彼女の言うとおり、自分がウルトラマンだということになる。
…だとしたら、千冬姉も？
そんな予想がよぎったところで、スカルゴモラの唸り声が聞こえた。
奴がこちらに来ている。やるしかない！
「ウウウオオオオオオ!!」
助走をつけ、ジードは高く飛び上がった。
（うおおおおおお!?高!?）
気付くと、ＩＳで飛行した時以上に飛び上がった。予想以上の今のジャンプ力に、逆に自分が驚いてしまった。
なんとか怪獣の目の前に着地できたが、隙が大きすぎた。スカルゴモラの角による押し出しによって、ジードは倒れて後ろのデパートを、まるで砂の城のように押しつぶしてしまった。
「く…ディア!!」
すぐに立ち上がり、ジードはスカルゴモラに拳を繰り出す。だがその一撃もスカルゴモラに交わされ、顔面を殴られて突き飛ばされる。
もう一度立ち上がろうとするジードに、スカルゴモラは鋭い牙をむき出して迫ってくる。
させるか！ジードは飛び上がり、両足でスカルゴモラを蹴り出す。手ごたえを感じながら、落下してすぐに立ち上がろうとすると、スカルゴモラの踏みつけが繰り出された。すぐに横に避け、ジードはさらにもう一撃胸元に蹴りを叩き込む。少し押し出したところで、少し怯んでる間に、ジードは後ろへ回りこんで尾をつかもうとする。だがその前に、スカルゴモラの尾が彼のこめかみを打ってきてそれは叶わなかった。

耳の近くに受けた鋭い痛みで悶えるジードに、スカルゴモラの角による突き攻撃が襲いかかった。
「キシャアアアア!!」
「グアアッ!!」

スカルゴモラの中にある空間の中で、フードの少女はほくそ笑んだ。
「ふん、やはり素人だな」
一見一夏よりも背が低く幼い印象の彼女だが、昔から戦い慣れているようだった。それに引き替え、ウルトラマンになったばかりの一夏は、昼間にＩＳを起動して刃向ってきたときと同じように、素人丸出しの動きだった。こいつは自分よりも格下だ。
（全く持って理解できんな…やはり、こんなやつよりも、私の方があの方にふさわし…！）
『調子に乗るな、「Ｍ」』
優越感に浸るが、そんな彼女に水を差すように、どこからか声が聞こえてきた。
『お前の目的はそいつを殺すことではない。まだそいつには利用価値がある』
人がいい気分に浸っている時に…悪態をつきたくなったが、かといって彼女も『自分に与えられた任務』を放棄するほど堕落していない。
「…だが、こいつを追い詰めることも、目的を達するために必要なのだろ？もっと痛めつけても問題ないはずだ」
『…やりすぎるなよ』
その一言だけ残して、男の声は少女に届かなくなった。

ジードの動きが一時的に鈍ったところで、スカルゴモラが向かってきた。ジードは同じように取っ組み合う形で踏ん張ろうとする。すさまじい力だ。横綱力士に力いっぱい押し出されているときの感覚とはこのようなものなのだろうか。

「くっそ…負けるか！俺は…ウルトラマンなんだ!!」
でも、ウルトラマンジード＝織斑一夏は意地を見せた。スカルゴモラを力いっぱい押し返していく。さらに力を強めて押し出し、少し距離が空いたところで、彼は勢いをつけたタックルを繰り出す。続けて奴の頭上から鋭いチョップを叩き込んだ。
ザシュー！と剣で切り裂いたような音が聞こえた。
「ガアアアア!!?」
怪獣がさっきまでと比べて苦しんでいる。切り傷が奴の顔に刻まれており、見事にクリーンヒットしていたようだ。
（うし！行ける！）
自分の右手を軽く握ったり広げたりして調子を確かめながら、ジードはもう一度スカルゴモラへと向かっていった。
「デヤ!!」
スカルゴモラに飛びかかった一夏は、その背中に乗り、左腕で首元を締め上げて右腕から拳を振りかざして手刀を叩き込みまくった。

ジードが両手を広げたり閉じたりする仕草。
それを見て、千冬は目を見開く。あの仕種には見覚えがあった。弟が篠之乃道場で剣道をやっていた頃、自分の調子を確かめるときにやっていた。そうしているときに限ってよく失敗を起こしていたものだが…
…まさか。
自分にとって、現実となるのを避けたかった予想が浮かび上がった。
あのウルトラマンは、まさか…
「一夏、なのか…？」

箒もまた、ジードとなった一夏の戦いから目を離せずにいた。
（一夏…）
荒削りながらも、それでも意地を見せて戦うジードの姿は、『あの時』を思い出させていた。

箒は姉と共に実家の道場で暮らしていた頃、父から剣道の手ほどきを幼い頃から受けてきた。そのため剣道の腕前は子供ながら見事なものだったが、同年代の男子よりも強くなった半面、『男女』だのと揶揄されてしまうようになった。表面上は気にしないままでいようと思っていた彼女だが、やはり年頃の女の子にとってそれは傷つきやすい言葉だった。リボンをつけるという、女の子ならだれでもやりそうなことにさえ口出しして嘲笑う。男子から毎日そのようにからかわれては屈辱を味わう箒は堪え続けた。だがいつまでも耐えきれるほど器が大きくないことは自分がよくわかっていた。ついに耐えきれなくなり、父から絶対にしてはならないと教え込まれていたにもかかわらず、竹刀で男子たちを殴り返してやろうと思った時だった。『あの時』、自分が竹刀で彼らをぶつ前に、一夏が彼らを殴ったのは。

『お前ら恥ずかしくねぇのかよ!・たった一人の女の子に向かってよってたかってさ!』

箒は、一夏が自分を庇ったことに驚かされた。一夏の事は、最初は好きじゃなかった。自分よりも強かったくせに、力を振るうことを避けている印象だった。

しかし、知っての通り一夏の身体能力は、幼少期だから今より劣っていたとはいえ、普通の子供と比べたらオーバー過ぎた。彼に殴られたいじめっ子たちは酷い怪我を負い、保護者たちに千冬が平謝りする羽目になった。当然一夏も千冬から叱り飛ばされた。

箒は理解した。彼が暴力をさせる理由…ほんの少し手を出しただけで相手を必要以上に傷つけるからだ。剣道の試合でも、相手を必要以上に傷つけずに済ませようと気を遣い続けていたのだ。

なのに、なぜあんなことをしたのか、稽古の休憩中にそれを尋ねると…

『単純に許せなかったからだよ。女の子は悪者じゃない限りは守ってやらないとな』

今もそうなのだろう。ジードが怪獣を、街の人たちから必死に遠ざけようとしつつ戦っていることに気付いた箒は、懐かしさを覚えると同時に、心が温かくなるような感じがした。

（お前は、変わらないのだな。どんな姿になっても…等しく誰かを守ろうとする）
箒も、最初はジードとなった一夏に対して恐怖を抱いた。なにせ、幻の事件と言われたクライシス・インパクトの首謀者であるベリアルと瓜二つの姿になったのだから。
だが、彼が戦っているのを見ている内に、確信したのだ。
どんな姿をしていても彼は……自分が恋した少年だということを。

スカルゴモラの中、フードの少女は顔を抑えていた。見ると、彼女の額から血が流れ落ちている。現実世界のスカルゴモラの頭に、ジードが刻み込んだ切り傷と同じ個所だった。スカルゴモラが傷つけば、中にいる彼女もまた同じようにダメージを受け、傷を受ける。
自分の頭から流れ落ちる血を見て、少女は目を見開いた後、フードの下に隠れたその顔を憤怒で歪めた。
格下だと思っていた奴に、自分の顔に傷を入れられた屈辱で、果てしない激情が湧き上がっていた。
「おのれ……おのれおのれおのれえええええええ!!
織斑一夏あああああああああああああ!!!」

彼女の憎悪に呼応するように、怒り狂ったスカルゴモラがジードの両肩を捕まえた。
しまった！ジードの中に危機感が強く芽生えたが、スカルゴモラの力強い締め付けのせいで逃げられない。
逃げられないジードの肩に、スカルゴモラは彼の肩にその鋭い牙をくいこませた。剣のように、その鋭い牙は食い込み、ジードに激痛を与えた。
「グアアアッ!!」
一度口からジードを離すと、スカルゴモラは次なる攻撃を仕掛ける。足に炎のようなオーラを纏い、その足でアスファルトの道路を踏みつける。すると、足の周囲の瓦礫や道路の破片が一つ一つ炎に包まれた大きなつぶてとなる。それはジードに向かって火炎弾となって

飛ばされる。
　ジードはとっさに自分の腕を両腕にクロスして防ごうと図るが、肩に受けた噛みつきの傷のせいで、すぐに防御を崩されてしまった。もろに火炎弾を連続して受け、大きく怯んだジード。そんな彼にスカルゴモラはさらに角に邪悪なエネルギーをほとばしらせた突進攻撃をお見舞いした。
「ウワアアアアアア!!」
　ジードは避ける間もなく、大きく吹っ飛ばされ、近くの海辺に落下した。

　フォン、フォン、フォン…

　ジードの胸のランプが、青い輝きから赤い点滅へと変わった。
「なんだ…?胸のこれ、ピコピコ言ってる…」
　よろめきながらも立ち上り、変身したと同時に自分の胸につけられていたランプを見下ろす。
　すると、秘密基地にいる束から通信が入った。
『気をつけて!
　いっくんがウルトラマンでいられるのは約１８０秒だけ!赤くなったらもう1分にも満たないよ!そのカラータイマーが消えて元の姿に戻ったら、ウルトラカプセルの冷却のために２０時間必要だからしばらく再変身できない!』
　一夏は絶句する。たった3分しかウルトラマンになれない上に、次の変身に丸一日も時間が必要なのか!?
　しかも、あの怪獣はまた病院からの避難者のもとへ向かい始めている。
「ヤバい!今ここで仕留めないと!何か手はないのか束さん!?」
『落ち着いて!大丈夫、ウルトラマンには一発逆転の必殺技があるの!』
「必殺技?そんなの…?」
　そんな都合のいいものがあったというのか。

…と、一夏の頭の中に、あるイメージが浮かび上がった。
ジードが、両手を十字に組んで、右手から光線を放つ姿が。
「…いや、閃いた！」
ジードはすぐに飛び立ち、スカルゴモラの進行先の真正面に降り立った。
スカルゴモラは、赤黒いオーラを全身からほとばしらせ、角にそれを集めていく。
ジードも頭に浮かんだ必殺技を発動しようと、下ろした両腕をクロスさせる。
「ヌウウウウウ……ウオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」
すると、彼の全身から沸き上がる膨大なエネルギーが、赤黒い稲妻となって漏れだし、両腕を頭上、そして両側に広げられるうちに、両手の平に集まっていく。ジードの感情に呼応して、彼の青く鋭い目も怪しくまばゆい光を放っていた。端から見ると、とても人を守るための戦士というには禍々しさに溢れていた。
「グルアアアアア！」
先にエネルギーをチャージしきり必殺の光線を放ってきたのはスカルゴモラだった。角に溜めたエネルギーを口から放った〈スカル振動波〉が、周囲の建物を破壊しながら、ジードに向かっていく。
ジードもチャージを完了し、両腕を十字に組んで必殺光線をスカルゴモラに向けて発射した。
「シュワァッ！」
二つの光線が、ぶつかり合う。どちらのものが競り勝つのか、束とクロエ、千冬、蘭、そして箒をはじめとした人々が見守る。
だが次第に、ジードの光線がスカルゴモラのそれに押し出されて行く。ヤバい、このままでは…やられる！
「させるか…」
脳裏に、幼い頃から共に生きてきた千冬、友人である弾や蘭、今は疎遠だが今もどこかで暮らしている幼馴染、自分に力を貸してくれた束の顔が浮かぶ。それが、踏ん張る一夏に力を与えていく。
こんな奴に…俺の大事な人たちを、街を…

奪われてたまるか！
「ウオオオオオオオオオ!!!」
ジードの力が最大に爆発、彼の目の光と赤黒いオーラがさらにスパーク。光線は更に肥大化してスカルゴモラの光線を押し返し、そして直撃した！
「〈レッキングバースト〉オオオオオオオオオ!!!」
「ガアアアアアアアアア!!?」
自分の光線を押し返され、モロにジードの光線を食らったスカルゴモラは悶え苦しんでいく。
「ウア…ッ！」
そして、限界を迎えてジードは弾かれるように仰け反る。同時にスカルゴモラは前のめりに倒れ、木端微塵に爆発し砕け散った。
ＩＳを退け、街を蹂躙した怪獣をジードが倒したのを見て、思わず街の人たちは歓喜しかけたが、すぐにそれはジードへの恐怖と疑心によって収まってしまった。
「はぁ、はぁ……」
カラータイマーの点滅がさっきよりもさらに早くなっていた。
息を弾ませ、酷く疲労しているのを露わにしていたジードは、霧のように消えて行った。

箒は、ジードが消えたと思われる地点を訪れていた。
しかし、その場に一夏と思われる人物の姿は見つからない。ジードとなった彼やスカルゴモラの足跡や、戦いによって破壊されたビルの残骸などがあるだけだった。
「一夏…」
まるで、夢か幻から目が覚めたような感覚だった。
何かがあったのは間違いないのに、最初からウルトラマンも怪獣もいなかったような焦燥感を抱いた。今まで彼が何をしていたのか、話したいことがあった。それ以上に、聞きたいことがあった。なぜあの姿に…ウルトラマンの姿になったのか。自分の知らない間に、彼の身にいったい何が起きたというのか。

とにかく、彼を探そうと足を速め、街の中を駆け抜けた。彼に何があったのか確かめるために。

スカルゴモラが倒されてから数時間後…

たくさんの建物が倒壊させられ、直ちに復興作業が行われていた。

町の一角で、スカルゴモラに変身していたあの少女が、酷いダメージと疲労で、ビルの影にうずくまっていた。

「くそ…織斑一夏…」

自分の敗北を認めたくないのか、彼女は悔しさと怒り、憎悪で身を焦がそうとしていた。

だが、彼女はどういう経緯で一夏の名前を知ったのだろうか。同時に、なぜジードの正体が一夏だと最初から気づいていたのか。

『なにやってんだM！任務中に熱くなりやがって！』

すると、彼女の耳に付けられた通信機から怒鳴り声が聞こえてきた。今度は、かなり荒っぽい女の声だった。

『あのプリュンヒルデの餓鬼は殺すなって言われてただろ！あまつさえリトルスターの回収にも失敗しやがって！』

「…気の短い貴様と一緒にするな」

『あぁ!?』

言い返されて通信先の荒っぽい女が声を荒げる。

『おやめなさい。二人とも』

だが、そんな彼女を制するように、今度は穏やかながらも、どこか不穏さを感じる女の声だ。

『ともかくリトルスターの宿主も特定し、今回の「織斑一夏を「ウルトラマン」に覚醒させる」ことはできたわ。

M、あなたへの織斑一夏への過剰な攻撃に対する咎めは、あなたの帰還後に…Mr．フクイデにどうするかは決めるわ。今回の任務の傷を治療するためにも、すぐに戻りなさい』

Mと呼ばれた少女への通信は、そこで切れた。

「…余計な御世話だ」

少女は歯を食いしばりながら、誰にも気づかれることなくその場を

後にした。

夢を見ていた。
当時のことを、ただ純粋に愛する妹のために命を捨てた男、五反田弾はそのように語っていた。
夢の中で、冷たい風が窓から吹いてくる中、ただただ目覚めぬ眠りにつき続け、訪れた死の闇の中に身をゆだねていた。
そんな彼のもとに…

『見てたぞ。お前、自分の命を顧みずに妹を庇ったんだな』

…一つの光が語りかけてきた。

『正直お前の動きには感動を覚えたぜ。親父と同じ名前なだけあって、見かけ以上に度胸あんじゃねぇか。
こんな妹思いの兄貴、死なせるには惜し過ぎるぜ』
眠る弾に向けて語りかけながら、その光は…昼間千冬の前に現れた、あのウルトラマン…ゼロの姿となった。
『俺はベリアルとの戦いでまだ怪我が完治していねえ。人間の姿になる余裕もない。だから、俺がお前の中に入って命を共有させる。そうすりゃお前はもう一度生きることができる。
その代り…俺の都合に突き合せちまうことになる。無理言ってることになるが、すまないな。
でも、信じてくれ。お前を二度も死なせるつもりはねぇ。次の戦いができるまで時間はかかるが、全力でお前の力になる。だから……お前の体をちょっと借りさせてくれ』

ゼロは、ゆっくりと弾にのしかかるように、彼の体の中に自ら吸い

込まれていった。

　戦いが終わった直後、束によって一夏は秘密基地へ回収された。初めてのウルトラマンとして変身し戦闘を行ったことで、彼の疲労はいつも以上に溜まり、戻ってすぐに彼は微睡の中に落ちた。
　翌日、一夏は戦闘時のダメージの影響、および変身の際に彼の体に何かしらの後遺症のようなものがないか確かめるべく、束の手によってメディカルチェックを受けていた。
「…うん、見たところ何も異常はないみたい。疲れてどっぷり寝ちゃってたのも、体の方が戦いに慣れていなかっただけって見るべきかな」
　特に問題はないそうなので、一夏は一安心する。
　その後、クロエが出現させた電子モニターに再生されている朝のニュースで、変身した自分がスカルゴモラと戦う姿を見ることになったが…
『怪獣を撃破した第二の巨人の行方は、最初の個体同様不明のままです。付近の住民や避難者の人々から、ウルトラマンベリアルが復活したと、不安の声を上げています』
「あれが…俺…？」
「はい、あれが一夏様の変身していたウルトラマンです」
　ウルトラマンジードの鋭い目のせいで一気にヒーローらしからぬイメージを与えるその姿に、少なからずショックを受けていた。束にもらった二つのウルトラカプセルのうち、ベリアルのものを見つめる。
「でもこれ、ベリアルのカプセルも使ったから…なんだよな」
　束が言っていた。ライザーを使って変身したら、使用したカプセルに準じた姿に変身するのだと。なら、他のカプセルを使えば、こんないかつい姿にはならないはずだと一夏は考えた。
「…うぅん。予測だけど、それはない」
「え？」

束からの否定に、一夏はキョトンとする。
「いっくんのあの姿は、君の体にあるウルトラマン因子の影響…つまり遺伝によるものなんだ。衣装替えして人の印象が変わっても、その人の顔全部が整形されたように変わるわけじゃないように、どんなカプセルを使ったところであの顔は変わらないよ」
「なんでそんなこと言い切れるんだよ。束さんが自分で言ってたじゃないですか。つかったカプセルに合わせた姿になるって。だったら…」
「確かに言ったよ。全部私が言った通り。でも、それでも…うぅん、だからこそ、いっくんのウルトラマンとしての顔があんな風なのは必然なんだ」
「必然って…」
何かを言い返したくなるような衝動を覚え始めたその時、一夏の持っていた携帯電話から着信が入った。すぐに電話に出ると、とたんに千冬の怒鳴り声が彼の耳に突き刺さった。
『おい一夏！今どこにいる!?こんな朝早くからどこをほっつき歩いてるんだ!?』
「千冬姉…！」
そうだ、思えば自分は昨日の夜から自宅を出たっきりになっていたんだった。自宅に戻って、友人の死をきっかけに意気消沈だった弟がいなくなったなんて、千冬ほどの人間でも慌てない方がおかしい。それでいて怒っているようにも聞こえる姉の声に、そのことを一夏は思い出した。
すると、束が「貸して」と一夏に一言いうと、この人に説明した方が速いか…と思った一夏は自分の携帯を束に託す。
「やっほー、久しぶりちーちゃん」
『束!?』
突如昔馴染みの声を聴くことになるとは予想していなかったのか、千冬の驚く声が聞こえた。
『なぜお前が一夏と……そうか、もしやとおもったが、やはりそういうことだったか』

一瞬弟と束が一緒であることに驚きを露わにしていたが、どうしてかすぐに納得を示した。
『束、私はお前に頼んだはずだぞ！一夏をあんな戦いに巻き込むなと…！』
「千冬姉…!?」
今の姉の口ぶりを聞いて、一夏の中に疑惑が生じた。巻き込むなと、頼んだはず？
「どういうことだよ千冬姉…まさか、知ってたのか!?俺が…いや、俺たちがウルトラマンの血を引いていたってことに!?」
『っ…それは……』
「答えろよ!!」
弟からの反撃を仕掛けるような質問返しに、千冬が喉を詰まらせた声が聞こえる。
「いっくん、落ち着いて！ちーちゃんは悪くないんだから」
傍らに寄ってきた束が、一夏に落ち着くように言う。電話を持ったまま、束の方を見やる一夏は、血眼になって今度は彼女に問い詰めた。
「束さん、あんたは俺たちの母親が、自分の科学者としての師だったって言ってたよな。知ってるなら教えてくれよ！一体俺たちの親は何者なんだ!?どうして千冬姉は知ってたのにそれを頑なに隠し続けてきたんだ!!どうしてだ!?」
「……」『……』
束も、電話の向こうの千冬も押し黙る。とにかく本当のことを話すのに、とてつもない抵抗を感じているようだ。
すると、横からクロエも話に割って入って束に勧めてきた。
「束様、ここは…まだお伝えしていない真実もお話しするべきかと。この方が中々に意地を張るタイプであることは、束様もご承知のはずです」
「クーちゃん…」
重大なことを隠されていると知られた以上、きっと聞くまで絶対に引き下がらない。クロエの言葉に押され、束は改めて千冬に言った。
「ちーちゃん、本当の事話そう。二人のご両親について」

『…わかった。だが、これは本来織斑の家の者の問題だ。私の口から話す』
　それから間もなく、千冬が束の秘密基地に招かれた。
　千冬は、一呼吸を置いたのち、一夏に向けて……自分たちの親についての真実を離し始めた。
「かつて私たちの母『織斑春七』は、科学者として高い技術力と知識を持ち合わせていた。束でさえ驚くほどのな。だが、それ故に異端の烙印を押されていた人でもあった。自分の才をどれほど疎まれようとも、あの人は自分以外の誰かのために、人の生活を豊かにするための研究を続けてきた。その際に父と出会い、私が生まれた」
「……」
　その父が、自分がウルトラマンであるきっかけになった人なのだろうかと、一夏は予想した。そのように考えているのだろうと、束とクロエは一夏の顔を見て察する。だが束は、その予想が崩れ去ることを知っていた。
「だが、私と束が6歳の頃だ。クライシス・インパクトが起きたのは」
　悪夢の出来事を思い出し、千冬の目に、当時の光景が蘇る。
　炎の中に包まれる街。父と母と共に、炎の中を駆け巡りながら、少しでも安全な場所を求めてさまよい続けていた。周りから、ウルトラマンたちと、ベリアル軍の戦いに巻き込まれ、炎の中に消えていく人たちの悲鳴が聞こえた。幼い少女が見るには、一生残るほどのトラウマを刻み付けるに十分だった。
「私は二人と共に、ただひたすら逃げていたよ。何もできず、恐怖に慄く自分を呪いたくなるくらいに。そして…それを決定づけることが起きた」
「何が…あったんだ？」
「父が、私と母を庇って、瓦礫の下敷きになって死んだんだ」
「!?」
　このタイミングで、父が死んだという話を聞いて一夏は絶句した。しかも、よりによって弾と同じ死に方をしていたとは。
「その後は束から聞いているな？あるウルトラマンの手によって、こ

のクライシス・インパクトは、初めからなかったことのようになったという話は」
　千冬からの問いに、一夏は頷く。それを確認した千冬は話を続ける。
「地球が元に戻ってから、私はあの時の恐怖を払い強くなりたいと思い、篠之乃道場の門を叩いたよ。剣道でどうにかできるなんてさすがに思わなかったが、それでも恐怖を忘れるために強さを求めた。束と出会ったのもその時だったな」
　普段なら「これが束さんとちーちゃんの運命の出会いなのだ～♪」と無邪気なことを言うはずの束は、何も言わなかった。ただ話を聞いていく内に、その顔に影が差し始めていた。
「母もまた、似たようなものだった。父の死もあってクライシス・インパクトの出来事をはっきり覚えていたあの人は、ベリアルによるクライシス・インパクトの再発を防ぐために、今度は人を守るための武器と盾になる何かを設計し始めた。そしてそれは、こいつの父からの反発で母に弟子入りした束によって、完成したんだ」
「まさか、それがＩＳ？」
　一夏からの問いに千冬は頷き、そして束は肯定した。
「そう、正確にはＩＳは束さんだけで作り上げたものじゃなくて、春七さんと束さんの共同発明品だったんだ。そしてそれは……ある人の支えなくしてできないものでもあったの」
「ある人？」
「…母の新たな夫、つまりお前の父だ」
「あ…」
　一夏はそこで気が付いた。クライシス・インパクトで死んだとされた母の夫、だがその時自分は生まれていなかった。つまり…その男と自分は血がつながっていないということになる。
「俺と千冬姉は、父親が違う…ってこと？」
「ああ。そしてその父親が地球の人間ではないことも、昨日のお前が自分で証明している」
　千冬にそう言われ、一夏はライザーとウルトラカプセルを見つめ

た。母の二人目の夫、その人が…自分がジードとなる力を遺伝という形で授けたウルトラマンなのだと悟った。まさか異父姉弟だったとは。千冬は自分と違い、ウルトラマンの血は引いていないのだ。
「その人は…クライシス・インパクトで記憶を失った人間だった。それを母が不憫に思って、自らの傍らに置いて『織斑四季』の名前と戸籍を与えた。
彼は記憶こそ失っていたが、かつて科学に精通した身だったらしく、助手となって束や母の技術力に追い付くどころか、二人共に驚かされるところも見せたことがあった。
夫を失った母、記憶を含めたすべてを失った男。そして科学者同士。その接点が、いつしか二人を結びつけて、お前が…一夏が生まれた。
私も彼を第二の父として、慕い始めていた。
だが……」

「その男こそが、すべての元凶だったんだ」

「え……」
千冬の険しい表情とその言葉に、一夏は戦慄した。
「ある日、織斑四季の知り合いを名乗る男によって四季は記憶を取り戻し、本性を現したんだ。邪悪な心に満ちた…薄汚い悪の本性を。
あまつさえその男は、私たち全員を自分の野望のために利用しようとした。その前に、母は自ら奴らを足止めするために…ただ一人残った…束に、私たち二人を逃がすように頼んでな」
嫌な予感がする。その先に…自分から求めていたはずなのに、聞きたくない真実があるような気がした。しかも、千冬と自分の父は別人。しかも自分の父は、自分にこの力を授けた種族、『ウルトラマン』の者。
その男が記憶を取り戻して、悪に戻った…!?
自分がスカルゴモラと戦うために変身したあの姿と、気づいてしまった真実が結びついた。確信を得た一夏の体が震え、表情も青ざめ

ていく。
「まさか…」
悪のウルトラマン、そんなの一人しか思い当たらない。
そう、ただ一人だけ…

「まさか……
…そんな…
…嘘だ…
…そんなのウソだ…そんなこと…

そんなことあるもんか…」
「……一夏、認めたくないのはわかるが…これは真実なんだ。お前の父、織斑四季の正体は……」

『ウルトラマンベリアル』だ。

ありふれ×ウルトラマントリガー

超古代。宇宙は邪悪な闇によって混沌の渦に呑まれていた。
数々の星が闇に飲み込まれ、無へと帰していった。
地に足を付けねば生きられない人々は、星から離れて逃げることもできず、闇に溶かされ滅ぶのを待つのみだった。
しかし、宇宙の彼方より光の巨人たちが現れ、人々を守るべく邪悪な闇に立ち向かう。
熾烈を極める戦いの果て、光の巨人たちは邪悪な闇を打ち倒すも、力を使い果たした。
力を失った巨人たちは、己の肉体を石像へと変え、自身は光となって宇宙へと消えていった。

３０００万年の月日が流れる。

太陽系第３惑星。地球。
紛争や戦争が終結して各国が団結したことで文明が急速に発達、宇宙開発に乗り出した人類だが、それを期に空想の産物と思われた怪獣の脅威や宇宙人の侵略という危険に晒される。
人類は、これらに対抗すべく地球平和同盟＝ＴＰＵを設立。各都市に戦闘エキスパート『ＧＵＴＳ―ＳＥＬＥＣＴ』を配備し、防備に当たる。
彼らの活躍もあり、人類はひとまず滅びの運命から逃れることができた。

しかし、彼らにとって予想外の魔の手が、日本のとある高校の一クラスに伸びた。
その高校はある日の昼休み、教室にいた一クラス分の生徒たちと担当教師の一人が一斉に消息を絶った。

異世界トータス。
姿を消した学生たちは、そこにいた。
彼らをこの世界に召喚したのは、トータスの神『エヒト』。
同じ星にて対立する種族『魔人族』の手から人類を救ってほしいという目的で彼らを召喚したのだという。
だが、呼び出しただけならまだしも、高校生たちは自分たちの意志で地球に戻ることができないとされた。
地球へ帰るには、魔人族と呼ばれる者たちと命を賭して戦わなければならない。
信心深き教皇からそのことを聞いた彼らは、あまりにも横暴で勝手な神の行いと、故郷から無理やり引き?がされた自分たちの未来に絶望する。
生徒たちの間に絶望が立ち込める中、それを打ち破ったのが一人の男子生徒。
『天乃川光輝』という男だ。
容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能で、男女問わず彼を信頼する者が大半であり、女子から何度も告白を受けたことがある。また正義感も強いため、困っている人がいると助けに向かう頼れる男だという。
彼は自らそのカリスマ性とリーダーシップを駆使し、この世界の人類を救えば地球へ帰れるとクラスメイトたちを落ち着かせ、自ら戦いに志願する。
彼のカリスマ性に惹かれ、それに続くように次々と生徒たちは彼に賛同して戦いに臨む。
担当教師である『畑山愛子』は反対した。彼らはたかが学生。戦争、人殺しの経験などあるはずもなく、ましてや魔人族と戦ったところで地球に戻れるという保証はないのだ。
しかし、光輝の存在に依存しきっている生徒たちは愛子の制止をまともに聞かず、戦争に参加することになったのだ。
その中で、愛子に賛同する一人の生徒がいた。
南雲ハジメ。
自他ともに認めるオタクの男子生徒。成績はそれなりだが、運動神

経等も含め、スペック的には光輝に遠く及ばない。それどころか、授業中に何度も寝てしまうことがあったという態度の悪さ。
とはいえ、彼の人格が悪いというわけではなく、寧ろめんどくさがりながらも人柄の良い少年である。
しかし、オタク＝気持ち悪いという愚かな概念に囚われた同級生たちは彼を快く思わなかった。
戦争に反対する愛子に賛同して反対の声を上げるが、空気を読めと他の生徒たちから反発を食らう。
他にも彼を快く思わない理由があった。女子生徒のマドンナと評されている一人、白崎香織から好意的に接してもらうことへの妬みである。
不真面目オタクの分際で、と多くの生徒たちがハジメを差別したのである。当然愛子も生徒同士仲良くするべきと主張するが、彼女の童顔低身長な見た目のせいか全く効果を現さなかった。
見かねた香織が皆にやめるように、そしてハジメの意見を尊重すべしと言うが、結局ハジメの意見は誰にも聞き入れられず、彼らは『神の使徒』として魔人族との戦争に参加することになった。

自分たちが、どれほど軽率で楽観的だったのか、それを思い知らされることになる。

生徒たちが訓練に参加してしばらく経過したある日、トータスにて怪獣が現れるようになったのである。

生徒たちは、この世界に召喚されたと同時に、魔法や強力な身体能力、技能を得た。所謂チート能力だ。
これを駆使し、国の騎士団と協力し怪獣と戦うことになった。
自分たちは無敵の力を得た。ＧＵＴＳのように怪獣から人々を守れるだけの力、欲望を満たすだけの力を得たのだと確信していた。

それが、若さゆえの…しかし同時に現実が見えていなかった愚かさ

であった。
怪獣の力はあまりにも兄弟で、生徒たちはおろか、騎士団の力で叶うような相手ではなかった。次々と騎士団が傷一つ追わせられず殺されて行ってしまい、自分たちの力に舞い上がっていた生徒たちの多くが戦意喪失してしまう。
僅かに残った生徒たちの中、光輝は親友の坂上龍太郎、八重樫雫、そして香織をはじめた仲間たちと結束して怪獣を倒そうとするが、とてもかなう相手ではなかった。

しかし、そんな彼らの危機を救いに現れた者が現れた。

光の巨人『ウルトラマン』である。
地球にて、邪悪な怪獣や侵略者と戦う正義のヒーローの登場に、神の使徒たちは衝撃を覚え、同時に歓喜に震えた。もう彼がいれば大丈夫だと。

騎士団や使徒が束になっても勝てなかった怪獣を、あっという間に蹴散らしてしまった。

その雄大な背中に、光輝は強い憧れを抱いた。俺もあんな風にかっこよく強くなりたい、と。

だからこそ理解できなかった。

あれから幾度も怪獣が現れ、そのたびに自分たちが人を守るべく戦いに挑む時、ウルトラマンも現れ、力を合わせて怪獣を倒す。そんな日々を幾度か繰り返したある日…

光輝は知ってしまった。ウルトラマンの正体が誰なのかを。

目の前の光景が現実と思えなかった。

しかし、たった今この目で現実のものとして己の目に映っていた。
怪獣の攻撃から、香織が逃げ遅れた子供を助けようとした時だ。その時、怪獣の攻撃はもはや香織が逃げ切れるような余裕のあるものではなかった。たとえ魔法で防御しても、簡単に破れてしまうだろう。それでも香織は逃げず、子供を抱きしめながら魔法で障壁を作る。
光輝はそんな香織を助けようと走り出す。限界を超えた身体能力を駆使してひたすら走るが、とても間に合わない。

そんな時だった。
自分の横を、ハジメが通り過ぎた。
なぜ彼がこんなところに!?驚く光輝をよそに、ハジメは愛用の銃をY字型に変形させた。
彼は錬成師という非戦闘職。身体能力も平均的で、他の皆と違って物作りが得意なだけの、ただの平凡な人間であった。
一瞬だが考えている間に、ハジメはY字型に変形した銃を頭上に掲げた。
途端、彼はまばゆい光に身を包んだ。あまりの眩しさに光輝は咄嗟に目を塞ぐ。目を閉ざす瞬間、ハジメの姿は光に包まれると同時に、何か別の姿へと変わっていった。
光が晴れ、何とか目を開けるとハジメの姿は消え、光の巨人ウルトラマンが目の前に現れた。その手には、怪獣に殺されかけた香織と子供が共に乗っている。
優しく地上へ二人を下ろしたウルトラマンは、怪獣と相対する。
ウルトラマンはその強力な光の力を持って、苦戦こそしたが怪獣を見事撃退する。
戦いが終わると同時に、ウルトラマンはその身を縮めるように消えていく。
消えた場所へ香織が向かうと、後に続くように光輝も向かう。

そこで、光輝は信じられないものをその目に映した。
小さくなったウルトラマンが、ハジメの姿になったのである。

彼の姿を確認するや否や、香織はハジメを強く抱きしめる。
頭が混乱した。
なぜ？　いったいどうして？
なぜ南雲が？
だってあいつは、寝てばかりのオタクで、成績も顔立ちも普通、運動神経だって自分と比べると大したことはない。努力などしているなんてとても思えない。この世界に来た時だって、皆が訓練時間外も自主的に訓練しているのに図書館に引き籠ってばかりじゃないか。
それに香織と仲良くなるような要素なんてないのに、話しかけてくれる香織の優しさにいつまでも甘え続けている、そんなやる気も協調性もない劣等生だ。
自分が知るウルトラマンには遠く及ばない存在だ。
だってウルトラマンは、高潔で孤高、無敵で完璧の超人だ。そんな彼だから自分も憧れを抱いた。南雲なんかとは全然違う。
そんなウルトラマンのように自分もなりたくて、日々訓練を欠かさずこなしている。南雲よりも遥かに強いし、大切な幼馴染たちだって自力で守れるのだ。

なのに…なぜ……

なぜ香織はそいつを選ぶ？

俺を選ぼうともせず、なぜ？

なぜ…なぜその力をお前が持っている？

なぜだ……なぜ？なぜ？

「なぜお前が……お前がウルトラマンなんだ!!!!!

南雲おおおおおおおおおおおおおおお!!!」

○ここでの登場人物設定（予定）

・南雲ハジメ

ウルトラマントリガーの変身者。原作のように奈落に落ちず、魔王化を回避している。

高校1年の頃、光輝や檜山との対人関係が原因で起きた『ある事件』が起きたことで学校を休学。その間は両親の仕事の手伝いをする一方、創作活動のネタ探しの一環で様々な知識を取り込み、それを利用して自作ゲームを制作したり、対怪獣災害にて役に立つ武器や道具を考案していく。それらがＧＵＴＳ―ＳＥＬＥＣＴの装備や訓練シミュレーターとして活かされたことで開発担当隊員として抜擢された。技師なので基本前線に赴かないが、場合によっては赴くため、日々激しい訓練に励むことになり、結果的に原作以上にたくましさを得た。

訓練はきついが、ＧＵＴＳ―ＳＥＬＥＣＴの隊員たちは理解がある人達のため高校生活と比べて断然心地よい日々だった。

一方で光輝や檜山たち小悪党とのいざこざや、その原因でもあった香織との確執もあって高校生活にはできれば戻りたくなく、戻るなら別の高校でやり直したいと思っていた。

香織のことは嫌いではなかったものの、上述の二人との関係もあって複雑な胸中。

ある日、「南雲が香織を脅している」という檜山の卑劣な嘘を真に受けた光輝や檜山たちによって理不尽にぼこぼこにされてしまい、それを香織に庇われるも、全く察そうともしない香織にも怒りを覚えてしまい、彼女を突き放す暴言を言い放ってしまう。しかし騒動の後、もとをただせば自分がやや生活習慣面の問題を放っていたがために同級生たちから見下されていた、事なかれ主義を通そうと自分がいじめられる理由を治そうともせず無視し続けたことがそもそもの原因で

もあったことに気づき、自分を慮ってくれていた香織に当たってしまったことを以後後悔するようになる。
火星での任務中、そこに眠っていたとされる巨人像と一体化し、ウルトラマントリガーとなって怪獣たちと戦う日々を送るようになる。
高校2年生になったある日、通っていた高校にて謎の電波をキャッチしたため、その調査のために復学。特に光輝からの恨みの視線、檜山たちからの卑劣な嘲笑、香織からの距離感を詰められない視線にさらされながらも任務にあたるが、その矢先にトータスへクラスメイト達と共に転移させられてしまう。
トータスでの壊獣との初戦にて、自分を守ろうとする香織を見てかつての事件のことを謝罪、和解した直後、目の前でトリガーに変身する。
原作における魔王化キャラは、後に香織が檜山に殺された際の闇落ち状態とする。

・白崎香織
本作におけるメインヒロイン。
基本は原作と同じだが、檜山たち小悪党や、彼らの嘘で暴走した光輝とハジメたちのいざこざが原因で、自分がハジメがいじめられる原因だと知り、ショックを受ける。復学したハジメとどう接すればいいのかわからずにいた。
ハジメが復学するまでの間、しょっちゅう光輝からのうわべだけの慰みや檜山からのアプローチを受けているが、不快感を覚え無視している。
トータスに転移後も、どうすればハジメに対して償えるか苦悩していたが、怪獣出現の際に罪悪感もあって、咄嗟にハジメを怪獣の攻撃から守る。
その際、ハジメから謝罪を受け和解、自分の気持ちを伝え、死を覚悟で怪獣に挑もうとするが、その直後にハジメがウルトラマントリガーとなるのを目の当たりにする。
原作通り檜山に一度殺され、ユエによって新たな肉体を得て蘇生す

るが、その際に予想もしなかった超古代の祖先の力に目覚めることになった。

・ユエ

原作ヒロイン。タイミング的にやや遅れてる形で仲間となる。

大迷宮攻略の際にハジメや光輝たちに封印を解かれ助け出される。その際は光輝から優しい言葉をかけられたこともあって光輝になびこうとしたが、しばらく経つうちに光輝のいびつさに気づき、その後は原作通りハジメになつくようになる。

闇に落ちたハジメ＝トリガーを救うキーパーソンとなる。

・天乃川光輝

当初は原作通り。

檜山の嘘を真に受け、檜山たちと共にハジメに暴力を振るってしまい、香織や雫との仲が悪化してしまう。許しを得ようとするが、香織からの許しはハジメが復学する1年以上にもわたって叶わなかったが、このことも原作通りのご都合解釈でハジメのせいだと決めつけていた。その一件において檜山からは謝罪を受けたことであっさり許してしまい、それもあって香織や雫との関係悪化に拍車をかけてしまう。二人との関係悪化の一方で、恵理から声を掛けられ、仲良く接するようになる。

ＧＵＴＳ―ＳＥＬＥＣＴや、彼らと共闘するウルトラマントリガーに憧れを抱くが、ＧＵＴＳ―ＳＥＬＥＣＴ隊員たちからは身体能力を評価されている一方、ハジメを通した非戦闘員への無自覚な見下し発言や、ハジメに対する対応の仕方が原因で精神面の危うさを指摘されてるほか、個人的にも隊員たちから嫌われてしまっているが本人は気づいていない。

トリガーの正体がハジメだと知り、香織との関係や力の差を痛感、一転して嫉妬と憎悪を抱くようになる。

後にその心の闇を、ある人物に利用され……

※想定ではやや早い段階で改心予定

・檜山

原作通り。1年の頃から香織に接してもらっているハジメを嫌っており、光輝に嘘を付いて炊きつけ、後ろ盾を得る形で彼に暴力を振るうが、香織たちからそのせいで無視されるように。

ハジメを同じタイミングで奈落に落とそうとするが、ウルトラマンであるハジメがあっさり戻ってきてしまい、人隠れてかんしゃくを起こす。

その後、ある人物との協力で香織を殺害し、自分の操り人形として蘇生させようとするが、怒りで闇に染まったハジメの怒りを買ってしまうこととなる。

ハジメを殺して香織を今度こそ手に入れるべく、協力者と共に『ある力』を手にする。

後にその力を持ってしてもトリガーに敗北、トータスの民たちからも、かつてのクラスメイトからも、敵勢力からも見放されて孤独にさまようが……